

中国共产党
第十一回
全国代表大会
文献集

中国共产党
第十一回
全国代表大会
文献集

外文出版社
北京



英明な指導者華国鋒主席

中国共产党第十一次全国代表大会



中国共産党第十一回全 国代表大会の会場



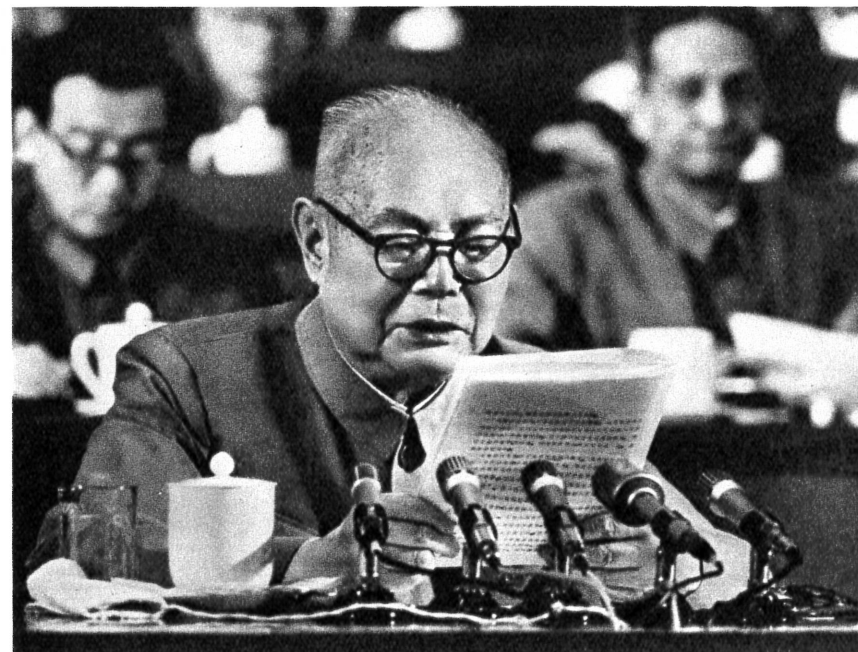
中国共産党中央委員会を代表して政治報告をおこなう華国鋒主席



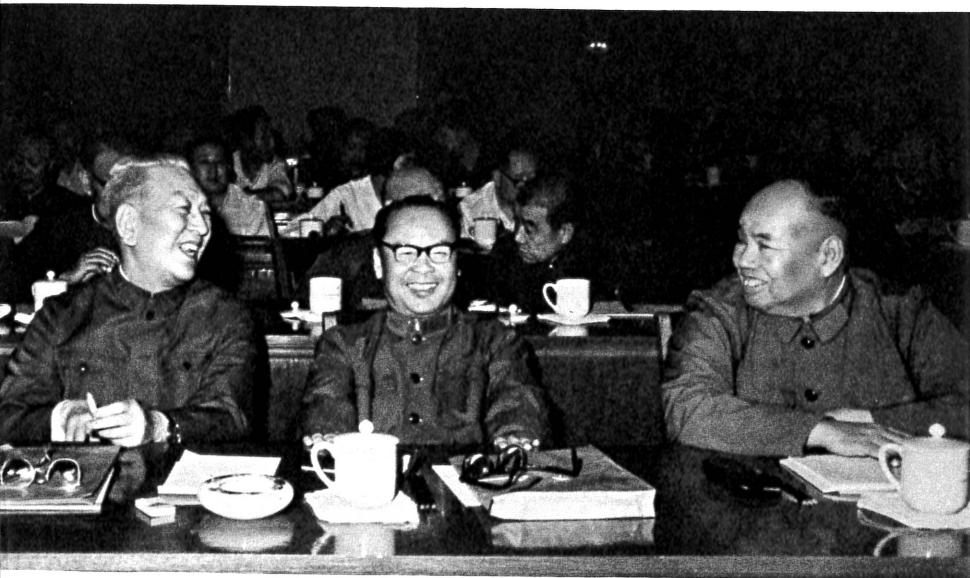
英明な指導者華国鋒主席と葉劍英、鄧小平、李先念、汪東興副主席が主席台にあがったとき、全員起立、あらしのような拍手がしばし鳴りやまなかった



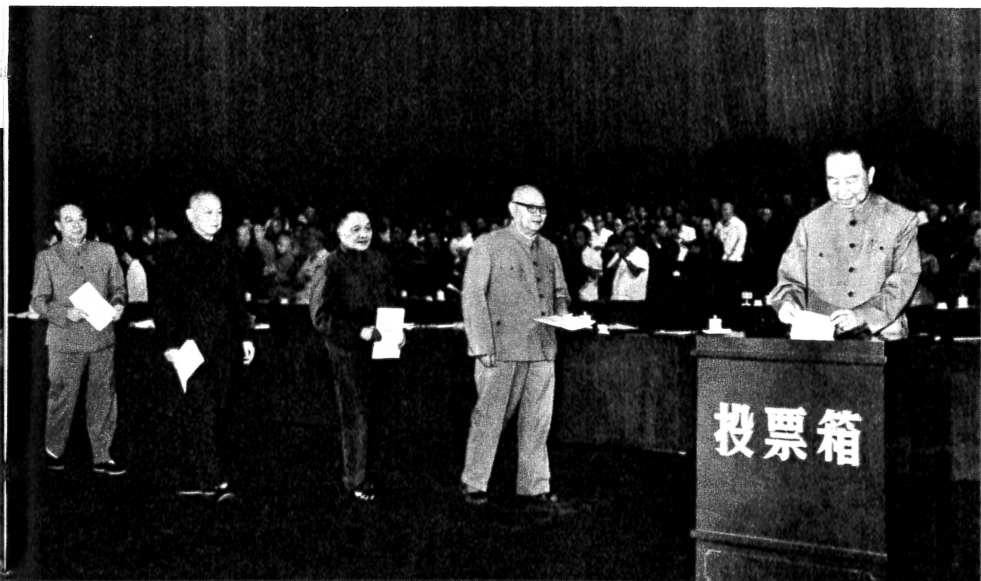
中国共産党第十一回全国代表大会で閉幕のことばをのべる鄧小平副主席



中国共産党中央委員会を代表して党規約改正についての報告をおこなう葉剣英副主席



中央政治局委員韋國清(中)、許世友(右)、耿飈(左)三同志



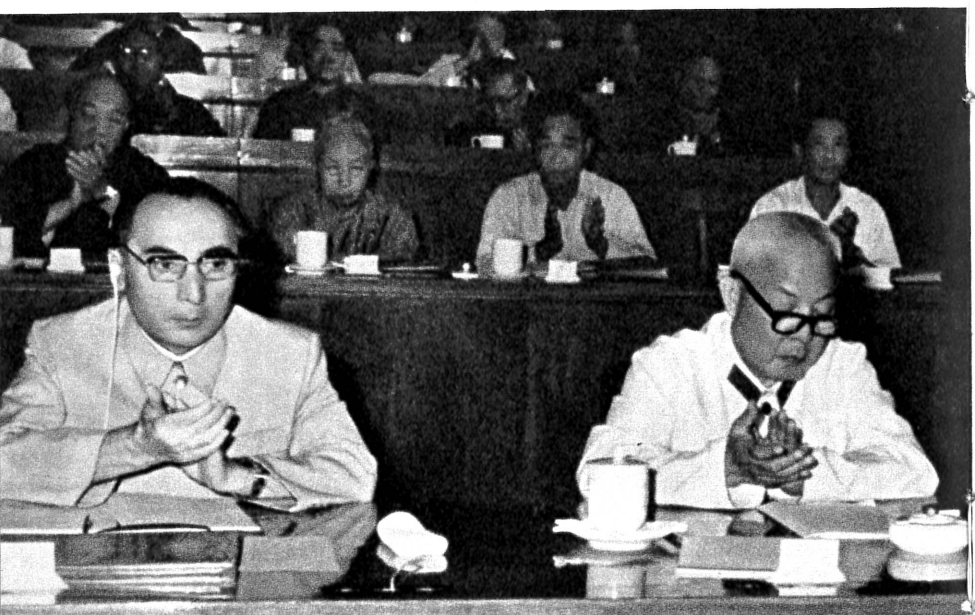
中国共産党第十一期中央委員会の選挙にあたって投票する華国鋒主席と葉劍英、鄧小平、李先念、汪東興副主席



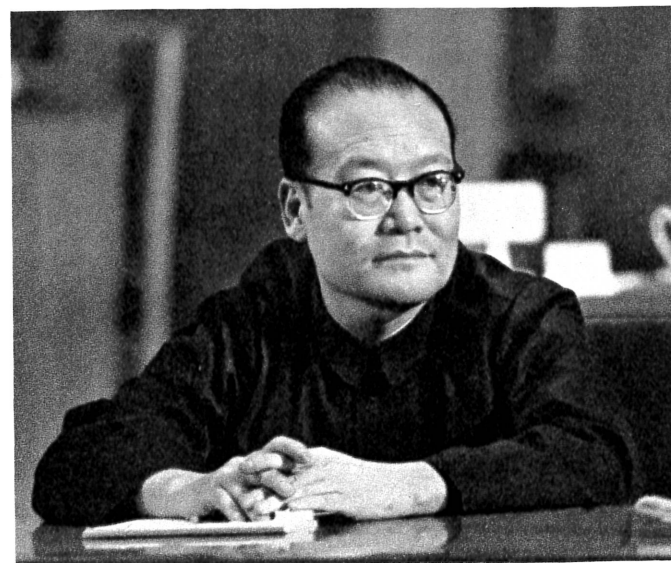
中央政治局委員劉伯承同志



中央政治局委員烏蘭夫(右)、方毅(左)兩同志



中央政治局委員蘇振華(右)、委員候補賽福鼎(左)兩同志



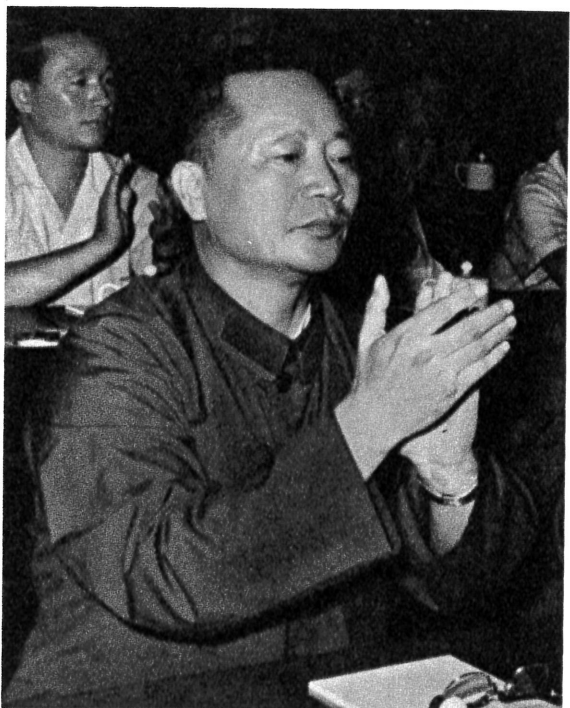
中央政治局委員紀登奎同志



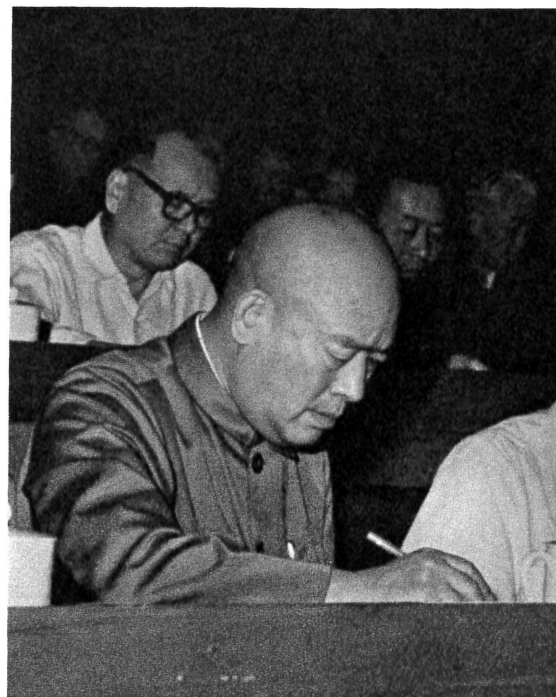
中央政治局委員吳德(右)、陳錫聯(左)兩同志



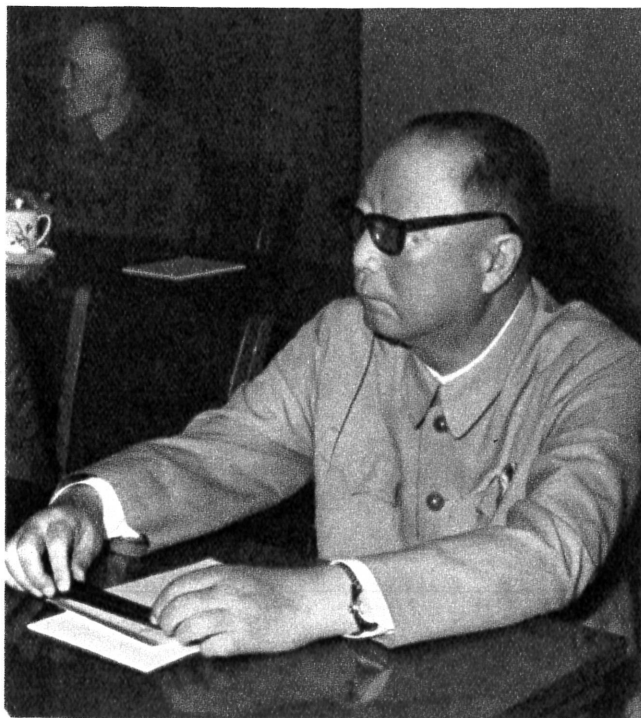
中央政治局委員李德生同志



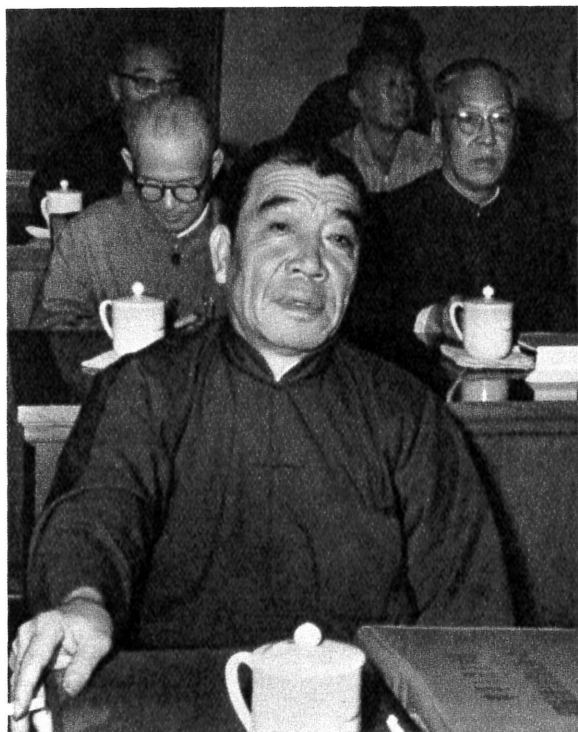
中央政治局委員張廷發同志



中央政治局委員余秋里同志



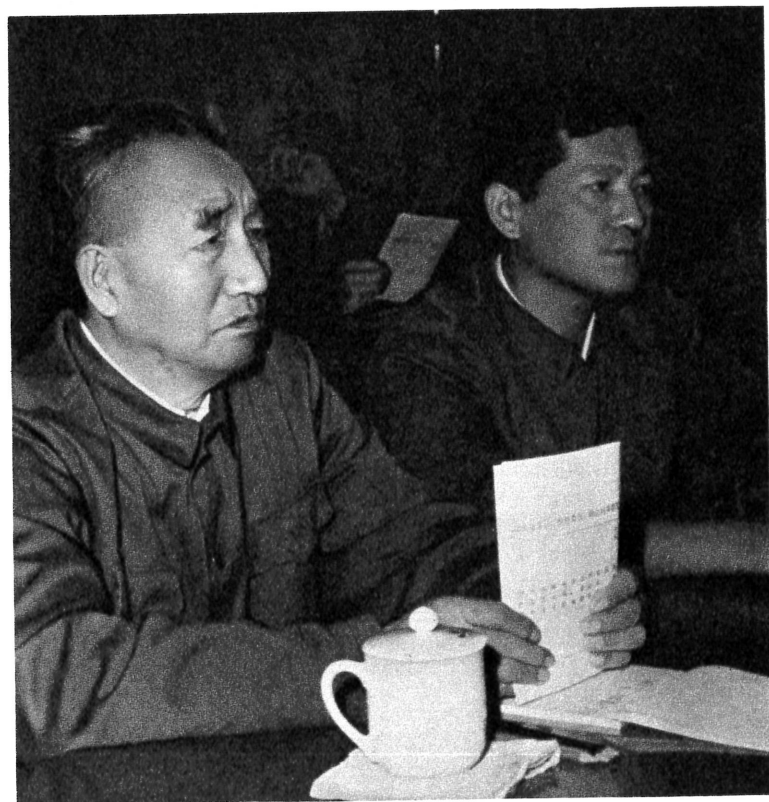
中央政治局委員聶榮臻同志



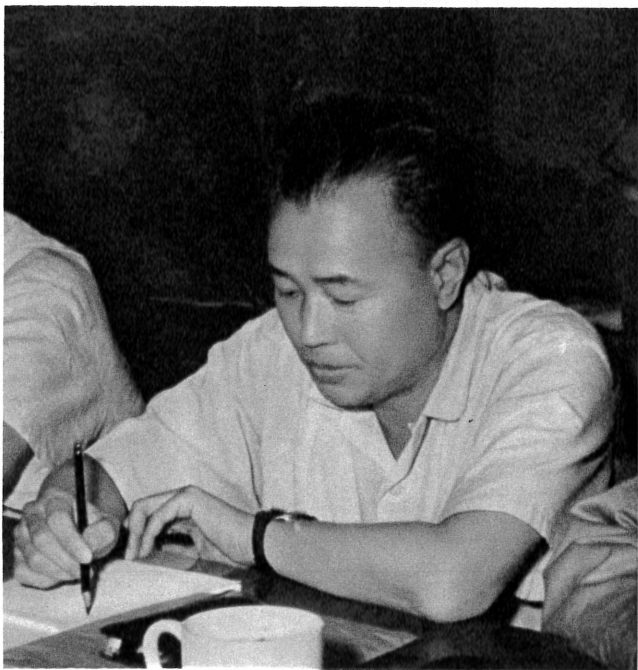
中央政治局委員陳永貴同志



中央政治局委員彭冲同志



中央政治局委員倪志福(右)、徐向前(左)兩同志



中央政治局委員候補趙紫陽同志



中央政治局委員候補陳慕華同志



中国共産党第十一期中央委員会第一回総会の会場

目次

中国共産党第十一回全国代表大会における政治報告……………	華国鋒……………	1
(一九七七年八月十二日に報告、八月十八日に採択)		
中国共産党第十一回全国代表大会の政治報告にかんする決議……………		85
(中国共産党第十一回全国代表大会で一九七七年八月十八日に採択)		
中国共産党規約……………		89
(中国共産党第十一回全国代表大会で一九七七年八月十八日に採択)		
中国共産党第十一回全国代表大会における党規約改正についての報告……………	葉劍英……………	105
(一九七七年八月十三日に報告、八月十八日に採択)		
中国共産党第十一回全国代表大会における閉幕のことば……………	鄧小平……………	139
(一九七七年八月十八日)		

華 国 鋒

中国共産党第十一回 全国代表大会における 政治報告

(1977年8月12日に報告、8月18日に採択)

中国共産党第十一回全国代表大会の新聞公報
(一九七七年八月十八日)

145

中国共産党第十一回全国代表大会主席団の名簿
中国共産党第十一期中央委員会の委員と委員候補三百三十三名の名簿

166 163

中国共産党第十一期中央委員会第一回総会の新聞公報
(一九七七年八月十九日)

171

中国共産党第十一回全国代表大会における政治報告

(一九七七年八月十二日に報告、八月十八日に採択)

華 国 鋒

同志のみなさん！

中国共産党第十一回全国代表大会が、ここに開幕した。

まず、わたしは次のように提案したい。

昨年逝去された、わが党、わが軍、わが人民共和国の創設者で、わが国のプロレタリア階級と各民族人民の偉大な指導者であり教師である毛沢東主席に哀悼の念をささげて、

昨年逝去された、わが国人民の偉大なプロレタリア革命家で、多年の試練にたえぬいた、毛主席の親密な戦友である、われわれの敬愛する周恩来総理、朱徳委員長に哀悼の念をささげて、

十回大会いらいおよびそれ以前の数年のあいだに逝去された、わが国人民の革命事業に卓越し

た功績をたたえたプロレタリア革命家である康生同志、董必武同志、李富春同志、陳毅同志、賀龍同志に哀悼の念をささげて、

また、この期間に逝去された、党と革命に大きな貢献をしたすべての中央委員ならびにその他の同志に哀悼の念をささげて、

全員起立、黙禱。

同志のみなさん！ 偉大な指導者であり教師である毛主席が永眠されてからまもなく一年になる。半世紀あまりのあいだ、毛主席はわが党、わが軍、わが国の各民族人民を指導して、党内の右と「左」の日和見主義とのするどい複雑な路線闘争のなかで、帝国主義、地主・買弁ブルジョア階級に反対するこのうえなくきびしい革命戦争を経て、新民主主義革命の完全な勝利をかちとり、つづいてまた、プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだで繰り返された激闘を経て、プロレタリア文化大革命を経て、社会主義革命と社会主義建設の偉大な勝利をかちとった。毛主席は、偉大な、光栄ある、正しい中国共産党を創立、育成し、英雄的な人民解放軍を創設、錬磨し、プロレタリア階級独裁の社会主義の新中国を創建、建設した。五十数年にわたる中国革命の歴史がしめしているように、われわれのおさめたすべての勝利はみな毛主席の指導のもとに、毛主席の革命路線のみちびきのもとにかちとられたものである。毛主席の旗じるしこそは、

中国人民の革命の勝利の旗じるしである。

現代の国際共産主義運動のなかで、毛主席は、徹底した唯物論者のなにもものをも恐れぬ革命的気概をもって、ソ連修正主義裏切り者集団を中心とする現代修正主義を批判する偉大な闘争をおこし、世界のプロレタリア革命事業と諸国人民の帝国主義反対、覇権主義反対の事業のめざましい発展を促し、全世界の真のマルクス・レーニン主義者および全世界の革命的人民から尊敬され、愛慕された。毛沢東思想の旗じるしは、世界人民の革命の勝利の旗じるしでもある。

毛主席は、現代のもっとも偉大なマルクス主義者である。毛主席は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を、中国革命と世界革命の具体的実践に結びつけて、哲学、政治経済学、科学的社会主义の分野でマルクス・レーニン主義をうけつぎ、まもり、発展させた。社会主義の時期における、毛主席のマルクス主義にたいするもっとも偉大な貢献は、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の体系的な理論をつくりあげたことである。毛沢東思想は、新民主主義革命と社会主義革命、社会主義建設をすすめる中国人民の行く手を照らす燈台であり、帝国主義、社会帝国主义、各国反動派に反対する世界人民の強力な思想的武器であり、修正主義に反対し、教条主義と経験主義に反対する共産党員の強力な思想的武器である。毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義の理論的宝庫のもっとも新しい財産であり、毛主席がわれわれの時代に残したもっとも貴

重なる遺産である。

毛主席が革命理論と革命実践の面で、中国人民のため、全世界のプロレタリア階級と革命的人民のためにうちたてた偉大な功績は、永遠に不滅である。

われわれはかならず毛主席の偉大な旗じるしを高くかけ、断固としてこれをまもりぬかなければならない。これは、われわれ全党、全軍、全国各民族人民の神聖な責務であり、われわれが団結してたたかい、ひきつづき革命をおこなううえでの政治的基礎であり、わが国の社会主義事業と国際プロレタリア革命事業を前進させるうえでの勝利の保証である。われわれは、自分自身そうしなければならぬのはもちろんのこと、子孫にたいしてもそうするように教えなければならぬ。われわれはかならず毛主席の偉大な旗じるしを伝家の宝として、代々伝えていかなければならない。毛主席の偉大な旗じるしは、とこしえにその光を放つであらう。

同志のみなさん！ 今回の代表大会は、わが党が偉大な指導者であり教師である毛主席を失った状況のもとで、また、王洪文・張春橋・江青・姚文元反党集団粉砕の闘争が偉大な勝利をおさめた状況のもとで、繰り上げてひらかれたものである。今年七月にひらかれた党の第十期中央委員会第三回総会は、団結の会議であり、勝利の会議であった。総会は、わが党の歴史上に重要な意義をもつ四項目の決議を採択し、「四人組」粉砕の偉大な勝利の成果をうち固め、発展させ

て、われわれの今回の代表大会招集のために政治面、思想面、組織面で十分な下地をつくつた。

われわれはいま、重要な歴史的時点に立っている。今回の代表大会は、重大な歴史的責務をになつている。それはつまり、毛主席の偉大な旗じるしを高くかけ、毛主席の遺志を受け継ぎ、王・張・江・姚「四人組」との闘争を総括し、党の基本路線を堅持し、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命を堅持し、党内党外、国内国外のあらゆる積極的要素を動員し、団結できずすべての力と団結して、かなめをつかんで国を治めるといふ戦略的決定を実現するために、また今世紀中にわが国を偉大な社会主義の現代化された強国にきずきあげるために奮闘することである。

わが党の十一回目の路線闘争

わが党と王・張・江・姚「四人組」反党集団との闘争は、わが党の歴史における十一回目の重大な路線闘争である。こんどの路線闘争は、プロレタリア階級とブルジョア階級との生死をかけた大格闘であり、わが党、わが国の前途と運命にかかわるものである。こんどの路線闘争の偉大な勝利の功績は、偉大な指導者毛主席に帰すべきであり、偉大な毛沢東思想と毛主席の革命路線

に帰すべきであり、われわれの偉大な党、偉大な軍隊、偉大な人民に帰すべきである。

四年前、偉大な指導者毛主席みずからの主宰のもとに、党の第十回全国代表大会がひらかれた。十回大会の政治路線と組織路線はいずれも正しいものである。早くも文化大革命の初期に、

「四人組」は林彪反党集団と結託して、プロレタリア文化大革命を破壊していた。十回大会らしい、「四人組」は十回大会の路線に反対し、極右の反革命修正主義路線をおしすすめてきた。かれらは反革命陰謀集団である。かれらは、「マルクス主義をやるのであって、修正主義をやっているのではない、団結するのであって、分裂してはならない、公明正大であって、陰謀術策をめぐらしてはならない」という基本原則に根底から反対し、修正主義をやり、分裂をはかり、陰謀術策をめぐらした。かれらは、毛主席が政治運動をおこす度ごとに、それに名を借りて別個のやり方をおしすすめる、運動の方向をねじまげようと、党、軍隊、国家の攪乱かくらんを扇動した。かれらは、さまざまな陰謀の口手を弄して、毛主席ならびに毛主席をはじめとする党中央に反対し、毛主席の革命路線に反対し、党と国家の最高権力をのっとって、マルクス主義の中国共産党を修正主義の党に変え、われわれのプロレタリア階級独裁をブルジョア階級のファシズム独裁に変え、社会主義の中国をふたたび半植民地、半封建の国家に転落させようとたくらんだ。

われわれの毛主席は英明かつ偉大で、「四人組」の反党活動を早くから察知しており、なんどもかれらにたいして厳正な批判ときびしい警告をあたえ、みずからわが党を指導してかれらと再三にわたる闘争をおこなった。

一九七四年一月、「四人組」は毛主席に無断で、また中央政治局の討議にもかけずに、林彪批判・孔子批判に裏口取引批判をからませて、三本の矢をいっせいに放ち、奇襲攻撃をかけ、毛主席のさだめた林彪批判・孔子批判の戦略的配置を破壊した。毛主席はただちに「四人組」を批判して、「形而上学がはびこっている」とのべ、しかもかれらの誤りをただすため、全党に文書を配布した。「四人組」は毛主席の批判にさからって、林彪批判はやらす、偽りの孔子批判をおしすすめる、「周公」批判、いわゆる「現代の大儒」批判、いわゆる「孔子の弟子ども」批判に狂奔し、また軍隊で「火を放って荒野を焼く」などということをかかぬおこなない、そのほか先を周恩来総理と葉劍英副主席にむけ、中央と地方の党、政府、軍隊の数多くの指導的同志にむけた。

一九七四年七月十七日、毛主席は中央政治局会議で江青をきびしく批判して、「鉄鋼工場、レッテル工場という二つの工場はやめたまえ。なにかとうとうとすぐ他人に大きなレッテルをはりつけるのはよくない」「おまえもなかなか改めないものだ」とのべた。毛主席は「上海グループ」を批判して、「あれ（江青を指す）も上海グループのうちにはいる。きみたちは注意しなければ

いけない、四人の小派閥にかたまってしまうてはいけない」とのべた。毛主席は一再ならず「江青は自分自身を代表できるだけで、わたしを代表してはいけない」「要するに、江青が代表できるのは自分自身である」とのべた。こうして毛主席は、王洪文、張春橋、江青、姚文元の反党分派活動の問題をとりあげ、北京にいる政治局の全同志のまえで（病氣欠席者は除く）、「四人組」にきびしい警告を發したのである。

しかし、「四人組」はいささかも悔い改めようとはしなかった。第十期中央委員会第二回総会と第四期全国人民代表大会をひかえて、かれらは派閥をつくり党をのっとる策動に拍車をかけ、組閣して権力を奪いとうろたとくらんだのである。かれらはやっきになって密謀、画策し、一九七四年十月十七日、政治局に内密で王洪文を長沙にさしむけ、毛主席に周総理と中央のその他の指導的同志を誣告したが、毛主席のきびしい叱責をうけた。このはかりごとが破れると、かれらはまたもや一計を案じ、江青が出馬して毛主席に手紙を書いた。十一月十二日、毛主席はこの手紙に「あまり出しやばってはいけない、文書に指示などを書いてはならない、おまえが組閣（黒幕となる）してはならない。おまえはずいぶん恨みを買っている、多数の人と団結しなくてはならない。くれぐれも言うておく」という指示を書き入れた。江青は戒めに耳をかさず、こんどは人に託して、王洪文を全国人民代表大会常務委員会副委員長にするよう毛主席に申し出た。

毛主席は、「江青は野心がある。王洪文を委員長にし、自分自身は党の主席になるつもりでいる」とずばりと指摘した。十二月二十三日、毛主席はまた、「江青は野心がある。どうだろう、わたしの見るとこの野心がある」と指摘した。二十四日、毛主席はふたたびかれらを批判して、「派閥をつくってはいけない。派閥をつくればきつとつまずく」とのべた。毛主席はさらに、「きみは四人組をつくってはいけない」と面とむかって王洪文を批判した。毛主席は、第四期全国人民代表大会と國務院の人事を周総理に一任することを決め、鄧小平同志を党中央副主席、國務院副総理、中央軍事委員会副主席兼総參謀長に任命することを提案し、そのごさらに、鄧小平同志に、周総理の病の重いあいだは中央の日常の仕事を主宰するよう委託した。こうして、「四人組」の組閣と奪権の陰謀は失敗に終わった。

「四人組」は自分たちの失敗に甘んじなかった。一九七五年三月と四月、かれらはプロレタリア階級独裁の理論の学習についての毛主席の重要な指示にそむき、修正主義が当面の主要な危険であるという毛主席の教えに反対して、経験主義が当面の主要な危険であるときかんにわめきたて、老幹部に「経験主義」のレットルをはりつけ、周総理と中央のその他の指導的同志に打撃をあたえようとした。張春橋は、公然と経験主義反対を「かなめ」にすることを提起した。江青はいたるところで、経験主義が「当面の大敵」であると言いつらした。姚文元も論文を發表し

て、毛主席の指示を公然と歪曲し、毛主席は十数年らい「主要な危険は経験主義である」となん回もくりかえしのべている、などとデマをとばした。姚文元はまた、ある宣伝計画に経験主義批判の内容を書きこみ、毛主席の承認をだまし取ろうとした。かれらの計略を見ぬいた毛主席は、四月二十三日、この宣伝計画に重要指示をしたためて、「四人組」の誤りを批判した。毛主席は次のように指摘した。「提起のしかたは、修正主義反対であるべきだと思われる。ここには、経験主義反対も、教条主義反対も含まれる。両者は、ともにマルクス・レーニン主義を修正するものである。一方だけをとりあげて、他方を見逃がすようではいけない」「わが党には、ほんとうにマルクス・レーニン主義がわかっているものは多くない。一部の者は、自分ではわかっていると思いこんでいるが、その実、さほどわかっているとはいえない。そのくせ、自分が正しいと思って、なにかという人と人を叱責する。これもマルクス・レーニン主義がわかっていないことの現われである。」

一九七五年五月三日、毛主席は、中央政治局会議の席上でふたたび「四人組」の反党分派活動を批判し、「マルクス・レーニン主義をやるのであって、修正主義をやってはならない、團結するるのであって、分裂してはならない、公明正大であって、陰謀術策をめぐらしてはならない。四人組をつくってはならない。そんなことは、もうやめたまえ。なぜ、いまだにつづけているの

か。なぜ、二百名余りの中央委員と團結しないのか。少数のものがかたまるのはよくない。いつでもよくないことなのである」ときびしく警告した。毛主席は、修正主義をやり、分裂をはかり、陰謀術策をめぐらすという「四人組」の急所をつかんで「三つのやるべきこと、三つのやってはならないこと」をくりかえし強調し、「三カ条を信ぜず、わたしの言うことにも耳をかさず、この三カ条をすっかり忘れてしまっている。九回大会でも、十回大会でもこの三カ条を強調したが、もう一度みなどで討論してもらいたい」とするどく批判した。毛主席は、政治局にこの問題を討議するようはっきり指示し、「四人組」の問題は「今年の前半に解決できなければ、後半に解決する。今年解決できなければ、来年解決する。来年解決できなければ、再来年に解決する」と強く指摘した。これは、かならず「四人組」の問題を解決するという毛主席の決意をしめしている。

毛主席の指示にしたがって、鄧小平同志の主宰のもとに、政治局は「四人組」をきびしく批判した。これと相前後して、毛主席の承認を経て、政治局は「四人組」の攪乱、破壊に対処するための一連の文書を出して、各方面の活動にたいする党の指導を強化し、毛主席の革命路線を貫徹した。

一九七五年七月、毛主席は党の文学・芸術政策を調整することについて、二回にわたって重要

な談話をおこなった。七月二十五日、映画『創業』の問題について重要な指示をおこなった。『創業』は大慶の労働者の革命精神を反映したよい映画である。ところが「四人組」は工業は大慶に学ぶということに反対し、十大罪状なるものをでっちあげて、『創業』を一撃のもとに葬り去ろうとした。毛主席は、『創業』の作者からよせられた手紙に、「この映画には、大きな誤りはない。上映を許可するよう提案する。完全無欠を求めるのはよくない。しかも、罪名が十カ条もあるのは、あまりにも行きすぎであり、党内の文学・芸術政策を調整するのに不利である」という指示を書いた。毛主席の指示は、党の文学・芸術政策を破壊する「四人組」をきびしく叱責したものである。

「四人組」は毛主席の何回にもわたるきびしい批判を受けたあと、時々刻々ひそかに方向をさぐり、巻きかえしの機をうかがった。一九七五年八月、毛主席は『水滸伝』という小説について透徹した論評をおこなった。乗ざる機があるとみた「四人組」は、下心をもってこれを歪曲して、毛主席を誹謗し、党中央の分裂をはかる悪どい宣伝をさかんにおこなった。九月に農業は大寨に学ぶ第一回全国会議がひらかれたさい、毛主席の同意した議題は全国は大寨に学び、大寨型の県を普及させるというものであった。ところが江青は大寨で、『水滸伝』の「急所は宋江が屍蓋をながしろにしたことである」などとさかんにまくしたてて、暗に周総理と鄧小平同志を攻

撃し、また、農業は大寨に学ぶ全国会議で自分の発言の録音を流せとか、その発言原稿を印刷して配布せよなどと無法な要求を出した。このことをきいた毛主席は激怒して、「何を言うか、的はずれにもほどがある」と江青の発言を叱責し、「原稿を配布してはならない、録音を流してはならない、発言を印刷してはならない」と明確に指示し、「四人組」の反動的な気炎をくじいた。

敬愛する周総理の逝去前後になると、「四人組」はまたもや気違いじみた策動にのりだした。かれらは、周総理をほしいままに攻撃するとともに、周総理に哀悼の念をあらわす広範な幹部と大衆を抑圧し迫害した。かれらは、毛主席の指示にそむいて、別個のやり方をとり、鄧小平同志に打撃をあたえ、無実の罪におとし入れた。上海にいる「四人組」の徒党は、張春橋の総理就任を要求する大きなスローガンを公然とほり出した。王洪文は、自分が中央の仕事を主宰するようになったさいの演説原稿をひそかに用意した。われわれの毛主席は、どんなことがあっても「四人組」には総理をやらせず、中央の日常の仕事を主宰させないという、きわめて明確な確固たる態度をしめした。一九七六年一月二十一日と二十八日、毛主席が相前後してみずから提案し、また中央政治局の承認を経て、國務院総理代理ならびに中央の日常の仕事の主宰についての人事が確定した。二月二日、毛主席は、國務院総理代理を決定することについての中央文書にみずから

署名しその配布を指示した。四月七日、ふたたび毛主席みずからの提案で、また中央政治局の承認を経て、党中央第一副主席と國務院総理の人事が確定した。中央に第一副主席を設けるのは、わが党の歴史にかつてなかったことである。これは、毛主席の重大な戦略的決定であり、たとえ毛主席の病が重い場合でも、逝去された場合でも、われわれの党と国家の指導権が「四人組」の手に握られることがないよう保証したのである。毛主席の一連の重要な指示と英明な決定は、党をのっとり権力を奪取する「四人組」の陰謀に手痛い打撃をあたえ、のちにわれわれが「四人組」の問題を解決するうえでの基礎をきずいた。

毛主席が決定した上述の人事に、「四人組」は憎悪の炎をもちやした。張春橋が人目をばばかりながらひそかに書いたあの『一九七六年二月三日の所感』は、その動かしがたい証拠である。かれらは重大な失敗をなめると、十倍もの狂暴さと百倍もの憎しみをもって反撃にのりだし、毛主席、党中央の指示にさからって、党をのっとり権力を奪取するその陰謀活動に拍車をかけた。新聞や雑誌でも、談話のなかでも、かれらは、老幹部は「民主派」であり、「民主派」はすなわち「走資派」である、という反革命的な政治綱領を公然とうち出し、反革命の扇動、世論づくり、勢力の糾合に狂奔し、毛主席の革命路線を堅持する中央と地方のおおぜいの指導的同志をことごとく打倒してしまおうとした。

毛主席は、自分の死後「四人組」が騒ぎをおこすことを予見していた。一九七五年のはじめ、毛主席は江青を批判したとき、「わたしが死んだら、あの女は騒ぎをおこすだろう」とのべた。果たせるかな、一九七六年毛主席の病状が悪化すると、「四人組」の反党活動はいっそう目に見えるものとなった。当時、政治局の同志は、毛主席の健康にひびかないようにと大局を考え、原則を堅持することを前提として、自制の態度をとった。毛主席が逝去されると、時機到来とみた「四人組」は、政変をいそぎ、待ちきれずに党と国家の最高指導権をのっとりとうとした。九月十一日、かれらは、党中央に内密で、各省・市・自治区にたいし、重要な問題はかれらに報告し指示を仰ぐよう勝手に通達し、党中央と全国各地との連絡をたちきり、かれらの指令で全国を動かそうとくわだてた。かれらは、江青にたいする「忠誠表明状」や「即位要望書」を書くよう公然と動員し、またひそかに連絡をとった。王洪文は、政権の座についたときに使う「肖像写真」をひそかにつくった。かれらは、八方で策動し、デマをとばし、よこしまな風を吹かせ、よこしまな火を燃やし、党中央に反対するよう扇動するとともに、かれらの就任を祝う「盛大な祝日」の準備にとりかかったのである。十月のはじめ、張春橋は、「反革命を鎮圧する」「人を殺す」とメモに書いた。かれらは上海で、大量の兵器弾薬を大急ぎでくばり、武装反乱をおこそうとくわだてた。いっそう悪らつなのは、「既定の方針にしたがって事をはこぶように」という毛主席の

「臨終のこぼ」なるものを捏造して、党機関紙の社説に書きこみ、つづいて新聞や雑誌でこれをくりかえし宣伝する一方、毛主席の「三つのやるべきこと、三つのやってはならないこと」という原則は、これをこぼんで宣伝しなかった、ということである。十月二日、かれらの捏造が党中央によってあばかれると、十月四日、こんどはいわゆる「永遠に毛主席の既定の方針にしたがつて事をはこぼう」と題する反党論文を持ちだして、「毛主席の既定の方針を改ざんするのは、マルクス主義を裏切り、社会主義を裏切り、プロレタリア階級独裁のもとでの継続革命の偉大な学説を裏切るものである」などと言い、「いかなる修正主義の頭目であろうと、敢えて毛主席の既定の方針を改ざんするならば、決してよい末路はない」とわめきたてた。これは、公然と党中央転覆の反革命の動員令を下したことにほかならない。果たしてかれらは、騒ぎをおこし、クーデターをやるうとしたのである。この危機一髪の時点で、中央政治局はじめて果断な措置をとる、党をのっとり権力を奪取する「四人組」の陰謀を一挙に粉碎し、「四人組」の問題を解決するという毛主席生前の考えを実現した。

「四人組」は党と国家の最高権力をのっとりたくらみ、中国で歴史の歯車を逆転させ、資本主義を復活させようと夢みだが、それには深い階級の根源と歴史的根源とがある。張春橋は国民党の特務分子であり、江青は裏切り者であり、姚文元は階級異分子であり、王洪文は新たに生

まれたブルジョア分子である。「四人組」は、わが党にもぐりこんだ新旧反革命分子からなる黒い一味である。かれらは、地主、富農、反革命分子、悪質分子と新旧ブルジョア分子の、わが党内における典型的な代表であり、わが国で資本主義を復活させようとする国内国外の階級敵の望みを集中的に反映している。「四人組」がおしすすめた反革命修正主義路線の極右の本質、かれらのあらゆる犯罪的活動は、いずれもその反動階級の本性によって決定づけられたものである。党と国家の最高権力をのっとり「四人組」の陰謀とかれらの反革命の経歴についての証拠資料は、すでに全党、全軍、全国人民に配布された。これらの資料にある確実な証拠と、くつがえすことのできない結論は、わが党と「四人組」との矛盾が敵味方のあいだの矛盾であることをあますところなく立証している。「四人組」に反対する闘争は、中国共産党およびその指導下にある広範な革命的人民大衆と国民党反動派との長期にわたる闘争の継続であり、プロレタリア階級とブルジョア階級との階級闘争の継続であり、マルクス主義と修正主義との闘争の継続である。

党の十期三中総は、全党、全軍、全国各民族人民の要求にもとづき、また党規約の規定にもとづいて、王洪文、張春橋、江青、姚文元を永遠に党から除名し、かれらを党内党外におけるすべての職務から解任し、かれらの反共、反人民、反革命の犯罪行為を徹底的に清算する決議を一致採択した。

同志のみなさん！ マルクス主義の哲学、政治経済学、科学的社会主義を全面的に改ざんした「四人組」は、マルクス主義理論のベールをかぶった反革命陰謀集団である。レーニンは、「歴史の弁証法によって、マルクス主義の理論的勝利は、その敵にマルクス主義者に仮装することを余儀なくさせた」とのべている。毛主席のプロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の偉大な理論が、プロレタリア文化大革命を経て人びとの心にいつそう深く根をおろし、億万大衆にとって勝利の戦闘をすすめる輝かしい旗じるしになったため、「四人組」はとりわけ念入りにプロレタリア階級独裁下の継続革命の理論の擁護者に仮装し、この偉大な理論を看板にかかげてこの偉大な理論を改ざんし、これによって、党をのっとり権力を奪取し、プロレタリア階級独裁をくつがえし、資本主義を復活させるその反革命の政治陰謀に役立てようとしたのである。わが党の十一回目の路線闘争は、思想理論上からいえば、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の理論を堅持するか、それとも改ざんするか、という問題をめぐってくりひろげられたものである。これが、こんどの路線闘争の重要な特徴である。

周知のように、毛主席の、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命についての偉大な理論は、マルクス主義の発展史においてとくに重要な位置を占めている。プロレタリア革命とプロレタリア階級独裁の理論にたいするレーニンの最大の貢献が、資本主義の最高の段階としての帝

国主義の発展法則を明らかにし、プロレタリア革命は帝国主義戦線のもつとも弱い環の一国で勝利することができ、しかも社会主義をうちたてることができるという偉大な理論をつくりあげたことであるとすれば、プロレタリア革命とプロレタリア階級独裁の理論にたいする毛主席の最大の貢献は、レーニン以後のプロレタリア階級独裁の歴史的経験を総括し、マルクスとレーニンの思想をうけつぎ、まもり、発展させ、社会主義社会の発展法則を明らかにし、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の偉大な体系的な理論をつくりあげ、プロレタリア革命に勝利した国家はいかにしてプロレタリア階級独裁を強固にし、資本主義復活を防止し、社会主義を建設するかについての根本的な道をはっきりとさし示したことである。これは、現代におけるマルクス主義のもつとも重要な成果である。

毛主席のこの偉大な理論は、対立面の統一という唯物弁証法の法則を運用して、社会主義社会を観察、分析し、社会主義社会は、相当長期にわたる歴史的段階であって、社会主義というこの歴史的段階においては終始、階級、階級矛盾、階級闘争が存在し、社会主義と資本主義との二つの道の闘争が存在し、資本主義復活の危険性が存在しており、また、帝国主義と社会帝国主義による転覆と侵略の脅威が存在すると指摘している。したがって、この歴史的段階においては、ブルジョア階級にたいするプロレタリア階級の闘争を堅持し、ブルジョア階級にたいするプロレタ

り階級の独裁を堅持し、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命を堅持しなければならない。この理論によって、「階級闘争消失論」と「全人民の党」「全人民国家」といったたぐいの修正主義の謬論は、徹底的に粉砕されたのである。

毛主席のこの偉大な理論は、生産関係と生産力との矛盾、上部構造と経済的土台との矛盾は社会の基本的な矛盾であるというマルクス主義の学説を、社会主義社会に適用して、社会主義社会には、生産関係と生産力とのあいだ、上部構造と経済的土台とのあいだに、照応しながらも矛盾しあっている状態が存在する、と指摘している。生産関係のなかの生産力に照応しない部分、上部構造のなかの経済的土台に照応しない部分は、いずれも生産力の発展を阻害するものである。したがって、上部構造の領域の革命をひきつづきおこない、文化諸領域をふくむ上部構造におけるプロレタリア階級独裁をうち固め、強化して、社会主義の経済的土台に照応させなければならぬ。ひきつづき生産関係の領域の革命をおこない、社会主義共有制と社会主義的生産関係のその他の面をうち固め、発展させて、生産力の発展に照応させなければならない。技術革新と技術革命をおこない、生産力を急速に発展させて、社会主義制度の物質的基礎が日まじに強まるようにし、生産関係と上部構造の発展および変革を推進しなければならない。こうしてはじめて、プロレタリア階級独裁をうち固め、強化し、社会主義の事業をたえず前進させて、最後には、階級

を消滅した共産主義社会に到達することができるのである。

毛主席は、生産手段所有制の社会主義的改造が基本的になしとげられたのちのわが国の社会各階級状況について、科学的な分析をくわえ、社会主義社会における人民内部の矛盾と敵味方のあいだの矛盾を正しく区別し、処理することについての学説を提起した。毛主席は、社会主義革命とは、「いったいどのような階級のあいだの闘争なのか。それはプロレタリア階級が勤労人民を指導して、ブルジョア階級とのあいだに進める闘争なのである」とのべている。労働者階級は、そのもつともたよりになる同盟軍である貧農・下層中農とかくく団結し、それに依拠し、革命的知識分子と団結し、それに依拠し、同時に、上層小ブルジョア階級の多数、ブルジョア知識分子の多数および民族ブルジョア階級のなかの社会主義的改造をうけいれる意志のある人びと、さらにはその他の愛国的民主人士をも獲得し、それと団結して、反動階級、反動派、および社会主義的改造と社会主義建設に反抗するもの、にたいし独裁をおこなうべきである。全国総人口のうち、社会主義に賛成する者は九〇パーセントであり、社会主義に賛成しないか、あるいは反対する者は一〇パーセントであって、このうち、働きかけることによって、さらに八パーセントを獲得することができ、あくまでも社会主義に反対する頑迷派は二パーセントにすぎないことになる。一九五七年における毛主席の一連の輝かしい著作は、このような階級分析のための科学的な

基礎をきずいた。社会主義革命が深まるにもなつて、毛主席はさらに、このような階級分析をたえず豊富にし、発展させてきた。毛主席は、九五パーセント以上の幹部および大衆と団結しなければならぬということを提起し、党内の資本主義の道をあゆむ実権派とたたかうという、体系化された学説をうち出した。毛主席の社会主義社会についての階級分析は、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の性質、原動力、対象などの問題を理論面から系統的に解決したのである。

「四人組」は、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命という毛主席の偉大な理論を全面的に改ざんし、社会主義の全歴史的段階における党の基本路線を全面的に改ざんした。とりわけ党内の走資派という問題で、ほしのままに毛主席の思想を歪曲し、多くの混乱をつくり出した。かれらが持ちだした「老幹部は『民主派』、『民主派』はすなわち『走資派』である」という例の反革命的な政治綱領は、そのもつとも集中的な現われである。党内走資派の問題で、毛主席は果たしてどのように論述しているのか、「四人組」はどのように歪曲し、改ざんしたのか、またどのようにこれらの歪曲と改ざんを利用して、かれらの反革命的な政治綱領をおしすすめ、党をのっとり権力を奪取する陰謀活動をすすめたのかを、ここで見てみよう。

党内走資派の問題についての毛主席の論述は、社会主義社会の階級闘争の状態と特徴にたいするつつこんだ分析を基礎としている。社会主義社会の主要な矛盾は、プロレタリア階級とブルジョア階級との矛盾、社会主義の道と資本主義の道との矛盾である。この矛盾は権力をにぎっている共産党内に必然的に反映し、こうして、党内の資本主義の道をあゆむ実権派が生まれるのである。生産手段所有制の社会主義的改造が基本的になしとげられ、政治・思想戦線におけるブルジョア階級にたいする闘争でもプロレタリア階級が大きな勝利をかちとったとはいえず、古いブルジョア階級がまだ存在しているし、おびただしい小ブルジョア分子がまだたえず資本主義勢力を生みだしており、新たなブルジョア分子がまだたえず発生している。新旧ブルジョア分子は、その活力と影響力からいって、社会ではやはり大きな力である。かれらはかならず共産党内に自己の代理人をさがし求め、資本主義復活の望みを党内の走資派に託すのである。社会主義教育運動とプロレタリア文化大革命運動の重点は、「党内の資本主義の道をあゆむ実権派をたたくことにある」。「社会主義革命をやっているのに、どこにブルジョア階級がいるかを知らない。ほかでもなく、共産党の内部にいる。党内の資本主義の道をあゆむ実権派がそれである」と毛主席は指摘している。毛主席のこの科学的な論断は、スターリンがトロツキー、ジノビエフ、ブハーリンと闘争した経験を総括し、フルシチョフ、ブレジネフがソ連で資本主義を復活させた教訓を総括し、わが党内における走資派反対闘争の経験を総括するなかで、逐次形成され、発展してきたもので

ある。プロレタリア文化大革命で三つのブルジョア司令部を粉砕した闘争は、劉少奇、林彪、王・張・江・姚「四人組」といったあくまで悔い改めない党内の走資派こそ、まぎれもなく資本主義復活の主要な危険であることを、はっきりしめしている。

毛主席は走資派との闘争の必要性を強調すると同時に、わが党の幹部のなかで、走資派は一二にすぎない、とはっきり指摘している。早くも一九六七年に、毛主席はすでに、「圧倒的多数の幹部はみなよい幹部であり、よくないのはごく少数にすぎない。党内の資本主義の道をあゆむ実権派をたたくことは必要ではあるが、それは一にぎりの者である。われわれの幹部のなかで、敵に投降した者、裏切った者、転向した者以外は、圧倒的多数の者はこれまでの十数年、数十年のあいだに、何といってもいくらかよいことをしたのだ。幹部の大多数と団結しなければならぬ」とのべている。

毛主席はまた、二種類の矛盾を区分する学説を走資派との闘争に適用して、「走資派の誤りを犯した人のなかで、あくまで悔い改めないものは少数であり、教育をうけられて誤りを改められるものは多数である。『走資派』といえば、すべてがわるい人だというように思ってはならない」と指摘している。これは、党内闘争についての毛主席の学説の社会主義時期における発展である。建国いらいの党内闘争の実践がしめすように、走資派は、次の二つの部分の者からなっ

ている。一部は、党内にまぎれこんだ裏切り者、特務、反革命分子、階級異分子、墮落変質分子、新たに生まれたブルジョア分子といった階級敵である。もう一部は、思想的にまだ民主主義革命の段階にとどまっている人をもふくめて、ブルジョア世界観が改造されていないため、社会主義革命に賛成せず、はては反対さえしている党内の人である。後の部分の人が走資派の誤りを犯した場合には、次の二つの可能性がある。一つは、改めて立ちなおること、もう一つは改められないことである。少数の者はあくまで悔い改めないで、敵味方の矛盾に属する。多数の者は誤りを改める気持があり、しかも改めることができるので、人民内部の矛盾に属しており、これらの同志にたいしては、かならず前の誤りを後のいましめとし、病をなおして人を救う方針をとらなければならない。

林彪反党集団との闘争のなかで、毛主席は党内の路線闘争の経験を総括して、「マルクス主義をやるのであって、修正主義をやってはならない、団結するのであって、分裂してはならない、公明正大であって、陰謀術策をめぐらしてはならない」という三項目の基本原則をうち出し、党内の走資派を見わかる根本基準をいっそう明らかにした。「四人組」との闘争のなかでも、毛主席はこの根本基準をくりかえしのべている。この基準を堅持すれば、われわれは広範な幹部と大衆をみちびいて、複雑な路線闘争のなかで走資派を的確に識別し、走資派の誤りを犯したが改め

る気持のある同志をふくむ、九五パーセント以上の大衆および幹部と団結して、劉少奇、林彪、「四人組」といったあくまで悔い改めない走資派を徹底的に孤立させ、集中的に打撃をあたえることができるのである。

だれがわれわれの敵で、だれがわれわれの友か、まさにこの継続革命のいちばん重要な問題において、「四人組」は、走資派反対という革命的スローガンをかすめとって、党内走資派の問題についての毛主席の体系的な論述を改ざんし、社会主義の歴史的段階における敵味方の関係を根本的に転倒させてしまった。かれらは、党をのっとり権力を奪取する反革命の目的をとげるために、われわれの党、政府、軍隊の各級の指導的骨幹で、およそ三項目の基本原則を堅持し、毛主席と党中央の指示にしたがい、「四人組」に追従しようとはせず、身をよせようとはしない者になりたいは、それが老年であろうと、中年であろうと、青年であろうと、ことごとく打倒しようとした。老幹部と中年の幹部には「走資派」というレッテルをはりつけ、青年幹部には「投降派」というレッテルをはりつけた。「四人組」の主なホコ先は、各級の主な指導的職務についている革命的な老幹部にむけられていた。批林批孔でのいわゆる「党内の大儒にたいする批判」から、プロレタリア階級独裁の理論の学習でのいわゆる「経験主義反対」にいたるまで、いずれも老幹部をやっつけるためのものであった。その後、かれらはまた、老幹部は「民主派」、「民主

派」はすなわち「走資派」、という反革命的な政治綱領をうち出し、これらの老幹部がわが党内で「一つのブルジョア階級」を形成していると中傷した。これは、わが党の老幹部にたいする悪らつな攻撃であり、またわが党の性質とわが党の歴史にたいする恥知らずな誹謗である。

毛主席が創立し育てあげた中国共産党は、プロレタリア階級の政党である。毛主席のプロレタリア革命路線は、わが党内で支配的地位を占めている。わが党の圧倒的多数の幹部は、毛主席のプロレタリア革命路線を支持し実行している。毛主席は早くから「党内のみにぎりの資本主義の道をあゆむ実権派は、党内におけるブルジョア階級の代表的な人物である」とのべている。毛主席が、ブルジョア階級は共産党の内部に在るというのは、党内の資本主義の道をあゆむ実権派のことをさしているものであり、決してわれわれの党内に一つのブルジョア階級が存在するというのではない。党と国家の最高権力がマルクス・レーニン主義の路線を堅持する指導的中核の手に握られておるかぎり、走資派は党内では一にぎりにすぎず、また、たえず摘発され、粛清されていくので、一つのブルジョア階級を形成することは不可能である。ソ連のように走資派が党と国家の最高権力をのっとり始めて、官僚独占ブルジョア階級が形成され、党もブルジョア階級の政党に変わってしまうのである。毛主席は、走資派とたたかうよう、わが党を教えみちびいているが、これは、走資派が党と国家の最高権力をのっとり、わが党をブルジョア階級の政党に変え

るのを防ぐためであり、同時にまた、社会主義の道を堅持し、走資派の誤りを犯すことを警戒す

るよう、各級の指導的幹部を教育しているのである。わが党は、劉少奇、林彪、「四人組」といったあくまで悔い改めない走資派を、あいついで打倒したが、これは、わが党内におけるブルジョア階級の代表的人物はかならず失敗するものであり、わが党が、長い試練にたえぬき、政治的に成熟したプロレタリア政党としてその名に恥じないものであることを力強く立証した。

わが党の指導する中国革命は、民主主義革命から社会主義革命へ発展する過程を経てきた。わが国の民主主義革命は、プロレタリア階級の指導する新民主主義革命であった。新民主主義革命が勝利したときに立ち立てられた国家は、プロレタリア階級独裁の人民共和国である。建国以来いわれわれのおこなってきた革命は、社会主義革命である。わが党の圧倒的多数の老幹部は、共產主義を実現させるという遠大な理想をいだいて革命に参加したのである。かれらのなかには、小ブルジョアの、ブルジョアの民主主義思想をもつて入党した人が相当いたが、しかし民主主義革命の時期から、すでに党の指導のもとに、毛主席のプロレタリア革命路線の教育のもとに、そして、長期にわたる革命戦争と革命闘争の実践のなかで、一步一步プロレタリア階級の前衛戦士に鍛えあげられてきたのである。社会主義革命の時期になってから、一部の者には、社会主義革命にたいする精神的準備が足りないという問題も存在していたが、しかし、全般的にいて、そ

の圧倒的多数は、毛主席にしたがって継続革命をおこない、学習と実践の鍛練を経て、わが国の社会主義革命と社会主義建設の骨幹となっている。民主主義革命の時期にはブルジョア民主派であり、社会主義革命の時期には走資派になったというような者もいるにはいるが、それはごく少数にすぎない。わが党の圧倒的多数の老幹部は、プロレタリア革命派であって、決してブルジョア民主派ではない。

「四人組」は、民主主義革命に参加した者は「ブルジョア民主派」であり、「民主派から走資派へとすすむのは客観的な必然的法則である」などとデタラメをいい、また、わが党内において、走資派は一にぎりではなく、大量にいたのであり、ごく少数ではなく、一つの「党内ブルジョア階級」を形成しているなどとデタラメをいった。かれらはまた、軍隊のなかの圧倒的多数の老幹部は、「軍隊内の走資派」であるとか、「軍隊内のブルジョア階級」を形成しているなどと中傷した。「四人組」のこうした反革命的謬論によれば、わが国の民主主義革命はブルジョア民主派の指導する旧民主主義革命になってしまおうではないか。われわれが立ち立てた国家はブルジョア共和国になってしまおうではないか。建国以来、われわれは社会主義革命などまったくやらず、ブルジョア民主派の指導のもとに資本主義の道をあゆんできた、ということになってしまおうではないか。われわれの軍隊もブルジョア階級の軍隊ということになってしまおうではないか。わ

れわれの党は、もともとから、ブルジョア民主派の政党であり、いままたソ修のようなブルジョア階級の政党になってしまった、ということになるではないか。これこそ、まったく、理論的にはデタラメも甚だしいものであり、政治的には反動きわまるものである。これは決して走資派に反対するなどというものではなく、われわれの党、われわれの軍隊、われわれの国家のプロレタリアの性格にたいする根本的否定であり、わが党、わが軍、わが国における毛主席のプロレタリア革命路線の支配的地位にたいする根本的否定であり、五十数年にわたって毛主席がわが党、わが軍、わが国民を指導して、中国で社会主義と共産主義を実現するために刻苦奮闘してきた全革命史にたいする根本的否定である。これは徹頭徹尾の反共、反人民、反革命の極右派の謬論である。

「四人組」はまた、毛主席の指示を歪曲し、「ブルジョアの権利の制限」という革命的な看板をかかげて、反革命の策動に血道をあげたのである。かつて民主主義革命に参加し、いまは指導的職務についていることを、「走資派」としてきめつける政治的基準にしたのと同様に、かれらはデタラメにも、級別が高く、俸給が多いことを、「走資派」としてきめつける経済的基準にしたのである。かれらは、党、政府、軍隊の指導的幹部と広範な大衆とのあいだに存在する分配の面での差異を故意に階級的搾取と混同させ、かれらのでっちあげた、党内、軍隊内には「一つの

ブルジョア階級」が存在しているという謬論のいわゆる経済的論拠にしたのである。これはまったく是非を転倒し、黒白を混同するものであって、これらのしるものは、かれらのうち出した、老幹部は「民主派」、「民主派」はすなわち「走資派」という反革命的政治綱領の一構成部分にすぎない。

「四人組」は、その反革命的政治綱領をおしすすめるため、かれらのあやつる宣伝機関を動員して、いわゆる「民主派」「走資派」を上から下まで各段階ごとにつまみだすよう極力扇動した。かれらの御用機関であったもと北京二大大学大批判グループと、もと上海市党委員会執筆グループは、次つぎと長たらしい反動的な論文を発表して、この反革命的政治綱領を持ちあげ、党のつとり権力を奪取する「四人組」の急先鋒をつとめた。かれらが牛耳っていた文学・芸術なるものは、いわゆる「走資派」を描くという名目で、ほしのままに党の指導を攻撃し、醜悪化して、真正銘の陰謀文学・芸術に変わってしまった。かれらの牛耳っていた歴史学なるものは、勝手放題に歴史を偽造し、下心をもって「女帝」を持ちあげ、「宰相」「宰相代理」「現代の大儒」を批判して、昔のものをかれら一味のために役立てるあてこすりの歴史学に変わってしまった。教育面でかれらは、「専攻科目はただ一つ、それは走資派をやっつけるという専攻科目だ」などとまくしたて、青年をだまして「四人組」の手先にしたてようとした。かれらはまた、「唯

生産力論に反対する」という看板をかかげて、あくまで革命に力を入れて生産をうながす指導的幹部を、「走資派」だと攻撃し、自分の持ち場にふみとどまって、生産にはげみ、社会主義建設に大いに力を入れている広範な幹部と労農大衆を、「走資派をかざりたてるものだ」と中傷し、操業停止、生産停止をおとりたて、国民経済を破壊した。「四人組」は、はては独裁機関のホコ先を党内にむけようとして、かれらのいう「民主派」「走資派」を「弾圧」し「銃殺」するなどとわめきたてた。「四人組」はまた、われわれの党を解消し、かれらの「大衆組織」をもってわれわれの党にとって代わらせるなどと公然とまくしたてた。「四人組」は、「走資派反対」という旗をかかげて、陰謀をめぐらし、分裂活動をすすめて、党に反対し、軍隊に反対して、全国を混乱状態におとし入れようとしたのである。

「四人組」は「走資派」の問題について、こんなにも多くのデタラメな理論をでっちあげ、この問題を利用してこんなにも多くの犯罪的な活動をすすめたが、その反革命的な政治目的はきわめてはっきりしている。かれらはおおびらに「現在の革命の対象は、旧社会ではヌカを食べ、抗日戦争では負傷し、解放戦争では鉄砲をかつき、抗米援朝では鴨緑江を渡った民主派であり、現在打倒すべき者は、ほかでもなく、「雪山を越え、湿地草原をよぎった走資派であり、赤い襟章と帽章をつけた走資派であり」「勤勉で、潔白で、裏切り者や特務でもなく、汚職もや

らず墮落もしていない走資派である」などとまくしたてた。これは、この新旧反革命分子の一味わが党、わが軍、わが国の革命にたいして骨身に徹する憎しみをいだいしていることをあからさまに暴露している。かれらは、民主主義革命と社会主義革命のなかでわが党に打倒されたすべての反動階級の、報復をとり復活を夢みるその魂胆をさらけ出したのである。かれらは社会主義革命にたいし、巻きかえしをやろうとしているばかりでなく、民主主義革命にたいしても巻きかえしをやろうとしていたのである。この連中は真正正銘の「地主の復活部隊」である。わが党は、その創立期から文化大革命にいたるまでの、試験にたえてきた老年、中年、青年の幹部層を擁しており、試験を経てきたプロレタリア階級の軍隊をもっているが、これはみな「四人組」が党のとりとり権力を奪取するうえで乗りこえることのできない障害であった。「四人組」がわが党、わが軍のこうした幹部層を打倒しようとしたのは、とりもなおさず、わが党をつぶし、わが軍隊をつぶし、プロレタリア階級独裁をくつがえして、張春橋のいう「王朝の交替」をはかり、「いざれ旧符を新桃に換える」ことによって、別に封建主義、資本主義、修正主義ごちゃ混ぜのかれらの「新王朝」をつくろうとするためである。これが「走資派」問題におけるかれらの一切の謬論の急所なのである。

「四人組」は、毛主席が社会主義の時期におけるわが国社会の、各階級についておこなった科

学的な分析を根底から否定し、「社会主義の時期における階級関係の新たな変動」といったデータラメな理論を持ちだした。かれらのいう「新たな変動」とは、老幹部は「走資派」になり、古参労働者は「既得利益の享有者」になり、青年労働者は「なおさらだめ」で、貧農・下層中農は社会主義革命をやるのに「思想が追いつかず」、知識分子は「九番目の鼻つまみもの」*だということであり、一方、地主、富農、反革命分子、悪質分子、妖怪変化、さらに馬天水、于会泳、遅群、張鉄生、翁森鶴、陳阿大といった政治野心家、裏切り者、新たに生まれた反革命分子、ごろつき、殴打・破壊・略奪をはたらく者が、かれらの依拠するいわゆる「先進分子」である、というものであった。こうして、かれらは社会主義という歴史的段階における敵味方の関係を全面的に転倒させ、自分たちを全国人民と敵対する地位においたのである。

人民を敵にまわすものはかならず人民に打倒される。もし上部構造がふるい生産関係を保護し、新しい生産関係を破壊し、生産力の発展を阻害するならば、人民は立ちあがってそれをくつがえす。これは人類の全歴史によって裏づけられた客観的法則である。「四人組」の一連の理論、路線、政策、思想、世論およびかれらのブルジョア階級の派閥体系は、くさりきった、反動

* 「九番目の鼻つまみもの」とは、地主、富農、反革命分子、悪質分子、右派分子、裏切り者、特務、あくまで悔い改めない走資派など八種類の階級敵の次にかぞえていわれていた——訳注。

きわまる上部構造である。かれらは一時期狂暴をきわめたものの、かれらのこうした上部構造がかくもするどくプロレタリア階級独裁と対立し、社会主義の経済的土台および生産力発展の要求と対立していたため、勤労人民は喜ばなかったし、牛や機械も喜ばなかった。というのは、牛を使い、機械を動かす勤労人民が喜ばないからである。してみれば、人民が立ちあがって、かれらを打倒し葬り去ってしまうのはきわめて当然である。「四人組」の滅亡は歴史的必然であった。

同志のみなさん！「四人組」の粉碎は、わが党の勝利であり、プロレタリア階級の勝利であり、人民の勝利である。この偉大な勝利は容易に得られたものではない。「四人組」は林彪と同じような反革命の二面派である。かれらは長期にわたってその経歴をおおいかくし、狡猾きわまる反革命の二面派の手法をもてあそんで、党の指導的中核にもぐりこみ、党をのっとり権力を奪取する陰謀活動をおこない、党と人民に極めて重大な損害をもたらした。この事実は、反革命二面派がひじょうに危険なものであることを先鋭に物語っている。毛主席の病状の悪化および逝去という特殊な事情、それに「四人組」が地位と権力をにぎっていたという特殊な条件は、こんどの路線闘争をいっそう複雑で困難なものにした。しかし、「四人組」があれほど巧みに偽装し、またあれほど奥深くひそんでいたのに、わが党はついにはかれらを摘発し、歴史のゴミために掃きすててしまったのである。「四人組」粉碎の偉大な勝利によって、わが党は大分裂をまぬが

れ、わが国は「四人組」の陰謀面策した大流血をまぬがれ、わが人民は大災難をまぬがれ、われわれの革命は大後退をまぬがれ、中国という世界革命の根拠地は、いっそう堅固で強大なものになった。これは中国革命にとっても世界革命にとっても、偉大な現実的意義と深遠な歴史的意義をもつものである。それは、わが党が毛主席みずから創立し、育成した党にふさわしく、わが軍隊が毛主席みずから創設し、教育した軍隊にふさわしく、わが人民が毛沢東思想で武装された人民にふさわしいことを、あらためて力強く立証している。

「四人組」を粉砕したことは、プロレタリア文化大革命のいま一つの偉大な勝利である。毛主席は、「こんどのプロレタリア文化大革命は、プロレタリア階級独裁をうち固め、資本主義の復活を防ぎ、社会主義を建設するうえで、まったく必要なものであり、きわめて時宜にかなったものである」と指摘している。ソ連での資本主義復活の歴史的教訓とわが国での資本主義復活の現実的危険にかんがみ、毛主席は比類ない偉大な革命的気魄をもって、プロレタリア階級独裁の歴史上前例をみないプロレタリア文化大革命をみずからおこし、指導したのである。この政治大革命を経て、わが党は九回目、十回目、十一回目の重大な路線闘争の勝利をおさめ、劉少奇、林彪、「四人組」など三つのブルジョア階級司令部を粉砕し、争奪をくりかえすなかで、かれらにかすめとられた部分の権力をとりもどし、こうして、わが国のプロレタリア階級独裁をこれま

でなく強固なものにし、毛主席の革命路線を全面的に、正しく貫徹するための道をはき清めた。この政治大革命を経て、わが党は直接、幾億の人民大衆に依拠して党内の走資派にうち勝つという面で豊富な経験を積み、広範な幹部と大衆は、きびしい試練と鍛練を受けて、階級闘争と路線闘争についての自覚を大いにたかめ、政治的な是非を見わけ、政治ベテラン師を見やぶる識別力をたかめた。広範な幹部と大衆が「四人組」反対のきびしい複雑な闘争でしめした自覚と識別力は、このことをもつとも生きいきと立証している。この政治大革命を経て、マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想は大いに普及し、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命についての毛主席の偉大な理論は、偉大な実践のなかで発展し、豊かなものになり、広範な幹部と大衆のなかにいっそう深く根をおろした。国際的には、わが国のこのたびのプロレタリア文化大革命は、修正主義反対とその防止、プロレタリア階級独裁の強化、資本主義復活の防止という面で、国際共産主義運動に新たな経験を提供し、社会主義と共産主義をめざしてたたかう全世界のプロレタリア階級の勝利への確信を大いにつよめた。疑いもなく、わが国のこのたびのプロレタリア文化大革命は、プロレタリア階級独裁史上の偉大な創舉として歴史に記されるであろうし、それは歴史の進展とともに、ますますさんぜんたる光を放つに違いない。

文化大革命がはじまった当時、毛主席は「天下大いに乱れて、天下大いに治まるにいたる」と

指摘した。十回大会以後も、毛主席は、「プロレタリア文化大革命はもう八年になる。いまは安定をはかる方がよい。全党、全軍は団結しなければならない」「やはり安定と団結をはかるのがよい」と再三指示した。しかし、「四人組」はやっきになって破壊と攪乱をおこなった。「四人組」が打倒されたこんにち、われわれは毛主席の指示にもとづいて、安定と団結を実現させ、天下大いに治まるにいたることができるようになった。こうして、十一年にわたるわが国の第一次のプロレタリア文化大革命は、「四人組」粉碎をその標識として勝利のうちに幕をとじたのである。

安定と団結は階級闘争が要らないというわけではない。第一次のプロレタリア文化大革命が勝利のうちに終わったことは、決して階級闘争が終わったことを意味するものではなく、決してプロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命が終わったことを意味するものでもない。社会主義の全歴史的段階において、プロレタリア階級とブルジョア階級との二つの階級の闘争、社会主義と資本主義との二つの道の闘争は、終始存在するものである。この闘争は、長期にわたる、曲折したものであり、ときにはひじょうに激しいものでさえある。文化大革命のような性質をもつ政治大革命は、今後何回もくりかえされるであろう。われわれはかならず毛主席の教えをまもって、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命をあくまでもおしすすめ、ブルジョア階級と

すべての搾取階級を逐次消滅し、社会主義をもって資本主義にうち勝ち、われわれの最終目標である共産主義を実現するまでたたかぬかなければならない。

情勢と任務

同志のみなさん！

第一次プロレタリア文化大革命が勝利のうちに終結したことによって、わが国の社会主義革命と社会主義建設は、新たな発展の時期にはいった。この新たな時期にはいる重要な時点に、党中央は、かなめをつかんで国を治めるという戦略的決定をおこなった。それはつまり、二つの階級、二つの道のはげしい闘争のなかで、安定と団結を実現させ、プロレタリア階級独裁を強固にし、プロレタリア文化大革命の勝利の成果をうち固め、発展させて、天下大いに治まるという状態に達することである。

かなめをつかんで国を治めるといふ党中央の戦略的決定の核心は、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、まもり、思いきって大衆を立ちあがらせ、団結できるすべての力と団結して、「四人組」を摘発、批判する偉大な闘争を最後までおしすすめ、かれらの反革命修正主義路線のもたらした害毒と影響を一掃し、十一回目の路線闘争の勝利の成果をうち固め、発展させ、わが国の

政治、経済、軍事、文化、対外活動の各分野で、毛主席のプロレタリア革命路線を全面的に正しく貫徹することである。全党、全軍、全国各民族人民は、かなめをつかんで国を治めるといふ党中央の戦略的決定が、今年中に初歩的な成果をあげ、三年内に目ざましい成果をあげるよう、一致団結して、ともに努力しなければならない。これをやりとげれば、今世紀における中国の労働者階級と人民の歴史的使命を果たすための、つまり、わが国を社会主義の現代化された強国にきずきあげるための確固とした基礎がつけられることになる。

同志のみなさん！ 十回大会いらい、わが党は対外活動のなかで、毛主席がみずから制定した路線、方針、政策を断固として貫徹し、国際情勢を中国人民と世界人民に有利な方向へいちだんと発展させた。わが国の国際的威信はたえず高まり、われわれの友人はあまねく全世界にいる。

当面の国際情勢は大へんすばらしい。大へんすばらしいのであって、中ぐらいのすばらしさでもなく、少々のすばらしさでもない。数年らい、国際プロレタリア階級の革命闘争、被抑圧人民と被抑圧民族の解放闘争、多くの国の革命的大衆運動は、ひきつづき発展している。またも一部の国が植民地主義のくさりをたちきり、外国の侵略者を追いだして、独立と解放をかちとった。超大国の侵略、干渉、転覆、支配、侮辱に反対する国際統一戦線は、いま幅広い発展をみせている。ソ米両覇権主義国は、数かずの困難をかかえ、危機をはらみ、ますます苦境に追いこまれて

いる。とりわけソ連社会帝国主義は、ここ数年らい、イスラエルの侵略に反対するアラブ諸国とパレスチナ人民の戦争を破壊し、傭兵をつかってアンゴラへの干渉、ザイルへの侵入をすすめ、スーダン政府の転覆をたくらみ、多くの国の内政に干渉し、第三世界諸国の団結に水をさし、これを破壊してきた。ソ連社会帝国主義は、その侵略と拡張の正体をいっそうさらけだし、次つぎと手痛い打撃をあびている。事実がしめしているように、国家は独立を求め、民族は解放を求め、人民は革命を求めること、これは国際情勢の主流であって、いかなる力もそれをばむことはできないのである。

革命の要素がひきつづき増大すると同時に、戦争の要素もいちじるしく増大している。ここ数年らい、毛主席は、この問題でくりかえし人びとの注意を喚起してきた。昨年のはじめ、毛主席は、「アメリカは、世界におけるその利益をまもろうとするし、ソ連は拡張しようとする。これは、だれも変えることができない。階級の存在する時代において、戦争とは、二つの平和の時期にはさまれた現象である。戦争は政治の継続であり、いってみれば平和の継続である。平和は政治なのである」と指摘した。ソ米両超大国は、どちらも世界に覇をとなえようとしており、いたるところで争奪をすすめ、この世界をきわめて安寧でないものにしていく。かれらがこのように争奪をつづけていくならば、いつかは、戦争が引きおこされるであろう。かれらはいたるところ

で「緩和」を吹聴しているが、吹聴すればするほど、ますます緩和しなくなっている。かれらはしきりに「軍縮」をさげびたてているが、「縮小」すればするほど、軍備は多くなっている。かれらは毎日のように「平和」をとなえているが、実際には、毎日のように戦争準備をしている。全世界の人民は平和を望み、中国人民も平和な国際環境を望んでいる。問題は、世界各国の人民が戦争をしたいのではなく、中国人民が戦争をしたいのもなくて、超大国が戦争をしようとしているのである。これは、かれらの帝国主義的本性によって決定づけられたもので、人びとの意志によって左右されるものではない。帝国主義とは侵略であり、戦争である。毛主席は、帝国主義と社会帝国主義というこの社会制度が変わらないかぎり、戦争は避けられないのであり、相互間の戦争でなければ、立ちあがった人民による革命なのであり、恒久平和などは絶対にありえない、とわれわれに教えている。

ソ米両国は新たな世界大戦の策源地であり、とりわけソ連社会帝国主義は、いっそう大きな危険性をもっている。当面のソ米争奪の戦略態勢では、ソ連社会帝国主義が攻勢をとり、アメリカ帝国主義が守勢にまわっている。ソ連修正主義は、「社会主義」「民族解放支持」「平和協力」などの看板をかかげて、全世界的な「進取的戦略」の推進に拍車をかけ、全ヨーロッパ、全アジア、全アフリカを手に入れようとしている。ソ米の争奪は、世界のすみずみにまで及んでいる

が、その重点は依然としてヨーロッパである。ソ連は、ヨーロッパの東部に大軍を配置し、同時に、アフリカと中東で戦略資源の略奪と戦略基地の占拠にやっきになっており、東はペルシャ湾をおさえ、南は喜望峰に下り、西は大西洋の要衝をたちきり、側面から迂回して、ヨーロッパを包囲しようとするにやまらぬ。西側には、妥協、譲歩の方法で平和を維持しようと夢みる宥和主義の思潮が存在しており、はては新ツァーという災いの水を東方におしやり、他人を犠牲にして、自己の保全をはかり、かつてのチェンバレンの道をあゆもうとする人もいる。こういうやり方では、ソ修のたくらむ拡張の野望を助長し、戦争の勃発をはやめるだけで、結局、持ち上げた石で自分の足を打つことになるであろう。

毛主席は世界大戦にたいしては、「第一には反対し、第二には恐れない」という態度でのぞむようわれわれに教えている。ソ修と米帝はどちらもハリコの虎であり、なにも恐れることはない。ソ連社会帝国主義の野望はひじょうに大きい、本質的には弱体である。ソ連はいたるところで侵略、拡張をおこない、各国人民を敵にまわす立場に自分を置き、うつつけの反面教師の役割を演じている。各国人民が警戒心をたかめ、緊密に団結し、よく準備を整え、たゆみない闘争をすすめていきさえすれば、戦争の勃発をおくらせることができるであろうし、また、いったん戦争がおこっても、有利な立場に立つことができるであろう。われわれは、革命的楽観主義者

であり、世界の前途について確信にみちている。

毛主席が一九七四年に提起した三つの世界の区分についての理論は、重要かつ深遠な意義をもっている。毛主席は、階級分析の方法を運用して、今日の世界における各種の基本矛盾の発展と変化について、各種の政治勢力の分化と再編成について、各国の国際的におかれては政治的、経済的地位について分析し、これによって今日の世界の戦略態勢を科学的に概括した。ソ米両覇権主義国は、現代における最大の国際的搾取者、抑圧者であり、全世界人民の共同の敵である。広範な第三世界諸国のうけている抑圧はもっともひどく、その反抗はもっともはげしく、したがって帝国主義反対、植民地主義反対、覇権主義反対の主力軍となっている。第二世界諸国は二面性をもっており、第三世界諸国を抑圧、搾取、支配する面もあれば、程度の差こそあれ、両覇権主義国の支配、威かく、侮辱をうけている面もある。三つの世界の区分についての毛主席の理論は、当面の国際闘争の大方向をはっきりさし示し、だれが主要な革命勢力であり、だれが主要な敵であり、だれが獲得し、連合することのできる中間勢力であるかということを確認にし、こうして国際プロレタリア階級が、世界的な範囲での階級闘争において、団結できるすべての勢力と団結し、もっとも広範な統一戦線を結成して主要な敵とたたかうことができるようにした。このような戦略的規定は、現代の闘争における国際プロレタリア階級の戦略的要求に合致し、現代の

闘争における全世界の被抑圧人民と被抑圧民族の戦略的要求に合致し、社会主義、共産主義の勝利をめざす戦略的要求にも合致している。これは、現代における国際プロレタリア階級の正しい戦略的、戦術的規定であり、国際闘争のなかでのプロレタリア階級の階級路線である。毛主席のこの理論がまったく正しいことは、数年らいたの実践によって立証されている。毛主席のこの理論は、時間の経過とともに、かならずやいつそう大きな威力を発揮するであろう。

歴史的経験がくりかえし立証しているように、革命の勝利は主として人民自身の力に依拠するが、同時にできるだけ多くの同盟者を獲得しなければならない。レーニンはそのようにのべている。「力のまさっている敵にうち勝つことは、最大の努力をはらう場合にはじめてできることであり、かならず、もっとも綿密に、注意ぶかく、慎重に、たくみに、敵のあいだのあらゆる『ひび』を、どんなに小さなものでもすべて利用し、各国のブルジョア階級のあいだや、個々の国内のブルジョア階級のいろいろなグループまたは種類のあいだのあらゆる利害の対立を利用し、また大衆的な同盟者を、よしんば一時的な、動搖的な、ふたしかな、たよりにならない、条件的な同盟者でも、手に入れる可能性を、どんなに小さなものでもすべて利用する場合にはじめてできることである。このことを理解していない者は、マルクス主義と科学的な現代社会主義一般をすこしも理解していないものである。」マルクス主義のこの原則は、いま各国人民の覇権主義反対

闘争のなかで、理論の面でも実践の面でも重要な現実的意義をもっている。

毛主席が一貫してわれわれに教えているように、すでに革命の勝利をかちとった人民は、解放をめざしている人民の闘争を援助すべきである。われわれは、世界各国の共産党を支持するが修正主義は支持しない。われわれは共産党であるから、当然各国の共産党の革命闘争を支持する。同時にわれわれは、各国の共産党は独自性と自主性をもつものであると、一貫して考えている。各国の革命は、その国の共産党が、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を自国の革命の具体的実践に結びつけ、人民を指導することによって達成されるものである。革命は輸出することはいかない。われわれは、いちども他国の内政に干渉したことはない。わが党は、多くの共産党と関係をもっている。こうした党と党との関係は、国家と国家との関係とは別個の問題である。

中国は発展途上にある社会主義国であり、第三世界に属する。われわれは、確固としてアジア、アフリカ、ラテンアメリカおよび他の地域の発展途上国の側に立ち、民族独立の達成と保全、国家主権の防衛、民族経済の発展をめざすこれら諸国の正義の闘争を断固として支持する。われわれは、超大国の支配、威かく、侮辱に反対するヨーロッパや日本など第二世界諸国の闘争を支持し、これら諸国が闘争のなかで連合するのを支持する。

中国とアメリカは、社会制度とイデオロギーを異にし、根本的なくいちがいがある。一九七二年に発表された中米上海コミュニケは、当面の両国関係の基礎である。上海コミュニケは、双方のいずれも覇権を求めるべきではなく、このような覇権を確立しようとするいかなる国あるいは国の集団による試みにも反対する、と指摘している。コミュニケの諸原則が真剣に実行されさえすれば、両国の関係はひきつづき改善されるであろう。コミュニケの主旨によれば、両国関係の正常化を実現するには、アメリカは、かならず蔣一味とのいわゆる外交関係を断絶し、台湾と台湾海峡地域のアメリカの武装力と軍事施設を全部撤退、撤去し、蔣一味とのいわゆる「相互防衛条約」を破棄しなければならない。台湾省はわが国の神聖な領土であり、われわれはかならず台湾を解放する。いつ、いかなる方式で台湾を解放するかは、まったく中国の内政であって、いかなる外国の干渉も断じて許さない。

ソ連指導者集団は、マルクス・レーニン主義を裏切つて、国内では資本主義を復活させ、ファシズム独裁を實行し、国外では覇権主義をおしすすめ、いたるところで侵略・拡張をおこない、ソ連を社会帝国主義国に変質させた。われわれは、かれらとの原則的な論争を、長期にわたってすすめていくであろう。われわれは、あくまでもかれらの覇権主義とまっ向から対決してたたかうものである。同時にわれわれは、中ソ両国は平和共存の五原則を基礎にして、正常な国家関係を保持すべきである、と一貫して主張している。ソ連指導者集団は、中ソ間の国家関係の改善に

まったく誠意がなく、八年間もつづいた中ソ境界交渉をなんの成果もないものにしてしまったばかりか、内外の苦境から抜けだし、人びとの視線をそらし、東を攻めると見せかけて西を撃つため、次つぎと反中国の波をまき起こしている。かれらはさまざまな手管を弄して、毛主席の制定したマルクス・レーニン主義の路線を変えさせようとしているが、これはまったくの痴人の夢にすぎない。中ソ間の国家関係を「袋小路に追いこんだ」のは、ほかでもなく、ソ連指導者集団なのである。ソ連の指導部が真に中ソ間の国家関係を改善しようと考えるならば、実際の行動でしめすべきである。

全党、全軍、全国人民は、かならず毛主席の「深く地下道を掘り、いたるところで食糧を貯え、覇権を求めない」という教えを銘記して、帝国主義、社会帝国主義が新たな世界大戦をおこすことに高度の警戒心を保ち、あらゆる準備を整えておかなければならない。相手が侵してこなければこちらにも侵さない、相手が侵してくればこちらもかならず侵す。われわれは、敢えて侵入してくるすべての敵を殲滅する用意をつねに整えておかなければならない。われわれは、永遠に覇をとえず、永遠に超大国にはならない。対外活動のなかでわれわれは、大国主義を断固として、徹底的に、きれいさっぱりと、のこらず一掃しなければならぬ。

われわれは、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、プロレタリア国際主義を堅持し、ひきつづき毛主席の革命的な外交路線を貫徹しなければならない。われわれは、社会主義諸国との団結をつよめ、全世界のプロレタリア階級、被抑圧人民、被抑圧民族との団結をつよめ、第三世界諸国との団結をつよめ、帝国主義と社会帝国主義の侵略、転覆、干渉、支配、侮辱をうけているすべての国と連合してもっとも広範な統一戦線を結成し、ソ米両超大国の覇権主義に反対しなければならぬ。われわれは、平和共存の五原則を基礎にして各国と関係を樹立し、発展させなければならない。われわれは、全世界のすべての真のマルクス・レーニン主義の政党、組織との団結をつよめ、ソ修裏切り者集団を中心とする現代修正主義に反対する闘争を最後までおすすすめなければならない。

同志のみなさん！ 当面の国内情勢はひじょうにすばらしい。党の十一回目の路線闘争の偉大な勝利はとりもなおさず、情勢のすばらしさをしめす根本的な目じるしである。

「四人組」に反対すること、運動の発展がかくも急速で、かくも健全であったことは、党の意志、軍の意志、人民の意志がどこにむかっているかを十分に物語っている。ここ十カ月のあいだ、全党、全軍、全国各民族人民は、党中央の配置にもとづいて、党をのっとり権力を奪取しようとした「四人組」の陰謀活動とかれらの罪悪にみちた経歴を集中的に摘発、批判し、その反革

命修正主義路線を摘発、批判し、かれらにのつとられていた部分の権力を奪いかえし、党をのつとり権力を奪取するかれらの陰謀活動とかかわりのあった者や事実を摘発、審査し、かれらが後おしをし、教唆し、庇護した新・旧ブルジョア分子と反革命分子に打撃をあたえた。十カ月にわたる激しい闘争は、大いにプロレタリア階級の志気をたかめ、大いにブルジョア階級の威風をたたきおとし、党の指導とプロレタリア階級独裁を大いに強化した。わが国の階級間の力関係にはプロレタリア階級に有利で、ブルジョア階級に不利な、いっそう大きな変化がもたらされた。

革命は生産を促した。「四人組」をうち倒したのちの、わずか数ヶ月間の努力によって、われわれは「四人組」のひどい攪乱、破壊がもたらした生産の停滞、さらには後退、低下という局面を転換させることができた。今年の三月くらい、工業生産、交通運輸、商品の購買・販売、財政収入などは全面的に上昇し、しかも、あいついでこれまでの同期の最高水準を上回り、新しい記録をつくった。長いあいだ、「四人組」に牛耳られ、かれらの介入によって破壊された一部の地区の工業生産も、急速に回復している。六月の全国工業総生産額は、これまで最高の月間生産額を上回った。農業生産の面では、まれに見るひどい干ばつやその他の自然災害にみまわれたにもかかわらず、広範な人民公社員の努力によって損失は相当に食い止められ、多くの地区では、冬作物の比較的良好な収穫をおさめた。広範な幹部と大衆は、社会主義祖国を建設する偉大な闘争

のなかで、大いに意気どみ、大いに力を発揮しようとする決意をかためている。工業は大慶に学び、農業は大寨に学ぶ大衆運動は、これまでに見られない規模で、めざましい発展をとげている。比べあい、学びあい、追いつき、助けあい、追いこすという社会主義的競争は、企業内部と企業間だけでなく、部門のあいだ、省・市・自治区のあいだでもくりひろげられている。いま、国民経済の新たな躍進の局面が現われつつある。

文化諸領域では、「四人組」を摘発、批判する広範な大衆の闘争がますます深まり、「四人組」のもたらしたひどい破壊は逐次克服され、科学技術戦線での革命および教育革命、文学・芸術革命、医療・衛生革命の発展が促されている。

要するに、情勢はひじょうにすばらしく、人心は国が治まることを望んでいる。十カ月らしい国内情勢のすべての変化と発展は、「四人組」を摘発、批判する偉大な階級闘争が、当面われわれの事業を前進させる根本的な原動力であり、党中央がおこなった、かなめをつかんで国を治めるといふ戦略的決定がまったく正しく、きわめて時宜にかなったものであることをあますところなく立証している。

さる三月の中央工作会議で、わたしは党中央を代表して、天下大いに治まるにいたるための八項目の要求を出し、全党、全軍、全国各民族人民の心からの賛同をうけた。この八項目は、当面

および今後の一時期における、かなめをつかんで国を治めるうえでのわが党の主要な戦闘任務であると、中央は考えている。

第一、かならず「四人組」を摘発、批判する偉大な闘争を最後までやりぬくこと。

当面および今後の一時期において、「四人組」を摘発、批判する闘争は、依然として、二つの階級、二つの道の闘争の中心である。この闘争をつかめば、かなめをつかんだことになる。われわれは、党をのっとり権力を奪取する「四人組」の陰謀、およびその罪悪にみちた反革命的な経歴を摘発、批判する基礎のうえに立って、さらに思いきり大衆を立ちあがらせ、「四人組」の反革命修正主義路線の極右の本質と各方面におけるその現われをつつこんで摘発、批判する人民戦争を大々的にすすめなければならない。政治路線と組織路線の面でそれを清算するだけでなく、哲学、政治経済学、科学的社会主義の理論の面からも批判をくわえ、「四人組」が各方面で流した毒と影響を一掃しなければならない。

党をのっとり権力を奪取する「四人組」の陰謀活動とかかわりのあつた者や事実を摘発、審査することは、「四人組」を摘発、批判する闘争の重要な構成部分であり、かならず大衆を十分立ちあがらせてはつきりするまで調査しなければならない。少数の地区や部門の指導者が依然とし

て大衆に立ちおかれているという状態は、すみやかに改められなければならない。同時に、運動が深まれば深まるほど、党の政策に気をつけなければならない。大衆がすでに十分に立ちあがり、闘争がすでにありあがっているところでは、各級の指導部はなおさら、十分に冷静な態度をとらなければならない。政策と戦術は党の生命であるということをつねに銘記して、人民内部の矛盾と敵味方の矛盾を厳格に区別し、正しく処理し、教育の面をひろげ、打撃の面をせばめなければならない。われわれのいう「四人組」とその徒党のブルジョア派閥体系とは、「四人組」と党をのっとり権力を奪取する「四人組」の反革命的陰謀活動に加担した骨幹分子のことを指しているのである。党をのっとり権力を奪取する「四人組」の陰謀活動とかかわりのあつた者のうち、「四人組」とその徒党の派閥体系に属する者は、ごく少数にすぎない。摘発、審査にあたっては、「四人組」の影響をうけて、まちがったことを言い、まちがったことをやった者と、党をのっとり権力を奪取する「四人組」の陰謀活動に加担した者とを厳格に区別すること、党をのっとり権力を奪取する「四人組」の陰謀活動に犯した部類に属する者と、骨幹分子のなかでも、一九七六年十月の中央の情況説明会議以後、悔い改める意志をしめし、「四人組」の罪状を摘発し、「四人組」と一線を画した者と、ひきつづき執拗に手

むかう頑迷分子とを厳格に区別すること、これらのことに十分な注意をはらわなければならない。誤りを犯しはしたが、われわれの側にかちとることのできるすべての人にたいしては、思想が転化するよう真剣に働きかけるべきで、かれらをしめだしてはならない。こうしてはじめて、九五パーセント以上の幹部、大衆と団結して、「四人組」および罪状が重大でしかも悔い改めようとしなないにぎりの頑迷な徒党を最大限に孤立させ、集中的に打撃をくわえることができるのである。また、社会主義をにくみ、「四人組」およびその徒党の支持、教唆のもとに階級的報復をやり、その罪状が重大で大衆の深い恨みを買っている地主、富農、反革命分子、悪質分子、右派分子にきびしい打撃をあたえることにも意をそそがなければならない。摘発、審査の仕事は党委員会の統一的指導のもとに、力を入れてやらなければならない。各省・市・自治区と中央の各部門は、実情にもとづいて、今年中、あるいはもう少し長い時間をかけ、何回かにわけて基本的にこの仕事を終わらせるようにする。

「四人組」の反革命修正主義路線とその反動的世界観をつつこんで、系統的に批判し、その流した毒を一掃することは、長期にわたるいっそう困難な任務である。「四人組」が思想・理論の面と路線の面でもたらした混乱、およびわれわれの隊列にたいする侵食を過小評価してはならない。「四人組」という反面教師を十分に利用して、階級闘争と路線闘争の教育を幅広く、ほり

さげてすすめるなければならない。マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を武器とし、各戦線の実際と緊密に結びつけながら、「四人組」によって転倒された路線面の是非、思想面の是非、理論面の是非を一つ一つ正していくよう、広範な幹部と大衆をみちびいていかなければならない。毛主席は、「工業、農業、商業、文化・教育、軍隊、政府、党という七つの方面の活動は、いずれもその経験をよく総括し、一連の方針、政策、措置をきめて、それらが正しい軌道にそって前進できるようにしなければならない」とわれわれに教えている。われわれはかならず、労働者階級に依拠し、貧農・下層中農に依拠し、革命的幹部と革命的知識分子に依拠して、それぞれの戦線で経験を総括し、社会主義の新生の事物を強固にし発展させ、具体的な方針、政策、措置をきめて、毛主席の革命路線を全面的に、正しく貫徹し、プロレタリア階級独裁を強固にするという任務を各基層単位にいたるまで実行していかなければならない。

第二、かならず整党整風をりっぱにやり、党の建設を強化すること。

かなめをつかんで国を治めるには、なによりもまず党を治めなければならない。毛主席の党建設の学説にもとづき、また毛主席の「三つのやるべきこと、三つのやってはならないこと」の基本原則にもとづいて、「四人組」の破壊によってもたらされた思想面、組織面、作風面の不純と

いう問題を真剣に解決すること、これはわが党をりっぱに整頓し、建設するうえでの中心任務である。

われわれの党は偉大な、光榮ある、正しい党であり、いかなるきびしい試練にもたえうる党であり、圧倒的多数の党員と幹部はよいか、比較的によいのである。しかし、「四人組」の一連のしわざによって、党の体質と党員の思想が深くむしばまれ、党の団結、党の規律、党と人民大衆との関係が大いに損われ、党のすぐれた作風とりわけ大衆路線と実事求是の伝統がひどく破壊されたことも見てとらなければならぬ。整党整風のなかで、「四人組」とその一にぎりの頑迷な徒党が犯した、党を破壊し瓦解させ、党をのっとろうとする重大な犯罪行為を徹底的に批判し、かれらのあおり立てたブルジョア階級のよこしまな風を批判しなければならない。階級闘争というかなめをつかめば、整党整風の方向は正しいものとなる。

プロレタリア階級独裁のもとにおける党建設の問題は、とどのつまり、マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想、とりわけプロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命についての毛主席の偉大な理論によって、広く、深く全党を武装することである。一九七〇年十二月、毛主席は、「わたしの考えでは、二百七十四名の中央委員、および千名以上の高級と中級の在職幹部は、みなそれぞれの水準におうじて真剣に本を読んで学習し、マルクス主義を身につけるべきである。

「こうしてこそ、はじめて王明、劉少奇、陳伯達のようなペテン師に抵抗することができる」と指摘した。われわれはかならず毛主席の教えにしたがって、大いに決意をかため、大いに力をそそぎ、全党の学習をいちだんと改造し、数年内にわが党の思想面理論面の建設を大きく一歩前進させるように努めなければならない。

マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの著作と毛主席の著作の学習にはげみ、毛沢東思想の体系を全面的に、正確に会得、把握しなければならず、当面はとくに『毛沢東選集』第五巻をしつかりと学習し、またその他の各巻もひきつづきしつかり学習しなければならない。弁証法的唯物論と史的唯物論を学習し、観念論と形而上学に反対しなければならない。理論と実践とを結びつけ、事実にもとづいて真理を求める学風を発揚し、大衆のなかへ深くはいり、調査研究をおこなうことを提唱しなければならない。真剣に力を組織して党史を研究し、党の歴史的経験、とくに九回目、十回目、十一回目の路線闘争の経験を学習、総括しなければならない。中央党学校と各級党学校を着実にりっぱに運営しなければならない。さまざまな形式をとって、労農兵の理論隊列と専門の理論隊列に戦闘的役割を發揮させ、マルクス主義の強大な理論隊列をつくりあげるよう努力しなければならない。今回の代表大会のち、毛主席のプロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の偉大な理論について、だれがほんとうになにかを学びとったか、だれ

がより多く学んだか、だれがよりよく学んだかをみる全党的な学習競争をおこすよう、希望する。全党の同志、各級の幹部はみな、マルクス・レーニン主義の水準をたかめるといふ基礎の上で、業務を学び技術を学び、「紅」でもあり、「専」でもあるようにならなければならない。各級の指導的幹部は、なおさらのこと大いに努力をし、政治と業務に精通した専門家となるように努めなければならない。

プロレタリア階級の党性の強化、党についての意識の強化、党の集中的、統一的指導の強化は、党の整頓と建設をりっぱにすすめるうえでの重要な問題である。「四人組」の妨害と破壊によってもたらされた誤った傾向、つまりプロレタリア階級の党性と党の規律を否定し、ブルジョア階級の派閥性を固執し、セクト主義、無政府主義などをやる誤った傾向は、断固として克服し、是正しなければならない。わが党の隊列のなかでは、いかなる分派活動も絶対に許されない。党は、党の仕事を管理し、人事の仕事管理しなければならない。入党は党規約の規定にもとづかなければならず、幹部の抜てきは毛主席の提起した継承者の五つの条件にもとづかなければならず、津々浦々からきた幹部にたいして一視同仁の態度をとらなければならない。党の建設を強化し、党の隊列の純潔化をはかり、民主集中制の組織原則と規律原則にもとづいて、わが党のあらゆる力をかたく団結させ、わが党が思想面だけではなく、組織面でも鋼のごとく強固にな

るようにしなければならない。

党の思想建設と組織建設をほんとうにりっぱにやるには、党の作風を整頓し、全党で党のすぐれた伝統についての再教育を幅広く、ほりさげておこなわなければならない。毛主席にはぐくまれて、わが党には、プロレタリア階級の一連のすぐれた作風が形成された。そのうち、もっとも根本的なのは、大衆路線と実事求是の作風である。毛主席は一貫して、大衆を十分に信頼し、大衆に依拠し、大衆の声に耳をかたむけるよう提唱し、また、事実にもとづき、科学的な態度で、誠実に事をはこぶよう提唱している。「四人組」はたしかにわが党の気風をぶちこわした。わが党内では、大衆から浮きあがり、まやかしを事とし、風向をうかがって行動し、機に乗じてうまく立回るといったブルジョアの作風がひろがっている。これは、断固として克服し、是正しなければならない。われわれが大衆を十分に信頼し、事実にもとづいて事をはこび、毛主席みずから提唱し涵養した、党のすぐれた伝統と作風を回復し発揚しさえすれば、わが党と人民大衆とのつながりはかならずいっそう緊密になり、わが党の戦闘力はかならずいっそう強まるに違いない。

労働組合、共産主義青年団、婦人連合会など大衆団体にたいする党の指導を強化し、これらの組織をりっぱに整頓、建設し、それらの団体にしかるべき役割を十分發揮させるようにしなければならない。

この大会のあと、「四人組」を摘発、批判する偉大な闘争と結びつけて、整党整風運動が全国的な範囲で逐次くりひろげられるであろう。これは、わが党の歴史のうえで、偉大な意義をもつ、いま一つのマルクス主義の教育運動である。各級の党组织は、整党整風を経たのち、プロレタリア階級と革命的大衆をみちびいて階級敵とたたかう前衛としての役割を、いちだんと発揮していくに違いない。

第三、かならず党の各級指導グループをりっぱに整頓、建設すること。

整党整風と党建設強化のカギとなる問題は、党の各級指導グループの整頓と建設である。われわれはかならず、毛主席のうち出した継承者の五つの条件と老年、中年、青年三結合の原則にもとづいて、各級の指導グループを整頓しなければならない。そして、それらの指導グループが、毛主席のプロレタリア革命路線を全面的に、正しく貫徹し、党中央の決定と指示を断固として実行し、集団的生産労働につねに参加し、大衆と密接につながり、ブルジョアの権利を自覚的に制限し、団結してたたかい、大衆のなかに威信をもつ、精鋭なものとなるよう、それらを一步一步つくりあげていかなければならない。

「四人組」が悪人どもをかき集めて派閥をつくり、徒党を組んで私利をはかったため、一部の指導グループははなはだしく不純なものとなっている。こうした指導グループにたいして、組織面から整頓と整理をおこなうのは、まったく必要なことである。しかし、圧倒的多数の指導グループについては、主として思想面での整頓の問題である。党内でプロレタリア思想の非プロレタリア思想にたいする闘争をくりひろげ、「四人組」の害毒と影響を一掃し、それによって、政治的自覚をたかめ、指導の芸術をたかめるという目的を達成するようしなければならぬ。大切なのは教育することである。思想闘争にあたっては、団結の願いから出発し、批判と自己批判を経て、新しい団結に到達するという毛主席の方針を真剣に実行しなければならぬ。

指導グループの整頓と建設をりっぱにやるには、老年、中年、青年の三結合に注意をはらわなければならない。老幹部はこのうえない熱情をもって、青年と中年の幹部を助け、その仕事を支持すべきである。老幹部と一致協力する広範な青年幹部と中年幹部がいなければ、わが党の事業は中断するであろう。新幹部、老幹部をとわず、多少の誤りを犯すのはまぬががたいことである。誤りがあってもかまわない。わが党には、誤りを犯したら自己批判をし、誤りを改めるのを許すというしきたりがある。前の誤りを後のいましめとし、病をなおして人を救うというのが、誤りを犯した幹部にたいする、わが党の一貫した方針である。この一カ条は、新幹部と老幹部のどちらにも適用されるものである。老幹部も自覚的に整風をおこなって、青年幹部に手本をしめ

し、伝え、助け、みちびくという仕事をりっぱにやり、毛主席のうち立てた党の学説、党の作風をほんとうによく伝えていくようにしなければならない。

毛主席は次のように諄々と教えさとしてている。「県委員クラス以上の幹部は数十万人おり、国の運命は、かれらの手に握られている。もし、りっぱに仕事をせず、大家から浮きあがり、刻苦奮闘しないならば、労働者、農民、学生が、かれらに賛成しないのは当然のことである。われわれはかならず、官僚主義の作風がはびこらないように、人民から浮きあがった貴族階層がうまれなければならない。警戒しなければならない。」各級の指導グループ、なによりもまず高級幹部は、かならず毛主席のこの教えを銘記しなければならない。

第四、かならず革命に力を入れて生産を促し、国民経済を発展させること。

階級闘争、生産闘争、科学実験は、強大な社会主義国を建設する三つの偉大な革命運動である。社会主義経済を発展させることは、プロレタリア階級独裁の基本任務の一つである。社会主義の方向をつらぬくという前提のもとに、生産力を急速に発展させること、これはプロレタリア階級独裁の物質的基礎を強化し、資本主義勢力にうち勝つうえで必要なことであり、国防力を増強し、帝国主義、社会帝国主義の侵略に対処するうえで必要なことであり、人民の物質的、文化

的生活水準を逐次向上させるうえで必要なことである。長い目でみれば、それはまた、三大差異を徐々に縮小して、共産主義への移行の物質的準備を整えるうえで必要なことである。生産力をもっとも革命的な要素である。プロレタリア階級独裁のもつと、上部構造と生産関係の領域での継続革命がなお必要とされるのは、結局のところ、生産力発展の要求によるものである。上部構造と生産関係の変革は、こんどは逆に生産力の発展に道をきりひらく。

「四人組」を粉砕してからの全国の経済情勢の発展は、「四人組」を摘発、批判する偉大な階級闘争をつかみ、大慶に学び、大寨に学ぶ偉大な革命的大衆運動をつかめば、いかに大きな威力が生まれるかということ、実によく物語っている。われわれはかならず「四人組」を摘発、批判する闘争と大慶に学び、大寨に学ぶ大衆運動とをより緊密に結びつけ、それをさらに深くくりひろげていくようにし、独立自主、自力更生、刻苦奮闘、勤儉建国を旨として、戦争にそなえ、自然災害にそなえ、人民に奉仕し、国民経済を発展させなければならない。われわれは数年間奮闘し、計画どおりに、大慶型の企業と大寨型の県の基準にもとづき、第五次五カ年計画の期間に、全国の三分の一の企業を大慶型の企業につくりあげ、三分の一の県を大寨型の県につくりあげなければならない。この目標が実現されたならば、わが国の社会主義制度は大いに強化され、社会主義経済も大いに栄えるであろう。

社会主義共有制をまもり、都市と農村の資本主義勢力の進攻を粉砕することは、重大な闘争である。ここ数年らしい、「四人組」の後おしと庇護のもとに、一部の地方と部門では資本主義が氾濫し、新旧ブルジョア分子が内部と外部で結託し、都市と農村で相通じ、狂気のように攻撃をかけてきたため、一部の全人民的所有制と集団的所有制の経済は、それぞれに程度の異なった破壊をうけ、ごく少数の部門は変質してしまった。適当な時期に大々的に大衆を思いきり立ちあげ、断固として汚職窃盗分子、投機分子、さまざまな資本主義的な不法活動に打撃をくわえ、国家計画を破壊する行為を制止すべきである。階級敵の復活活動に打撃をあたえるとともに、人民内部の資本主義的傾向の問題も解決しなければならない。社会主義的所有制をまもる闘争は、これからも長期にわたって続けていかなければならない。これは、生産関係の面におけるプロレタリア階級独裁下の継続革命の重要な任務である。

国民経済を発展させるとは、つまり、大いに意気こみ、つねに高い目標をめざし、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義を建設する総路線と、二本足で歩く一連の方針を真剣に貫徹し、国民経済全体を計画的に、一定の比例をもって、速いテンポで発展するという社会主義の軌道にのせ、農業を基礎とし、工業を導き手として、農業、軽工業、重工業およびその他の経済事業の均衡のとれた発展と全面的な躍進を実現させることである。「四人組」を打倒したので、広

範な幹部と大衆の意気こみがありあがつているが、いまの問題は意気こみをほんとうに燃えあがらせ、これを丹念に組織することである。要員の精鋭化と機構の簡素化を実行し、非生産要員を減らして、生産の第一線を強化しなければならない。表面的な意気こみであってはならず、実質的な意気こみでなければならない。天をつく意気こみと実事求是の科学的態度とを結びつけるべきである。つねに高い目標をめざすというが、高い目標はどこにあるのか。大衆、大衆こそ高い目標である。高い目標をめざすとは、大衆、大衆のように多く、はやく、りっぱに、むだなく革命をやり、建設をすすめることである。一九八〇年までに、わが国の独立した、比較的整った工業体系と国民経済体系をつくりあげなければならない。農業については、基本的に機械化を実現し、農業、林業、牧畜業、副業、漁業の五つともかなり大幅にのばして、人民公社の集団経済をいちだんとうち固め、発展させなければならない。工業については、軽工業をりっぱにやり、同時に基幹産業の発展を速めることに大いに力を入れ、力を集中して基幹産業を速いテンポで発展させるための殲滅戦をいくつかすすめて、第六次五ヵ年計画の期間のより大きな発展のために条件をつくり出さなければならない。

科学研究活動は、経済建設に先行すべきものであるが、「四人組」にひどく破壊されたため、いまは立ちおかれている。これは社会主義建設の全局にかかわる問題であり、真剣に取り組まな

ければならない。中央は、適当な時期に全国科学大会を招集することを決定した。この大会では、経験を交流し、計画を作成し、先進的なものを表彰し、とくに発明や創造のある科学技術関係者と労働兵大衆を表彰し、科学技術戦線の広範な幹部と大衆の革命的積極性を十分に動員して、科学技術の現代化に向かってすすまなければならない。

中央の統一的指導を強固にするという前提のもとで、中央と地方との二つの積極性を発揮させることは、毛主席が一貫して教えている社会主義建設の重要な方針であり、あくまで貫徹しなければならぬ。各省・市・自治区も、地区、県、区、人民公社の積極性を発揮させることに注意を払う必要がある。

広範な人民大衆にたいしては、思想教育の面では共産主義的労働態度を大いに提唱するが、経済政策の面では、あくまでもそれぞれ能力におうじて働き、労働におうじて分配をうけるという社会主義の原則を実行し、また集団の福祉を逐次拡大していかなければならない。生産の発展をふまえて、人民の生活を一步一步向上させる必要がある。わが国人民の生活は、解放前にくらべてはるかによくなったとはいえ、その水準はまだ低いものである。各級の指導者はいついかなるときでも大衆の苦しみに関心をよせ、骨惜しみすることなく、昼夜をわかつた、勤勉につとめ、着実に人民のなかの生活問題や生産問題を研究すべきである。われわれの人民はよく道理をわき

まえており、みんなの生活をたえず改善していくためには、刻苦奮闘し、勤儉の精神で国家を建設し、できるだけ速く生産を発展させなければならないということをよく知っている。

第五、かならず文化・教育領域の革命をりっぱにやり、

社会主義の文化・教育事業を大いに発展させること。

毛主席は一九七五年七月の二回にわたる重要な談話のなかで、「模範劇だけでは少なすぎる。しかも、ちょっとした間違いでもすぐ批判されてしまう。百花斉放などかえりみられなくなった。人が意見を出せないのは、よくない」「文章を書くのがこわい、戯曲を書くのがこわい。小説がない、詩歌がない」とするどく指摘している。毛主席はさらに、「党の文学・芸術政策には調整をくわえなければならず、一年、二年、三年と、文芸の出し物をだんだん増やしていくべきである」「一、二年のうちに逐次活発にしていくようにする。三年、四年、五年かかってもよろう」と指摘している。毛主席の指示は、ブルジョア階級の文化専制主義を実行する「四人組」にたいするきびしい叱責であり、同時にまた広範な文化学術関係者によせた心からの期待でもある。社会主義文化戦線でたたかっているすべての共産党員と革命的同志は、立ちあがり、大志をいだき、大いに意気こみ、毛主席の生前の期待にしたがって、文化諸領域の革命を真剣にりっぱ

におこない、プロレタリア階級の政治に奉仕し、労働兵に奉仕する方向を堅持し、革命的な政治内容とできるだけ完全な芸術形式をかねそなえた、豊富多彩な文学・芸術作品を創作するようにつとめ、マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想にみちびかれる創意性に富んだ学術研究に力をかたむけ、社会主義文化の建設の高まりをおこしていかなければならない。

社会主義文化を繁栄させ、発展させるには、百花齊放、百家争鳴の方針、昔のものを今に役立て、外国のものを中国に役立てる方針、ふるきを推して新しきを出す方針を真剣に貫徹しなければならぬ。「四人組」の妨害と破壊にたいし、毛主席はここ数年らい、文化諸領域でこの方針を貫徹するようくりかえし強調し、みずから提唱してきた。すでに一九七三年、一九七四年に、毛主席は学術誌の発行と古代文化遺産の整理の問題について、何回も重要な指示をおこなっている。とくに一九七五年には、毛主席は映画『創業』の問題と『水滸伝』の研究にたいする有名な輝かしい指示をおこなったばかりでなく、みずから小説、戯曲、映画の創作に関心をよせ、魯迅の著作の研究と出版についての提案に賛意を表し、『詩刊』『人民文学』など文芸、学術誌の発行に同意し、人民の音楽家聶耳と冼星海を記念することに同意し、湖南劇『園丁の歌』の映画を評価し、支持した、等等。こういった広範囲にわたる毛主席の一連の指示は、社会主義文化を繁栄させるために、いっそう明確な方向をさし示している。

教育戦線も、わが党が「四人組」とはげしく争奪しあった、ひじょうに重要な戦線である。

二〇世紀の残り四分の一の期間にわが国を偉大な社会主義の現代化された強国にきずきあげるには、「紅」でもあり「専」でもある建設人材を多数養成し、育てあげることがさし迫って必要である。このためには教育から着手しなければならず、プロレタリア教育革命をほんとうにりっぱにやらなければならない。「四人組」は毛主席の教育方針にまったくそむき、社会主義の教育事業をひどく破壊し、「むしろ教養のない勤労者の方がましだ」などとわめき、広範な勤労人民にたいして愚民政策を実行した。われわれはかならず「四人組」にたいする摘発、批判をつうじて、毛主席の「教育はプロレタリア政治に奉仕しなければならず、生産労働と結びつかなければならぬ」「教育をうけるものを、徳育、知育、体育のいずれの面でも成長させて、社会主義的自覚をもつ、教養をそなえた勤労者にそだてあげる」という教育方針を貫徹しなければならぬ。強力な措置を講じて、各級、各種の教育事業の発展の規模を拡大し、そのテンポを速め、教育の質をたかめて、経済諸事業と科学技術諸事業の発展に呼応させ、社会主義革命と建設の必要に照応させなければならない。毛主席のプロレタリア教育路線を十分に具現し、しかもわが国の事情に適合し、社会主義の経済的土台に照応したプロレタリア教育制度をうち立てることは、光榮にして困難にみちた任務である、ということを見てとるべきである。教育戦線でたたかっ

るすべての共産党員と革命的同志は、党の教育事業に忠誠をつくり、このようなまったく新しい教育制度をうち立てるために努力しなければならない。

建国いらい、わが国の文化・教育、科学技術戦線の活動が劉少奇、林彪、「四人組」の重大な攪乱と破壊をうけてきたにもかかわらず、輝かしい毛沢東思想にみちびかれて、広範な教育関係者、科学技術関係者、文化関係者、医療・衛生関係者は骨身を惜しまずに働き、人民のために力をつくし、社会主義事業に大きな貢献をしてきた。

社会主義をきずきあげるためには、労働者階級は、自分じしんの技術幹部の隊列をもたなければならぬし、自分じしんの教授、教員、科学者、新聞記者、文学者、芸術家、マルクス主義理論家の隊列をもたなければならぬ。それは壮大な隊列であるべきで、人数が少なくはだめである。わが国の現在の知識分子のうち、一部は旧社会からきたものであり、大多数は新社会で育成されたものである。そのうちの圧倒的多数は社会主義事業につくしいたいと思っており、そのように努力している。これはひじょうに貴重な力である。全般的にいて、マルクス主義をかなり身につけ、足元がしっかりしており、確固としてプロレタリア階級の立場に立っている知識分子はまだ少数であるが、大多数の人は度重なる政治運動、とりわけプロレタリア文化大革命による試練を経て、ブルジョア世界観からプロレタリア世界観に転換する過程で、また、プロレタリア

世界観をしいに形成し確立する過程で、それぞれ異なった程度の進歩を見せている。社会主義に反対する者は、ごく少数にすぎない。「四人組」は、建国いらいわが党が知識分子の育成と改造の面でおさめた大きな成果を根本から抹殺し、広範な知識分子の革命的積極性をおさえ、それに打撃をあたえた。かれらは一方では一にぎりの反動的知識分子をかき集めて自分たちに奉仕させ、他方では広範な知識分子を「独裁の対象」と見なし、知識分子は「九番目の鼻つまみもの」とと誹謗した。一九七五年、毛主席は「四人組」のこのようなやり方にたいし、一連の重要な指示をおこなった。毛主席は、「教育界、科学界、文学・芸術界、報道界、医療界など、知識分子のたくさんいるところでもすぐれた人がおり、マルクス・レーニン主義をいくらか身につけていゝる」「九番目はいない」と「まる」と指摘した。毛主席はまた「『金は純金でなければならぬ』人間は完べきでなければならぬ」という形而上学的な誤った考えを打破しよう」とのべた。毛主席はさらに、「作家にたいしては、前の誤りを後のいましめとし、病をなおして人を救う方針をとらなければならぬ。重大な反革命行為のある、ひそみかくれた反革命分子でなければ、援助してやるべきである」とのべた。毛主席はさらに、エンゲルスに批判されたデューリングを例にあげて、「ベルリン大学はデューリングを解職したが、エンゲルスはそれを喜ばなかった。論争はあくまで論争である。なぜ解職したのか。デューリングという人は八十何歳まで生きた

が名声は芳しくなかった。人を処分する場合はよく注意をしなければならない。なにかということ解職したり投獄したりする。これは神経衰弱の現われである」とするどく指摘した。われわれはかならず毛主席の指示にしたがって、知識分子と団結し、かれらを教育、改造するという党の政策を正しく実行し、広範な知識分子の社会主義建設への積極性を十分に動員しなければならぬ。かれらが国を愛し、わが中華人民共和国を愛するかぎり、われわれはかれらと団結し、かれらがよく仕事をやれるようにしてやらなければならない。同時にまた、知識分子にたいする教育を強化し、三大革命運動の実践のなかで、世界観の改造につとめ、労働者、農民と結びつく道をあくまでもつき進み、逐次プロレタリア階級化し、「紅」でもあり「専」でもある人になるよう、熱情をこめて援助し、励まさないければならない。教育と改造は、愛護から出発し、かれらの積極性をよりよく動員するためである。知識分子の役割を重視することは、まさに毛主席がわが党のために制定した、知識分子にたいする正しい政策の重点である。労働者階級の知識分子の壮大な隊列をつくることは、わが党の重要な戦略的任務である。各省・市・自治区の党委員会と中央の各部、各委員会はいずれも計画を立て、その実行に力を入れ、この任務を遂行するために努力すべきである。

第六、かならず人民の国家機構を強化すること。

人民解放軍の当面の任務は、かなめをつかんで軍隊を治め、「四人組」を摘発、批判する運動を深めていき、戦争へのそなえと軍隊の建設を促し、革命化と現代化をいちだんと強めることである。

「四人組」は毛主席の軍事路線と建軍の原則に根本から反対し、軍隊にたいする党の絶対的指導を破壊し、野戦軍、地方軍、民兵三結合の統一的武装力体制を破壊し、一九七五年の軍事委員会拡大会議の決議の貫徹を妨害しようとして、数かずの悪事をはたらいた。軍隊に反対し、軍隊を攪乱し、のっとりとしたかれらの陰謀活動は、全軍の広範な指揮員、戦闘員の抵抗にあつた。かなめをつかんで軍隊を治めるには、毛主席の軍事思想と軍事路線を指針とし、部隊の実情と密接に結びつけて、「四人組」をほりさげて摘発、批判し、毛主席の「軍隊工作をつかむとは、路線についての学習をやり、正しくない作風を改め、綱張り主義、セクト主義をやらす、団結を重視することにはかならない」という指示をいちだんと貫徹しなければならぬ。このほどこ、全軍は「四人組」によって転倒された路線の是非についての十の問題をつかんで、つっこんだ思想・政治路線の教育をおこない、古田会議決議の精神およびわが軍の政治工作のすぐれた伝

統を大いに発揚し、雷鋒と「筋金入り第六中隊」に学ぶ大衆運動を幅広くくりひろげ、このため戦争にそなえる訓練が促進され、生気はつらつとした革命的気運が現われている。われわれは、わが軍の革命化を新たな水準にひき上げるために、ひきつづき努力しなければならない。

われわれは、帝国主義とりわけ社会帝国主義の侵略と脅威に直面している。ソ修はわが国を滅ぼそうという野望を捨てておらず、われわれはかならず戦争へのそなえを整えておかなければならない。毛主席の軍事思想と軍事路線にしたがって、「強大な陸軍をもつだけでなく、また強大な空軍と強大な海軍をもつ」という毛主席の指示をさらにすすんで実行にうつさなければならぬ。毛主席の人民戦争の思想を堅持しなければならず、敵が戦争を早くおこそうと遅くおこそうと、小規模な戦争をやるうと大規模な戦争をやるうと、また通常兵器による戦争をやるうと核戦争をやるうと、わが軍は確固として人民戦争という宝刀に依拠し、敢えて侵入してくるすべての敵を粉砕する準備をいつでも整えておかなければならない。「四人組」は国防の現代化を「軍事一点ばりの観点」「唯武器論」であると中傷して、わが軍の現代化を破壊し、歯まで武装した敵を前にして、わが軍を立ちおくれた劣勢の状態におこうとたくらんだ。われわれは、戦争へのそなえを破壊した「四人組」の犯罪的行為をほりきり捨てて摘発、批判し、各側面から戦争へのそなえを着実に強化しなければならない。とりわけ「厳格に訓練し、厳格に要求してこそ、はじめて

戦うことができるのだ」という毛主席の教えにしたがって、大いに軍事訓練を強化し、敵を撃滅する筋金入りの腕を懸命に磨かなければならない。各級各種の軍事学校をりっぱに運営し、各級の軍事・政治指導骨幹と技術人材の養成に大いに力を入れなければならない。同時にまた、国防科学技術の研究と国防工業生産を大いに強化し、わが軍の装備を新たな水準にたかめなければならない。

民兵工作はひじょうに重要である。野戦軍、地方軍、民兵三結合の武装力体制にもとづいて、民兵建設を強化し、組織面、政治面、軍事面で着実に実行されるようにし、プロレタリア階級独裁を強固にするために貢献しなければならない。

全党、全軍、全国人民は、反侵略戦争の準備をしっかりと整え、台湾解放の準備をしっかりと整えるために奮闘努力しなければならない。

公安工作と社会主義法秩序を強化しなければならない。敵と味方を転倒させる「四人組」のさまざまな謬論の害毒を一掃し、敵と味方とはっきり区別し、独裁のホコ先を寸分たがわず地主、富農、反動的資本家およびすべての売国奴をふくむ反動階級、反動派、反革命分子にむけなければならない。窃盗犯、詐欺犯、殺人・放火犯、ごろつき集団、殴打・破壊・略奪をはたらく者および社会主義社会の秩序をひどく破壊する悪質分子にたいしても、独裁を実行しなければならない。

らない。的確ということに重点をおいて、着実に、的確に、容赦なく、一にぎりの階級敵に打撃をくわえ、人民の利益を保護し、社会主義制度をまもらなければならぬ。

第七、かならず民主を発揚し、民主集中制を健全にすること。

人民の内部では、自由もなくてはならないし、規律もなくてはならない。また民主もなくてはならないし、集中もなくてはならない。こうした民主と集中の統一、自由と規律の統一こそ、われわれの民主集中制なのである。民主集中制がなければ、プロレタリア階級独裁は強固ではありえない。

人民民主と党内民主を十分に発揚し、人にものを言わせ、批判をさせるのは、毛主席の一貫した教えである。一九七三年十一月二十一日、毛主席は江青を批判した大衆の投書に、「印刷して政治局の諸同志に配布せよ。一部の意見はよい意見であり、批判を許さなければならぬ」という指示を書いた。その後まもなく、毛主席はまた「四人組」の横行跋扈ばうこにたいし、「一部の同志はもっぱら他人を批判するが、他人の批判は一言も許さない。ちょっとでも批判されると、まるで自分の祖先三代の墓でもあばかれたかの如くである。なにかという人を『三反分子』『五一六反革命分子』ときめつける」とするどく指摘した。毛主席の指示に反対する「四人組」は、

一方ではほしのままに人民民主と党内民主をふみにじり、やたらに人を攻撃したり、人にレッテルをはりつけたりし、党の上へのさばり、人民の頭上にあぐらをかいて威張りちらした。他方は、かれらはまた無政府主義をおり立て、「党委員会をのけものにして革命をやる」とか、「ホコ先を上級にむけることが大方向である」とか、「すべての規則や制度をたたきつぶせ」とか、「混乱すればするほどよい」などとまくしたてた。かれらはプロレタリア階級の民主も破壊すれば、プロレタリア階級の集中も破壊した。「四人組」をつつこんで摘発、批判するなかで、かならず人民民主と党内民主を十分に発揚し、民主集中制を健全なものにしなければならぬ。

民主集中制を健全なものにするためには、毛主席の教えにしたがって、民主生活とはなにか、民主制と集中制との関係はどういうものかがわかるよう、われわれの同志を教育しなければならぬ。一方では確実に党内の民主生活をひろげ、毛主席が一貫して提唱した「気づいたことは何でも言い、言うこととは残さずに言う」「言う者はとがめられず、聞く者はいましめとする」「誤りがあれば改め、なければいっそう努力する」ということを真剣に実行するようにし、他方では極端な民主化に走り、規律を破壊する自由放任主義に走るのを防がなければならない。プロレタリア階級独裁の条件のもとで、民主を発揚するのは、階級敵との闘争をよりよくすすめるためであり、人民内部の矛盾を正しく処理するためであり、党の指導を強化し、プロレタリア階級独裁

を強固にして、社会主義の経済的土台に奉仕するためであつて、けつして党の指導とプロレタリア階級独裁を弱体化ないし破壊するものではなく、社会主義の経済的土台を弱体化ないし破壊するものではない。

民主集中制を健全なものにするためには、また断固としてあらゆる無組織、無規律の行為に反対し、(一)個人は組織にしたがい、(二)少数は多数にしたがい、(三)下級は上級にしたがい、(四)全党は中央にしたがう、という党の規律をかさねて強調しなければならない。三大規律・八項注意で兵士を教育し、幹部を教育し、大衆を教育し、党員と人民を教育しなければならない。

毛主席は次のようにのべている。「われわれの目標は、集中もあれば民主もあり、規律もあれば自由もあり、意志の統一もあれば、個人の気持がのびのびし、生きいきとして活発でもある、という政治的局面をつくり出し、こうして社会主義革命と社会主義建設を有利にし、困難をわりあい克服しやすくし、わが国の現代的工業と現代的農業をわりあい速いテンポで建設し、党と国家をわりあい強固で、わりあい風波にたえられるよきなものにすることである。」われわれは毛沢東思想で全党、全軍、全国各民族人民の認識を統一し、民主集中制を健全なものにし、毛主席が提唱したこのような政治的局面を実現させなければならない。

第八、かならず全般的に配慮し、全面的に按配する方針を貫徹すること。

全般的に配慮し、全面的に按配する、これはわが党の一貫した方針である。これは、どういふ方針なのか、ほかでもなく、社会主義建設のためにすべての積極的要素を動員するということがある。これは一つの戦略的方針である。

この方針を貫徹するには、「四人組」の妨害と破壊が各方面にもたらした悪い結果をとりのぞき、毛主席がわが党のために定めたプロレタリア政策を全面的に、正しく貫徹しなければならぬ。幹部問題、知識分子問題、農山村へおもむく知識青年の問題、少数民族問題、統一戦線問題、およびその他の諸問題は、いずれも全般的に配慮するという観点から出発して、適切に按配しなければならない。毛主席のこうした全般的に配慮するという思想は、全党、とくに各級の指導的幹部がかならず真剣に把握し、よりよく実践にうつさなければならない。

幹部はわが党の貴重な財産である。これまでの幹部審査のなかで残されてきた一部の問題は、厳正に、真剣に、できるだけ早く、適切に処理すべきである。仕事はやれるがまだそれをあたえられていない人には、できるだけ早く適当な仕事をあたえるようにする。老齢で体が弱く、仕事のやれない人にも、適切な按配が必要である。審査の結論を必要とする少数の人には、できるだ

け早く結論を出すべきである。「四人組」が人におしつけた中傷やぬれ衣は、すべてくつがえされるべきである。同時に、われわれの同志、とりわけかつて審査をうけた同志は、かならずプロレタリア文化大革命に正しく対処し、大衆に正しく対処し、自分自身に正しく対処しよう心がけなければならない。

知識青年は午前八時、九時の太陽であり、それに教育も受けている。われわれはかれらを社会主義の現代化された強国を建設する新鋭軍に育成すべきである。毛主席の「知識青年が農村へいって、貧農・下層中農の再教育をうけることは、たいへん必要である」という指示は、あくまでも貫徹しなければならない。具体的な仕事のなかに存在するさまざまな問題については、統一的に解決するという方針にもとづいて、着実に解決すべきである。

少数民族と辺境地区の工作をりっぱにすすめることは、ひじょうに重要である。誠心誠意、積極的に少数民族を援助しなければならない。共産主義的自覚をもつ少数民族の幹部を真剣に養成し、少数民族地区の社会主義革命と社会主義建設を着実にりっぱにやらなければならない。プロレタリア階級の民族政策についての教育を恒常的に、広範におこない、主として大漢民族主義に反対するとともに、また地方民族主義にも反対し、漢族と少数民族との関係をよくし、各民族の団結をうち固め、発展させなければならない。

毛主席は、「どんな人でも、ほんとうに敵と味方をはっきり区別し、人民に奉仕する人でさえあれば、われわれはその人と団結するものである」と教えている。われわれはこの方針を堅持し、労働者階級の指導する、労働同盟を基礎とした、愛国的民主政党、愛国人士および台湾同胞、香港・澳門同胞、海外華僑同胞をふくむ統一戦線を発展させなければならない。

以上にのべたのは、当面と今後の一時期におけるわが党の、かなめをつかんで国を治めるための八項目の任務であり、これは光栄にして困難にみちた戦闘任務である。われわれは骨の折れる大量の仕事をやって、諸任務を全面的に貫徹しなければならない。中央は、適当な時期に第五期全国人民代表大会を招集することを決定した。この大会は、わが国人民の政治生活におけるいま一つの大きな出来事となるであろう。この大会は、わが国のすばらしい情勢をさらに強固にし発展させ、王・張・江・姚「四人組」を粉砕した偉大な勝利の成果をさらに強固にし発展させ、かなめをつかんで国を治めるための戦闘諸任務を全国の各民族人民が勝利のうちに遂行するよう促すであろう。全国人民代表大会を招集すると同時に、中国人民政治協商會議第五期全国委員会も招集されるであろう。われわれは真剣に努力し、党内党外のすべての積極的要素を動員し、全党、全軍、全国各民族人民の大団結をつよめ、プロレタリア階級独裁を強固にし、偉大な社会主義祖国を建設するためにともて奮闘しなければならない。

同志のみなさん！

十一回目の路線闘争の経験を総括し、国内情勢と国際情勢の推移を展望するとき、われわれは、より大きな勝利をたたかいたることができるといふ確信にみちるのである。われわれのこの党には大いに希望があり、われわれのこの国には大いに希望がある。毛主席がのべているように、「こうした楽観主義には科学的根拠がある。われわれが、マルクス・レーニン主義をよりよく身につけ、自然科学をよりよく身につけさえすれば、つまり、客観世界の法則をよりよく身につけ、主観主義の誤りをあまり犯さないようにしさえすれば、われわれの革命と建設の仕事は、かならずその目的を達成することができるのである。」わが党が民主主義革命の完全な勝利と社会主義革命の偉大な勝利をかちとってきた過程は、とりもなおさず全党が毛主席の指導のもとに客観世界の発展法則をますます多く身につけ、そしてそれをよりどころとして党の路線と政策を定め、かつ実行してきた過程であった。今回の代表大会を経て、また「四人組」を摘発、批判する偉大な闘争と全党の整風運動を経て、わが党はかならずや政治面でさらに成熟し、思想面でさらに一致し、組織面でさらに強固になるものと期待される。わが国の社会主義革命と社会主義建設の事業は、かならずや大きな足どりで勝利のうちに前進するであろう。

もちろん、道は平坦なものではなく、革命はつねに波状的に前進するものである。われわれはいかなるときでも、弁証法にもとづいて事をはこばなければならない。困難なときには光明に目をむけ、くじけずひるまずに努力をつづけ、勝利のときには前進途上の困難に目をむけ、おごりやあせりをいましめなければならぬ。党中央の指導のもとに、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、毛主席の遺志を受け継ぎ、党の十一回大会の路線を堅持し、かなめをつかんで国を治め、ひきつづき革命をおこない、団結してたたかうならば、わが国の人民はかならずやこの世のいかなる困難をも克服して、人類の奇跡をつくり出すことができるものと、われわれはかく信じている。そしてマルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想で武装した中国共産党と中国人民が、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の途上で、内外の階級敵にうち勝ち、プロレタリア階級独裁をまもることに長じているばかりでなく、現代的農業、現代的工業、現代的国防、現代的科学技術をもつ偉大な社会主義の強国を建設することにも長じており、そして人類に比較的大きな貢献をつくすことを全世界は目にするであろう。

無敵のマルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想万歳！

偉大な、光栄ある、正しい中国共産党万歳！

中国共産党
第十一次全国代表大会の
政治報告にかんする決議

(中国共産党第十一次全国代表
大会で1977年8月18日に採択)

中国共産党第十一回全国代表大会の 政治報告にかんする決議

(中国共産党第十一回全国代表大会で
一九七七年八月十八日に採択)

中国共産党第十一回全国代表大会は、華国鋒主席が中央委員会を代表しておこなった政治報告を一致して採択する。

大会は次のことを確認する。華主席の政治報告は、マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想の偉大な旗じるしを高くかかげ、党の十一回目の路線闘争の基本的経験を全面的に総括し、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命についての毛主席の偉大な理論を正確に解明し、国際情勢と国内情勢を深くほりさげて分析し、当面および今後の一時期における任務を明確に提起している。これはわが党、わが軍、わが国人民をみちびいて、社会主義革命と社会主義建設の新たな勝利をたたかいとる戦闘的綱領である。

大会は、わが党が王洪文・張春橋・江青・姚文元反党集団を粉碎し、十一回目の路線闘争の偉大な勝利をかちとったことに熱烈な歓呼をおくる。大会は、華国鋒同志をはじめとする党中央が「四人組」粉碎のためにとった一連の措置に全面的に賛意を表し、王洪文・張春橋・江青・姚文元反党集団にかんする十期三中総の決議に完全に賛意を表する。

大会は、第一次のプロレタリア文化大革命が勝利のうちに終結したことによって、わが国の社会主義革命と社会主義建設は新たな発展の時期にはいったことを指摘する。大会は、党中央が毛主席の遺志にもとづいてうち出した、かなめをつかんで国を治めるという戦略的決定、およびこの戦略的決定を実現するための八項目の戦闘任務に一致して賛意を表し、党中央が毛主席の対外活動路線にもとづいてうち出した諸方針、諸政策に一致して賛意を表する。

大会は、全党、全軍、全国各民族人民に次のようによびかける。毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、毛主席をはじめとする党中央の指導のもと、一致団結して、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命を堅持し、「四人組」を摘発、批判する偉大な闘争を最後までおしすすめ、その反革命修正主義路線がもたらした害毒と影響を一掃し、わが国の政治、経済、軍事、文化および対外活動の諸分野で、毛主席のプロレタリア革命路線を全面的に、正しく貫徹し、党内党外、国内国外のあらゆる積極的要素を動員して、党の第十一回全国代表大会がうち出した戦闘

諸任務の完成のため、今世紀中にわが国を偉大な社会主義の現代化された強国にきずきあげ、人類に比較的大きな貢献をするために奮闘努力しよう。

中国共産党規約

(中国共産党第十一次全国代表
大会で1977年8月18日に採択)

中国共産党規約

(中国共産党第十一回全国代表大会で
一九七七年八月十八日に採択)

総綱

中国共産党は、プロレタリア階級の政党であり、プロレタリア階級の階級的組織の最高形態であり、プロレタリア階級の先進分子によって構成され、プロレタリア階級と革命的大衆を指導して階級敵とたたかう、生氣はつらつとした前衛組織である。

社会主義の全歴史的段階における中国共産党の基本綱領は、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命を堅持し、ブルジョア階級とすべての搾取階級を逐次消滅し、社会主義をもって資本主義にうち勝つことである。党の最終目的は、共産主義を実現することにある。

中国共産党の指導思想と理論的基礎は、マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想である。党は、あくまで修正主義に反対し、教条主義と経験主義に反対する。党は、弁証法的唯物論と史的

唯物論の世界観を堅持し、観念論と形而上学の世界観に反対する。

偉大な指導者であり教師である毛沢東主席は、中国共産党の創設者であり、現代におけるもつとも偉大なマルクス・レーニン主義者である。毛主席は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を革命の具体的実践と結びつけ、帝国主義と国内の反動的階級に反対する闘争のなかで、党内の右と「左」の日和見主義路線に反対する闘争のなかで、国際的現代修正主義に反対する闘争のなかで、マルクス・レーニン主義をうけつぎ、まもり、発展させた。毛主席はわが党、わが軍、わが国人民を指導して、長期にわたる革命闘争と革命戦争を経て、新民主主義革命の完全な勝利をかちとり、プロレタリア階級独裁の中華人民共和国をうちたて、つづいてまた、プロレタリア階級とブルジョア階級との激しい複雑な闘争を経て、史上かつてなかったプロレタリア文化大革命を経て、社会主義革命と社会主義建設の偉大な勝利をかちとった。毛主席の旗じるしは、わが党が団結してたたかい、勝利をかちとる偉大な旗じるしである。

社会主義社会は、相当長い歴史的段階である。この歴史的段階においては終始、階級、階級矛盾、階級闘争が存在し、社会主義と資本主義との二つの道の闘争が存在し、資本主義復活の危険性が存在しており、また帝国主義と社会帝国主義による転覆と侵略の脅威が存在している。これらの矛盾は、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の理論と実践によってのみ解決することができる。

わが国のプロレタリア文化大革命は、ほかでもなく、社会主義の条件のもとで、プロレタリア階級がブルジョア階級とすべての搾取階級に反対し、プロレタリア階級独裁をうち固め、資本主義復活を防ぐための政治大革命である。こうした性質の政治大革命は、今後何回もおこなわなければならない。

中国共産党は、社会主義の全歴史的段階における党の基本路線を堅持する。敵味方のあいだの矛盾と人民内部の矛盾を正しく区別し処理し、プロレタリア階級独裁をうち固め強化しなければならない。誠心誠意労働者階級に依拠し、貧農・下層中農に依拠し、広範な知識分子およびその他の勤労大衆と団結して、すべての積極的要素を動員し、労働者階級の指導する、労働同盟を基礎とした革命的統一戦線を発展させなければならない。プロレタリア階級の民族政策を堅持し、全国各民族人民の大団結を強化しなければならない。階級闘争、生産闘争、科学実験の三大革命運動をひきつづきくりひろげ、独立自主、自力更生、勤儉建国の方針および、戦争にそなえ、自然災害にそなえ、人民のためにという方針を堅持し、大いに意気どみ、つねに高い目標をめざし、多く、はやく、りっぱに、むだなく社会主義を建設しなければならない。党は全国各民族人民を指導して、今世紀中にわが国を農業、工業、国防、科学技術の現代化された社会主義の強国

にきすぎあげなければならない。

中国共産党は、プロレタリア国際主義を堅持し、大国ショービニズムに反対し、断固として、全世界の真のマルクス・レーニン主義の政党、組織と団結し、全世界のプロレタリア階級、被抑圧人民、被抑圧民族と団結して、ソ米両超大国の覇権主義に反対するため、帝国主義、現代修正主義、各国反動派を打倒するため、人が人を搾取する制度を地球上から一掃して全人類の解放をかちとるため、ともに奮闘するものである。

思想面、政治面での路線が正しいかがすべてを決定する。全党の同志はかならず、毛主席のプロレタリア革命路線を全面的に正しく貫徹し、マルクス主義をやるのであって修正主義をやってはならない、団結するのであって分裂してはならない、公明正大であって陰謀術策をめぐらしてはならないという三項目の基本原則を堅持しなければならない。三項目の基本原則に反する潮流にたいしては、敢然とこれに立ちむかう革命精神がなければならない。

全党は、民主集中制の組織原則を堅持し、民主の基礎のうえに立つ集中と、集中の指導のもとにおける民主を實行しなければならない。党内の民主を十分に発揚し、全党員と党の各級組織の積極性と創意性を發揮させ、官僚主義、命令主義、軍閥主義に反対しなければならない。党の規律を厳格に遵守し、党の集中と統一をまもり、党の団結を強化して、党を分裂させる行為と分派

活動に反対し、党にたいして独立性をふりまわすことに反対し、無政府主義に反対しなければならない。党内の同志関係の面では、「気づいたことは何でも言い、言うことは残さずに言う」「言う者はとがめられず、聞く者はいませとす」という原則を實行しなければならず、弁証法的方法をとり、団結の願いから出発し、批判あるいは闘争を経て、是非を明らかにし、新しい団結に達するようにしなければならない。集中もあれば民主もあり、規律もあれば自由もあり、意志の統一もあれば、個人の気持がのびのびし、生きいきとして活発でもある、という政治的局面をつくり出すよう努めなければならない。

党は、「任用は賢のみによる」というプロレタリア幹部路線をまじめに実行し、「任用は縁故のみによる」というブルジョア幹部路線に反対しなければならない。毛主席の提示した五つの条件にもとづいて、大衆闘争のなかで何百万何千万というプロレタリア革命事業の継承者を育成し養成しなければならない。個人的野心家、陰謀家、二面派をとくに警戒し、このような悪人が党と国家の各級指導部をのつとるのを防ぎ、党と国家の各級指導部の純潔を保証しなければならない。

全党はかならず、大衆路線と実事求是のすぐれた伝統を保持、発揚し、理論と實際を結びつける作風、大衆と密接に結びつく作風、批判と自己批判の作風を保持、発揚し、謙虚で慎み深く、

おごらずあせらず、刻苦奮闘する作風を保持、発揚して、黨員、とくに党の指導的幹部が職権を濫用していかなる特権をも手に入れることがないようにし、ブルジョア階級の思想、作風と断固として闘争しなければならぬ。

中国共産党の黨員は、いついかなるところにおいても個人の利益を党と人民の利益にしたがわせ、困難をおそれず、犠牲をおそれず、党の綱領の実現のために積極的に活動し、共産主義の事業のために終生奮闘しなければならない。

中国共産党は、偉大な、光榮ある、正しい党であり、全中国人民の指導的中核である。全党は、かならずマルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想の偉大な旗じるしを永遠に高くかかげ、断固としてこれをまもり、わが党の事業がひきつづきマルクス主義の路線にそって勝利のうちに前進することを保証しなければならない。

第一章 党 員

第一条 満十八歳に達した中国の労働者、貧農・下層中農、革命軍人およびその他の革命者で、党の規約を認めて、党の一つの組織に参加し、そのなかで積極的に活動し、党の決議を履行し、党の規律を遵守し、党費をおさめることを希望する者のみが、中国共産党に加入できる。

第二条 中国共産党はその黨員に、次のことを要求する。

(一) マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想を真剣に学習し、資本主義を批判し、修正主義を批判し、世界観の改造に努めること。

(二) 誠心誠意人民に奉仕し、個人や少数の者のための私利をはからないこと。

(三) 自分に反対したことがあり、その反対が誤りであった人をもふくめて、党内党外の団結できるすべての人と団結すること。

(四) 大衆と密接に結びつき、事あるごとに大衆と相談すること。

(五) 批判と自己批判を真剣にくりひろげ、自分の欠点や誤りを勇敢に改め、党の原則に違反する言論と行為にたいして敢然と闘争すること。

(六) 党の統一をまもり、党を分裂させるいかなる分派組織および分派活動にも参加せず、これに反対すること。

(七) 党にたいして誠実であり、党の規律、国家の法規を遵守し、党と国家の機密を厳守すること。

(八) 党からあたえられた諸任務を積極的に完遂し、階級闘争、生産闘争、科学実験の三大革命運動のなかで前衛としての模範的役割をはたすこと。

第三条 入党を申請する者は、個別的に入党の手続きをとらなければならない。正式党员二名の責任ある推薦を得て、入党志願書に記入したあと、支部が審査し、広く党内党外の大衆から意見をもちとめたうえで、支部大会で可決し、上級の党委員会の承認を得られたときに、はじめて予備党员になることができる。

上級の党委員会には、入党申請者にたいし、その入党を承認するまえに、担当者を指定して入党申請者と面談させ、真剣に審査しなければならない。

第四条 予備党员の予備期間は一年とする。党組織は予備党员にたいし、教育と査察を強化すべきである。

予備党员の予備期間がおわれれば、党支部は、予備党员が正式党员となりうるかどうかについて遅滞なく討議すべきである。党员の条件をそなえている者にたいしては、規定の時期に正式党员とすべきである。ひきつづき査察する必要のある者にたいしては、その予備期間を延長することができるが、ただし一年をこえてはならない。たしかに党员の条件をそなえていない者にたいしては、予備党员としての資格を取り消すべきである。予備党员から正式党员になる場合、または予備期間を延長する場合、あるいは予備党员の資格を取り消す場合には、いずれも支部大会で可決し、上級の党委員会の承認を経なければならない。

予備党员の予備期間は、上級の党委員会がその入党を承認した日から起算する。党员の党歴は、予備党员が正式党员になった日から起算する。

予備党员には、正式党员のもつ表決権、選挙権、被選挙権がない。

第五条 党员が党の規律に違反した場合、党組織は教育を施さなければならない。また具体的な情況におうじて、それぞれ警告、嚴重警告、党内職務の罷免、党籍を保留したうえでの觀察、除名の処分に付することができる。

党员にたいする、党籍を保留したうえでの觀察の期間は、長くても二年をこえてはならない。党籍を保留したうえでの觀察の期間は、表決権、選挙権、被選挙権がない。党籍を保留したうえでの觀察を経て誤りを改めた党员には、これらの権利を回復すべきであり、かたくなに誤りを改めない者は、除名すべきである。

確実な証拠のある裏切り者、特務、あくまで悔い改めない資本主義の道をあゆむ実権派、階級異分子、墮落変質分子、新たに生まれたブルジョア分子は、党から除名すべきであり、再入党は許さない。

第六条 党员にたいする規律処分は、支部大会の決定を経て、上級の党委員会に報告し、その承認を得なければならない。特殊な事情のもとでは、党の基層委員会とそれ以上の各級党委員会

が、党員を規律処分に付する権限をもつ。

地方の各級党委員会委員を党内職務の罷免、または党籍を保留したうえでの観察、あるいは除名の処分に付する場合は、同級の党委員会が決定し、上級の党委員会に報告して、その承認を得なければならぬ。

軍隊の各級党委員会委員にたいする規律処分については、中央軍事委員会が党規約にもとづいて、しかるべき規定を作成する。

中央委員会委員、委員候補にたいする規律処分については、中央委員会または中央政治局によって決定されなければならない。

党組織が党員にたいする処分の決定をおこなう場合は、特殊な事情のないかぎり、処分をうける本人に通知して会議に出席させるべきである。処分をうけた党員は処分の決定にたいして異議のある場合、再討議を要求することができ、また上級の党委員会さらには中央委員会にまで訴願する権利をもつ。

第七条 党員で革命の意志が衰退し、党員としての役割をはたさず、たびたび教育してもなお立ちなおらない者にたいしては、離党を勧告することができる。党員にたいする離党の勧告は、支部大会の決定を経て、上級の党委員会に報告し、その承認を得なければならない。

党員で正当な理由もなく、六カ月にわたって、党の組織生活に参加せず、党のあたえた仕事をせず、しかも党費をおさめない者は、党から自動的に離脱したものと認められる。

党員が離党を要求するか、あるいは党から自動的に離脱した場合、支部大会で除籍を決定するとともに、上級の党委員会に報告して記録に留める。

第二章 党の組織制度

第八条 党は民主集中制にもとづいて組織される。

全党は、民主集中制の規律にしたがわなければならない。つまり、個人は組織にしたがいがい、少数は多数にしたがいがい、下級は上級にしたがいがい、全党は中央にしたがわなければならない。

第九条 党の各級代表大会と各級委員会は、いずれもプロレタリア革命事業の継承者の五つの条件および老年、中年、青年の三結合という原則にもとづき、民主的協議を経て無記名投票の選挙によって選出される。

第十条 党の最高指導機関は、党の全国代表大会とそれによって選出される中央委員会である。地方と軍隊の各級の党指導機関は、同級の党代表大会あるいは党員大会とそれによって選出される党委員会である。各級の党代表大会は、同級の党委員会によって招集される。地方、軍隊

の各級の党代表大会の招集と党委員会の人選は、すべて上級の党委員会の承認を経なければならぬ。

第十一条 党の各級委員会は、集団指導と個人分担責任制とを結びつけるという原則を執行する。集団の政治的経験と集団の知恵に依拠し、すべての重要問題は集団で決定するとともに、個人にそのはたすべき役割を發揮させなければならない。

党の各級委員会は、大衆との密接な結びつき、および精鋭・簡素化の原則にもとづいて、事務機構を設ける。県および県以上の各級党委員会は、必要におうじて、自己の代表機関を派遣することができる。

第十二条 党の各級委員会は、定期的に代表大会あるいは黨員大会にその活動を報告し、つねに党内党外の大衆の意見に耳をかたむけ、その監督をうけなければならない。

黨員は、党の各級組織と各級の指導的工作要員にたいして批判と提案をおこなう権利をもち、また級をこえて中央委員会と中央委員会主席にまで、訴願を提出する権利をもつ。いかなる者も批判をおさえたり、仕返しをしたりすることは絶対に許されない。批判をおさえたり、仕返しをしたりした者は、査問に付し処分すべきである。

黨員は、党組織の決議と指示にたいして異議があれば、態度を留保することが許され、また党

の会議に提出して討議する権利をもち、級をこえて中央委員会と中央委員会主席にまで報告する権利をもつ。しかし、行動の面では断固執行しなければならない。

第十三条 党の中央委員会、地方の県および県以上、軍隊の連隊および連隊以上の各級の党委員会には、すべて規律検査委員会を設ける。

各級の規律検査委員会は、同級の党委員会の選挙によって選出され、また同級の党委員会の指導のもとに、黨員にたいする規律教育をつよめ、黨員と黨員幹部の規律履行状況を点検する責任をもち、党の規律に違反する各種の行為とたたかう。

第十四条 国家機関、人民解放軍および民兵、労働組合、共産主義青年団、貧農・下層中農協会、婦人連合会とその他の革命的大衆組織は、すべて党の絶対的指導をうけなければならない。

国家機関と人民団体には、党グループを設けるべきである。中央クラスの国家機関と人民団体の党グループの成員は党中央が指名する。地方各クラスの国家機関と人民団体の党グループの成員は、それぞれに相応する党委員会が指名する。

第三章 党の中央組織

第十五条 党の全国代表大会は、五年ごとに一回ひらかれる。特殊な事情のもとでは、それを

繰り上げ、もしくは繰り延べてひらくことができる。

第十六条 党の中央委員会総会は、中央政治局、中央政治局常務委員会、中央委員会主席、副主席を選出する。

党の中央委員会総会は、中央政治局が招集する。

中央政治局とその常務委員会は、中央委員会総会の閉会中、中央委員会の職権を行使する。

第四章 党の地方および軍隊内の組織

第十七条 地方の県および県以上、軍隊の連隊および連隊以上の各級の党代表大会は、三年ごと一回ひらかれる。特殊な事情のもとでは、上級の党委員会の承認を経て、それを繰り上げ、もしくは繰り延べてひらくことができる。

地方の県および県以上、軍隊の連隊および連隊以上の各級党委員会は、常務委員会および書記、副書記を選出する。

第五章 党の基層組織

第十八条 工場・鉱山・企業、人民公社、機関、学校、商店、居住区、人民解放軍の中隊およ

びその他の基層単位には、革命闘争の必要と党員の人数におうじて、上級党委員会の承認を経て、党の支部、総支部、基層委員会を設ける。

党の支部委員会の選挙は毎年一回おこない、党の総支部委員会および基層委員会の選挙は二年に一回おこなう。特殊な事情のもとでは、上級の党委員会の承認を経て、それを繰り上げ、もしくは繰り延べておこなうことができる。

第十九条 党の基層組織は、戦闘的なとり得としての役割を果たさなければならない。その基本的任務は次のとおりである。

(一) 党員と非党員にたいしてマルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想を真剣に学習するよう指導し、思想政治路線の教育および党のすぐれた伝統と党の基礎知識の教育をおこなうこと。

(二) 広範な人民大衆を指導、結集して、社会主義の道を堅持し、資本主義を批判し、修正主義を批判し、敵味方のあいだの矛盾と人民内部の矛盾を正しく区別し処理し、階級敵と断固たたかうこと。

(三) 党の路線、政策、決議を宣伝、貫徹し、党と国家からあたえられた諸任務を完遂すること。

(四) 大衆と密接に結びつき、つねに大衆の意見と要求に耳をかたむけ、それをありのままに

葉 劍 英

中国共産党第十一回
全国代表大会における
党規約改正についての報告

(1977年8月13日に報告、8月18日に採択)

上級に反映し、大衆の政治、経済、文化面の生活に心をくばること。

(五) 党内の民主を発揚し、批判と自己批判をくりひろげ、活動のうえでの欠点と誤りを摘発、除去し、法規・規律違反、汚職、浪費、官僚主義およびその他すべてのこのましくない傾向とたたかうこと。

(六) 新党員を吸収し、党の規律を執行し、党の組織を整頓し、腐朽したものを吐きだし新鮮なものを取り入れ、党の隊列の純潔をたもち、たえず党の戦闘力を高めること。

中国共産党第十一回全国代表大会における

党規約改正についての報告

(一九七七年八月十三日に報告、八月十八日に採択)

葉 劍 英

同志のみなさん！

ただいまから党中央の委託をうけて、党規約改正についての報告をおこなう。

党の第十一回全国代表大会は、われわれの偉大な指導者であり教師である毛沢東主席の逝去されたあと、わが党が王洪文・張春橋・江青・姚文元「四人組」反党集団粉砕の偉大な勝利をかちとった状況のもとで、英明な指導者華国鋒主席の主宰のもとにひらかれたのである。この大会は、わが党の歴史のうえで偉大な意義と深遠な影響をもつものである。華主席が大会でおこなった政治報告は、マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想の偉大な旗じるしを高くかかげ、毛主席の提起したプロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の偉大な理論を精確に解明し、党の十一回目の路線闘争の基本的経験を全面的に総括し、国内国際の情勢を深く分析して、今後

の一時期におけるわが党の戦闘任務をはっきりとうち出している。華主席の政治報告は、全党、全軍、全国各民族人民が毛主席の遺志を受け継ぎ、ひきつづき毛主席のプロレタリア革命路線にそって勝利のうちに前進するのをはげますに違いない。

華国鋒同志は毛主席がみずから選んだ後継者である。一九七六年一月、毛主席の提議と、中央政治局の承認を経て、華国鋒同志が中央の日常の仕事を主宰し、國務院総理代理の任につくことになった。同年四月、毛主席の再度の提議と、中央政治局の承認を経て、華国鋒同志が党中央の第一副主席と國務院総理の任につき、党と国家を指導する重任が華国鋒同志にゆだねられた。党中央に第一副主席を設けることは、わが党の歴史にまだかつてなかったことである。これは、毛主席が党と国家権力をのっとる「四人組」の陰謀活動にたいしておこなった、わが党および国家の前途と運命にかかわる重大な戦略的決定であった。毛主席はみずから筆をとって華国鋒同志に、「きみがやれば、わたしは安心だ」と書いたが、これは、華国鋒同志にたいする毛主席の限らない信頼を表わすものである。華国鋒同志は一貫してマルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想の偉大な旗じるしを高くかかげ、毛主席のプロレタリア革命路線を断固として実行している。華国鋒同志は、長期にわたって地方の活動を指導した経験もあれば、また中央の活動を指導する経験もあり、大衆とつながりを持ち、穩当に事をはこび、英明にして果敢で、うち破ることに

も、うち立てることに長じ、政治、経済、軍事、文化活動を全般的に指導する才能をそなえている。党と国家の最高権力をのっとる「四人組」の陰謀活動がその極みに達し、わが党とわが国の革命が危急存亡の瀬戸ぎわにあったとき、華国鋒同志は毛主席の遺志を受け継ぎ、プロレタリア革命家の胆略をもって果敢きわまる措置に出、全党をひきいて一挙に「四人組」を粉砕し、革命を救い、党を救い、わが党と国家の大後退、大分裂を回避させることができた。この非常の時期にさいして、中央政治局は毛主席の生前の配慮にもとづき、華国鋒同志を中国共産党中央委員会主席、中国共産党中央軍事委員会主席に任ずることを一致して決議した。この決議は、全党、全軍、全国各民族人民の心からの支持をうけ、党の十期三中総の一致した支持と賛同をえた。華主席がわが党を指導してたまたかいたった十一回目の路線闘争の勝利は、わが国においても、全世界においても、きわめて偉大な意義をもっている。華主席をはじめとする党中央は、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、かなめをつかんで国を治めるという戦略的決定をうち出し、全党、全軍、全国各民族人民をみちびいて、「四人組」に反対する偉大な闘争を深くひろげ、一連の重要な措置をとって、「四人組」の攪乱と破壊による困難を克服し、わが国の社会主義革命と社会主義建設に新たな高まりをもたらした。華主席をはじめとする党中央の政治路線と組織路線がまったく正しいことは、実践をつうじて立証されている。華主席こそは、毛主席のよき学生、

よき後継者にふさわしく、わが党とわが国人民の英明な指導者にふさわしく、わが軍隊の英明な統率者にふさわしい。毛主席は、毛主席のきりひらいたプロレタリア革命事業をたえず前進させ、わが党、わが軍、わが国各民族人民をみちびいて勝利のうちに二一世紀へと力強く足をふみ入れることができるに違いない。今後、もし国内に資本主義の道をあゆむ実権派が現われて、党と国家の指導権を奪おうとするならば、われわれは毛主席をはじめとする党中央の指導のもとに、プロレタリア文化大革命の方法を用い、全人民を動員し、大民主を實行して、走資派にたいする革命をおこなうであろう。もし、帝国主義、社会帝国主義がわが国に武力侵略をしかけてくるならば、われわれは毛主席をはじめとする党中央の統率のもとに、人民戦争の方法を用い、全人民を動員して、侵略者をうち負かすであろう。全党、全軍、全国各民族人民が毛主席をはじめとする党中央のまわりにかくたく団結すれば、かならず継続革命の途上で、国内国外のあらゆる敵のうち勝ち、あらゆる困難をのり越えて、わが国を偉大な、現代化された社会主義の強国にきざきあげることができるに違いない。

同志のみなさん、われわれの大会の重要な議題の一つは、党規約の改正である。毛主席の指導のもとにおいて、十回大会の政治路線と組織路線はいずれも正しいものであった。「四人組」は十回大会の路線に全面的に反対し、党の建設を破壊し、ブルジョア階級の姿にあわせてわが党を改造しようとしたくらんだ。かれら一味のこうした反動的なもくろみは徹底的な失敗に終わった。党中央は、毛主席の党建設の思想にもとづき、十一回目の路線闘争の新たな経験を汲みとって、十回大会の党規約にたいし必要な改正をおこなうべきだ、と考えている。本大会の討議にかける党規約改正案は、十期三中総で基本的に採択されたものである。改正にさいしては、中央の各部門および地方と軍隊において、指導部から基層にいたるまで党内の各方面の意見を広範にもとめた。ここで、わたしは党規約改正案について、若干の説明をおこないたい。

第一、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、まもることに ついて

党規約改正案はその「総綱」で、偉大な指導者であり教師である毛主席の卓抜した業績について記載し、「毛主席の旗じるしは、わが党が団結してたたかい、勝利をかちとる偉大な旗じるしである」とのべている。これは全党、全軍、全国各民族人民の共通の願いを反映したものである。

毛主席は中国共産党、中国人民解放軍、中華人民共和国の偉大な創設者である。毛主席は全党、全軍、全国各民族人民を指導し、二十八年にわたる革命闘争と革命戦争を経て、帝国主義、封建主義、官僚資本主義の反動的支配をくつがえし、新民主主義革命の完全な勝利をかちとり、

プロレタリア階級独裁の中華人民共和国をうち立てた。ついでまた、毛主席は全党、全軍、全国各民族人民を指導し、プロレタリア階級とブルジョア階級との激しい、複雑な闘争を経て、史上に前例のないプロレタリア文化大革命を経て、社会主義革命と社会主義建設の偉大な勝利をかちとり、わが国を半植民地・半封建の、貧困で立ちおくれた国から初歩的に富み栄えた社会主義国にきざきあげた。毛主席はわが国における、また国際面におけるプロレタリア階級独裁の正反両面の経験を含括し、プロレタリア革命家の雄大な気概をもって、みずから偉大なプロレタリア文化大革命をおこし、指導し、思いきり大衆を立ちあがらせ、党内の資本主義の道をあゆむ実権派を公然と摘発、批判した。この政治大革命は、劉少奇、林彪、王・張・江・姚「四人組」の三つのブルジョア司令部を徹底的に粉碎し、マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想をこれまでになくひろめ、広範な幹部と大衆の階級闘争、路線闘争、継続革命の自覚を大いにたかめ、プロレタリア階級独裁をうち固め、強化し、わが国の社会主義事業の発展を促した。この政治大革命は、わが国で資本主義を復活させようとたくらむ帝国主義と社会帝国主義のはかない夢をうち破り、ソ連でおきた資本主義復活の悲劇がわが国でくり返されるのをくいとめ、プロレタリア革命とプロレタリア階級独裁に新たな経験を提供して、全世界のマルクス主義者と革命的人民にきわめて大きな励ましをあたえた。

毛主席は現代のもっとも偉大なマルクス・レーニン主義者である。毛主席は、帝国主義と国内の反動階級に反対する闘争のなかで、党内の右と「左」の日和見主義路線に反対する闘争のなかで、ソ修裏切り者集団を中心とする現代修正主義に反対する闘争のなかで、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を革命の具体的実践と結びつけ、哲学、政治経済学、科学的社会主義の各分野で、マルクス・レーニン主義をうけつぎ、まもり、発展させた。毛主席の新民主主義革命についての理論は、世界各国の被抑圧民族と被抑圧人民の解放事業に新たな道をきりひらいた。毛主席のプロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命についての理論は、プロレタリア階級独裁をうち固め、資本主義復活を防ぎ、社会主義を建設するための根本的な道をさし示したが、これは毛主席が社会主義革命と社会主義建設の時期に、マルクス主義にたいしておこなったもっとも偉大な貢献である。

毛主席の偉大な功績は、わが国人民の革命史上においても、世界人民の革命史上においても、永遠に不滅である。毛主席の旗じるしは革命の旗じるしであり、勝利の旗じるしである。毛主席の旗じるしを高くかかげ、まもることは、わが国の革命事業の成敗にかかわるばかりでなく、全世界人民の共通の運命にもかかわることなのである。党規約改正案は、「全党は、かならずマルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想の偉大な旗じるしを永遠に高くかかげ、断固としてこれを

まもり、わが党の事業がひきつづきマルクス主義の路線にそって勝利のうちに前進することを保証しなければならぬ」とはっきり規定している。

第二、党の性質と指導思想について

毛主席は、マルクス・レーニン主義の党建設の学説をこのうえなく豊かなものにし、発展させた。毛主席は党の性質、党の指導思想、党の組織原則、党の作風などの面について、いずれも体系だった論述をおこなった。ほかでもなく、毛主席がこのような体系的なマルクス・レーニン主義の党建設の学説をうち立て、しかもこの学説によってわが党をはぐくみ育てたからこそ、わが党はこうした偉大な、光栄ある、正しい党に建設されたのである。

毛主席の党建設の学説にもとづいて、党規約改正案は、十回大会党規約の党の性質についての一節に、改正と補足をおこなった。「総綱」には、次のことが明記されている。「中国共産党は、プロレタリア階級の政党であり、プロレタリア階級の階級の組織の最高形態であり、プロレタリア階級の先進分子によって構成され、プロレタリア階級と革命的大衆を指導して階級敵とたたかう、生氣はつらつとした前衛組織である。」

「四人組」は、派閥によって党をのっとり、資本主義を復活するという目的をとげるため、極力わが党のプロレタリア階級の^{前衛}としての性質を変えてしまおうとした。この連中は、裏切り者、特務、階級異分子、墮落^{変質}分子、新たに生まれたブルジョア分子、ごろつき、社会秩序をはなはだしく破壊するさまざまな悪質分子などをいたるところでかき集め、プロレタリア階級にたいする攪乱^{かくらん}にあけくれるこうした反動的な輩^{かたが}を「先進分子」にまつりあげ、党内に引き入れて、いたるところで指導権をのっとりさせた。「四人組」の一味は、「大衆組織を党にとって代わらせる」「党委員会をのけものにして革命をやる」などと騒ぎたてたが、これはかれら一味でわが党にとって代わろうとするものにほかならない。もしも「四人組」の陰謀が完全に実現すれば、われわれの党はかならず全部変色して、ブルジョア階級のファッショ^{ファッショ}政党に変わってしまったであろうし、わが国は大分裂、大混乱におちいり、半植民地・半封建のふるい道に逆もどりしてしまふことになったであろう。

わが党は、マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想を自己の指導思想および理論的基礎とすることによってのみ、そのプロレタリア階級の^{前衛}としての性質を保つことができるのである。

「四人組」は、根本思想の面からわが党をかき乱そうとたくらんだ。この一味はマルクス主義の看板をかかげて、さかんに修正主義をやり、観念論を^{汎濫}させ、形而上学を^{はびこ}らせた。こうした状況にかんがみ、「総綱」のなかの指導思想の一節には、「党は、あくまで修正主義に反対

し、教条主義と経験主義に反対する。党は、弁証法的唯物論と史的唯物論の世界観を堅持し、観念論と形而上学の世界観に反対する」と書き加えた。

「四人組」はわれわれにとつてうつつけの反面教師である。かれらは党の性質と指導的役割の問題で混乱をつくりだし、われわれにたいへん結構な講義をしてくれた。この一味は反面からわれわれに、「わが党はプロレタリア階級の政党であり、プロレタリア階級の先遣部隊であり、マルクス・レーニン主義によって武装された戦闘部隊である」という毛主席の教えを銘記しなければならぬということ、また「工業、農業、商業、文化・教育、軍隊、政府、党という七つの分野で、党がすべてを指導する」という毛主席のいま一つの教えをも銘記しなければならない、ということを深く認識させてくれた。われわれはかならず、党の思想建設と組織建設をりっぱにやり、党の指導をいっそうつよめて、党の前衛としての役割を發揮しなければならぬ。同時に、各級の革命委員会および労働組合、共産主義青年団、貧農・下層中農協会、婦人連合会などの革命的大衆組織をりっぱに整頓、建設し、党の指導のもとで、その役割をいっそう發揮させるようにしなければならない。

第三、社会主義の全歴史的段階における 党の基本綱領および党の基本任務について

党規約改正案は十回大会党規約のなかの、党の基本綱領にかんする部分に改正をくわえ、次のように規定した。「社会主義の全歴史的段階における中国共産党の基本綱領は、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命を堅持し、ブルジョア階級とすべての搾取階級を逐次消滅し、社会主義をもって資本主義にうち勝つことである。党の最終目的は、共産主義を実現することにある。」

毛主席の指導のもとに、わが国は早くから地主・買弁ブルジョア階級独裁をくつがえし、プロレタリア階級独裁をうち立てており、わが国の社会はすでに社会主義社会となっている。わが国の社会にはなお、すでにくつがえされたブルジョア階級とその他の搾取階級が存在しており、また、新たなブルジョア分子が生まれるであろうし、小ブルジョア階級にたいする改造も長期にわたる努力を必要としている。ブルジョア階級とすべての搾取階級を完全に消滅し、社会主義と資本主義のうちのどちらが勝つかという問題を徹底的に解決して、共産主義社会への逐次移行の条件をつくるためには、社会主義の全歴史的段階において、プロレタリア階級独裁のもとにおける

継続革命を堅持していかなければならない。党規約改正案のなかの、社会主義の全歴史的段階における党の基本綱領は、このような精神にもとづいて規定されたものである。

一九六三年、毛主席は、「帝国主義がまだ存在するという状況のもとでは、社会主義国家が共產主義社会にはいることは不可能である」と指摘した。一九六六年、毛主席はさらにこう指摘している。「帝国主義が全部打倒されたという状況のもとで、全世界が社会主義になったとしても、いつ共產主義をうち立てることができるのかは、やはりはっきりしたことが言えない。なぜなら、ブルジョア階級は打倒されたものの、死滅してはいないからである。かれらはいろいろな方法を用いて、共産党をむしばむであろう。」このことは、帝国主義、社会帝国主義が全部打倒されたあとも、一時期は依然として社会主義社会であることをわれわれに教えている。つまり、階級と階級矛盾および階級闘争、社会主義と資本主義の二つの道の闘争、資本主義復活の危険性は、社会主義の全歴史的段階をつうじて終始存在しているが、帝国主義、社会帝国主義はこの歴史的段階の終結以前に打倒されるということである。毛主席のこの輝かしい思想にもとづいて、党規約改正案は十回大会党規約の「総綱」のなかの関連ある部分に、相応の改正をくわえた。

党規約改正案は、十回大会党規約のなかの国内の任務にかんする一節に若干の改正をくわえ、「中国共産党は、社会主義の全歴史的段階における党の基本路線を堅持する。敵味方のあいだの矛盾と人民内部の矛盾を正しく区別し処理し、プロレタリア階級独裁をうち固め強化しなければならない」、「党は全国各民族人民を指導して、今世紀中にわが国を農業、工業、国防、科学技術の現代化された社会主義の強国にきずきあげなければならない」などの重要な内容を書き加えた。

第四、「三つのやるべきこと、三つのやってはならぬこと」の基本原則について

党規約改正案の「総綱」では、「三つのやるべきこと、三つのやってはならぬこと」の基本原則を堅持することについて、十回大会党規約よりも、いっそうこれをきわだたせた。

毛主席がうち出した「マルクス主義をやるのであって、修正主義をやってはならない、團結するのであって、分裂してはならない、公明正大であって、陰謀術策をめぐらしてはならない」という三項目の基本原則は、毛主席の党建設の学説の重要な発展である。この三項目の基本原則は、わが党五十年らしいの大きな路線闘争の経験を科学的に総括し、党内の二つの路線の闘争の基本的内容を高度に概括し、すべての日和見主義者、修正主義者の主要な政治的特徴をすくなく暴露し

たものである。毛主席はなんどもこの三項目の基本原則を用いて、「四人組」に警告を發し、これらの本質をあげ、その急所をついた。「四人組」は悔い改めることをこぼみ、かたくなに修正主義をやり、分裂をはかり、陰謀術策をめぐらして、党と国家の最高権力をのっとりとうとした。十一回目の路線闘争の勝利をかちとったわれわれの実践が力強く立証しているように、「三つのやるべきこと、三つのやってはならないこと」の基本原則は、党内走資派を見やぶり、それのうち勝つ鋭利な武器である。全党の同志と全国の人民はみな、この三項目の基本原則を堅持し、しっかりとこの武器を掌握しなければならぬ。

毛主席は、「潮流にさからうことはマルクス・レーニン主義の二つの原則である」とのべている。「四人組」はこの革命的原則を改ざんし、その階級的内容を抹殺し、意識的に混乱をつくりだした。かれらは、プロレタリア階級独裁の転覆、資本主義の復活という犯罪的な目的をとげるため、潮流にさからうというこのスローガンを利用して、反党、反社会主義の邪悪な潮流をおおりにたてたのである。われわれの多くの黨員、多くの革命幹部が、「四人組」のおおりにたてた反動的な潮流に直面して、革命の利益から出発し、党の原則を堅持して、敢然とたたかい、敢然と勝利をおさめ、なにもを畏れることなく毛主席の提唱する、潮流にさからう革命精神を發揮したが、われわれはこれをよく学び、發揚していかなければならない。

毛主席のいう、潮流にさからうとは、修正主義をやり、分裂をはかり、陰謀術策をめぐらす邪悪な潮流に反対することである。この精神にもとづき、党規約改正案は、潮流にさからう問題についての十回大会党規約の表現にたいして改正をくわえ、「三項目の基本原則に反する潮流にたいしては、敢然とこれに立ちむかう革命精神がなければならぬ」とはっきり書きいれた。潮流にさからう革命精神は、いかなる状況のもとでも、敢然とマルクス主義の原則を堅持し、修正主義のまきおこす波風にさからい、これを撃退するようわれわれに求めている。潮流にさからう革命精神は、たえず党の団結をつよめ、党内でのいかなる分派活動、分裂活動の傾向にもうち勝っていくようわれわれに求めている。潮流にさからう革命精神は、陰謀術策をめぐらすいかなる者にたいしても、徹底的に暴露し、それのうち勝っていくようわれわれに求めている。公明正大はプロレタリア階級の党性のあらわれであり、陰謀や術策をもてあそぶことは、かならずマルクス主義を裏切り、党の団結を破壊し、プロレタリア革命事業を破壊することになる。全党の同志はかならず、「三つのやるべきこと、三つのやってはならないこと」という鋭利な武器を運用して、正しい潮流と誤った潮流とを区別し、敢然と潮流にさからう革命精神を發揚し、毛主席のプロレタリア革命路線を全面的に、正しく貫徹するためにたたかかなければならない。

第五、党の民主集中制について

十一回目の路線闘争の経験は、党の民主集中制がこのうえなく重要なものであることをいちだと立証している。このため党規約改正案の「総綱」では、この面の内容を書き加え、またその他関連ある条項に若干の必要な規定を書き加えた。

わが党は民主集中制にもとづいて組織されている。わが党の民主集中制とは、民主の基礎のうえに立つ集中と、集中の指導のもとにおける民主である。「四人組」は意識的にわが党の組織原則をふみにじり、反党の分派活動と分裂活動をさかんにやり、民主も破壊したし、集中も破壊した。かれらは横行跋扈し、暴君ぶりを発揮し、異なる意見をもつ者にたいして、やたらにレッテルをはりつけ、棍棒をふりまわして、党内民主をひどくふみにじった。かれらは党の組織原則と党の規律を、捨て去るべき「ありきたり」の「規定や束縛」だと攻撃して無政府主義を鼓吹し、「ホコ先を上級にむけることが大方向である」とわめきたて、党の集中的指導をひどく破壊し、党の団結と統一をひどく破壊した。われわれは、党の分裂と瓦解をはかった「四人組」の反革命的罪状を深くほりさげて摘発、批判しなければならず、同時に全党で民主集中制の教育を真剣にすすめて、民主集中制を健全なものにしていかなければならない。

毛主席は、次のように強く指摘している。「偉大な闘争に直面している中国共産党は、勝利をかちとれるように、党の全指導機関、全党の黨員および幹部が積極性を高度に発揮することを要求する。積極性の発揮というのは、指導機関、幹部および黨員の創造力、責任感、仕事の活発さに、問題の提起、意見の発表、欠点にたいする批判の大胆なことと上手なことに、また指導機関と指導的幹部にたいする愛護の観点からでた監督の役割のうえに、具体的にあらわれなければならない。これらがなければ、積極性というものは中味がなくなる。そして、これらの積極性の発揮は党内生活の民主化にかかっている。党内に民主生活が欠けていけば、積極性の発揮という目的は達せられない。」

どのようにしてはじめて、十分な民主生活をもつことができるのか？ それには、党内において、人民内部において、毛主席の提唱する「気づいたことは何でも言い、言うことは残さずに言う」「言う者はとがめられず、聞く者はいましめとする」「誤りがあれば改め、なければいっそう努力する」という原則を真に実行し、大衆に発言させ、たとえそれが自分へのものしるものであっても、やはり話させる、ということがわれわれに要求される。大衆に発言させず、大衆が異なった意見を持ちだすのをおそれ、大衆の批判をおさえつけるのは、まったく誤りである。それには、民主の方法で、つまり討論の方法、批判の方法、説得・教育の方法で、人民内部の論争の間

題を解決すべきであって、強制と圧服の方法をとってはならない、ということがわれわれに要求される。それには、団結の願いから出発し、批判または闘争を経て、是非を明らかにし、新しい団結に達するという方法をとって、同志のあいだの関係を処理すべきで、「無慈悲な闘争、容赦のない打撃」の方法をとってはならない、ということがわれわれに要求される。また、それには、党委員会内部では、集団指導と個人分担責任制とを結びつける原則を真剣に実行し、集団の政治的経験と集団の知恵に依拠して、自分一人で決めてしまおうか、自分一人では責任を負おうとしないといったよくない傾向を防ぎ、克服する、ということがわれわれに要求される。われわれが十分に民主を発揚しさえすれば、党内党外の広範な大衆の積極性を動員することができ、総人口の九五パーセント以上の人民大衆を団結させることができる。以上のことがやれたら、われわれの仕事はやればやるほどよくなり、われわれのぶつかる困難は比較的はやく克服され、われわれの事業ははるかに順調に発展するであろう。

われわれは民主を発揚することの重要性を十分認識しなければならない。党の民主生活を破壊し、党員の民主的権利を侵すいかなる行為も、民主集中制に違反するものであり、党の規律上、許すことのできないものである。党規約改正案は、次のようにはっきり規定している。すなわち党員は、党の各級組織と各級の指導的工作要員にたいして批判と提案をおこなう権利をもち、ま

た級をこえて中央委員会と中央委員会主席にまで、訴願を提出する権利をもつ。党員は、党組織の決議と指示にたいして異議があれば、態度を留保することが許され、また党の会議に提出して討議する権利をもち、級をこえて中央委員会と中央委員会主席にまで報告する権利をもつ。いかなる者も批判をおさえたり、仕返しをしたりすることは絶対に許されない。批判をおさえたり、仕返しをしたりする者は、査問に付し処分すべきである、と。こうした規定は、党員の民主的権利を保障し、プロレタリア階級の民主制を十分に実行するためのものにほかならない。

もちろん、集中による指導がなければ、民主は正しい方向をうしない、横道にそれてしまおう。その意味からいって、集中を破壊することは民主を破壊することにもなる。「四人組」の影響をうけて、わが党内にはたしかにブルジョア階級の派閥性をふりまわし、無規律状態と無政府状態をこのみ、できれば党組織と上級からの拘束をうけたくないと考える者が一部にいる。かれらは、共産党内では分派組織や分派活動は絶対に許されず、共産党員は党を分裂させるいかなる分派組織や分派活動にも絶対に参加してはならず、かならずこれに反対しなければならぬということを知らず、共産党は民主を必要とするだけでなく、集中をなおさら必要とすることを知らず、党内民主はいずれも規律を強化し戦闘力を増強するためのものであって、それを弱めるためのものではないということを知らず、プロレタリア政党的鉄の規律が、ブルジョア階級にうち勝

ち、革命の勝利をかちとる基本的条件の一つであることを知らない。毛主席は「規律は路線を實行する保障であり、規律がなければ、党は大衆と軍隊をひきいて勝利の闘争をすすめていくことはできない」とのべている。わが党は各民族人民を指導して、八億の人口を擁する国で社会主義革命と社会主義建設をすすめ、プロレタリア階級独裁をたえずうち固め、強化していくものである。鉄の規律なしにこれをなしとげることができらうか？レーニンも、次のようにのべている。「いくら何でもプロレタリア政党的鉄の規律を弱めようとする（とくにプロレタリア階級独裁の時期に）者は、事実上ブルジョア階級をたすけてプロレタリア階級に反対しているのである。」

わが党の行動の統一を保証するためには、党の規律を強化しなければならない。党規約改正案は「党の組織制度」の一章で、「全党は、民主集中制の規律にしたがわなければならない。つまり、個人は組織にしたがひ、少数は多数にしたがひ、下級は上級にしたがひ、全党は中央にしたがわなければならない」と特に強調している。共産黨員は、党組織の決議と上級の決定にたいして、気に入ったものは実行するが、気に入らないものは実行しない、といった自由主義的な態度を絶対にとつてはならないし、表向きは服従するが陰では反対し、支持という看板をかかげて別個のやり方をとるようなことを絶対にしてはならない。毛主席は、早くから次のように指摘して

いる。「党の規律の一つは少数が多数にしたがうことである。少数者は自分たちの意見が否決されたばあひには、多数で採択した決議をまもらなければならない。必要があれば、つぎの会議で再討論を提案することはゆるされるが、それ以外に、行動のうえではどのような反対の態度をも示してはならない。」われわれは、全党で規律教育を強化しなければならない。九期二中総のあと、毛主席は、みんなが『三大規律・八項注意』を歌うよう何回も提唱し、「三大規律・八項注意で、兵士を教育し、幹部を教育し、大衆を教育し、黨員と人民を教育する」ことをくりかえし強調した。いっさいの行動は指揮にしたがひ、歩調をそろえてはじめて、勝利することができらなければならない。

党の民主集中制の原則と規律をまもり、党と大衆との関係をそこなうさまさまの現象を防ぎ、是正するため、党規約改正案はまた、次のように規定している。すなわち党の中央委員会、地方の県および県以上、軍隊の連隊および連隊以上の各級の党委員会には、すべて規律検査委員会を設ける。各級の規律検査委員会は、同級の党委員会の選挙によって選出され、また同級の党委員会の指導のもとに活動をすすめる。その任務は、黨員にたいする規律教育をつよめ、黨員と黨員の規律履行状況を点検する責任をもち、党の規律に違反する各種の行為とたたかい、黨員の

訴願と告発を受けつけ、また黨員にたいする党外大衆の告発も受けつける、と。

毛主席は、次のようにのべている。「われわれの目標は、集中もあれば民主もあり、規律もあれば自由もあり、意志の統一もあれば、個人の気持がのびのびし、生きいきとして活発でもあり、という政治的局面をつくり出し、こうして社会主義革命と社会主義建設を有利にし、困難をわりあい克服しやすくし、わが国の現代的工業と現代的農業をわりあい速いテンポで建設し、党と国家をわりあい強固で、わりあい風波にたぎらされるようなものにするところである。」われわれが民主集中制を真剣に実行し、民主を十分に発揚し、幅広い民主の基礎のうえにたつ集中を実行しさえすれば、かならず毛主席がのべたような政治的局面をつくり出すことができる。全党のみならず、全軍、全国各民族人民のなかにおいても、こうした政治的局面をつくり出すことができるのである。

第六、党の幹部路線について

党規約改正案の「総綱」には、幹部路線についての問題が書き加えられている。幹部路線は政治路線に奉仕するもので、「政治路線が確定されたのちには、幹部が決定的な要因になる。」わが党の幹部路線とはなにか？ 毛主席は次のようにのべている。「幹部をつかうという問題では、

わが民族の歴史には、従来、二つの対立した路線がみられた。その一つは『任用は賢のみによる』路線であり、もう一つは『任用は縁故のみによる』路線である。前者は正道な路線であり、後者は邪道な路線である。共産党の幹部政策は、党の路線を断固として実行し、党の規律にしたがい、大衆と緊密なつながりをもち、ひとりだちで活動できる能力をもち、積極的に仕事をし、私利私欲をはからないことを基準とすべきである。これが『任用は賢のみによる』路線である。』わが党の歴史において、毛主席のプロレタリア幹部路線とブルジョア幹部路線との闘争は、ひじょうに激しいものであった。「四人組」は、悪党どもをかき集めて派閥をつくり、徒党を組んで私利をはかるという点では、これまでの日和見主義路線の頭目たちをはるかにしのいでいる。「四人組」は、革命闘争の試練を経た、毛主席の革命路線に忠実なすべての老年と中年の幹部を敵視し、また、原則を堅持し、修正主義と闘争するすべての青年幹部をも敵視した。「四人組」は、反革命の修正主義幹部路線をおしすすめ、その一味を極力拔擢、重用し、また打撃、圧迫、籠絡とか、地位や利益で釣るとかいった卑劣な手段で、幹部を買収し、その側近を養った。わが党の路線闘争の歴史は、「任用は縁故のみによる」というブルジョア幹部路線は党を分散させ、党を瓦解させる毒薬であり、「任用は賢のみによる」というプロレタリア幹部路線を実行してはじめて、党を團結させ、発展させることができるということをくりかえし立証している。

毛主席は、「プロレタリア革命事業の継承者は、大衆闘争のなかから生まれるのであり、革命のはげしい風波のなかで鍛えられて成長するのである。長期にわたる大衆闘争のなかで、幹部を観察し、識別し、継承者をえらびだし、養成しなければならない」とのべた。党規約改正案は「毛主席の提示した五つの条件にもついで、大衆闘争のなかで何百万何千万というプロレタリア革命事業の継承者を育成し養成しなければならない」と規定している。われわれはかならず文化大革命のなかから、また階級闘争、生産闘争、科学実験の三大革命運動のなかから輩出した、継承者の五つの条件になつた優秀な人材を抜擢し、老年、中年、青年の三結合という原則にもついで、各級の指導部をつくつていかなければならない。新幹部と老幹部は、たがいに学び助けあい、長短相補つていくべきである。老幹部は心から新幹部を援助し、支持し、プロレタリア革命事業の継承者の育成を自分の重大な責務としていかなければならない。

毛主席は「指導者の責務は、結局のところ、主として案をだすこと、幹部をつかうことの二つである」とのべている。各級の指導的同志、とりわけ主な指導的同志は、幹部をつかうことに長じなければならぬ。おのれを知る賢明さをもつべきであるし、また人を知る賢明さをもつべきである。どの同志にもみな、長所もあれば短所もある。自分にたいして、一つが分かれて二つになるという方法をとるとともに、また他人にたいしても、一つが分かれて二つになるという方

法をとり、すべて弁証法にもついで事をはこばなければならぬ。「賢者」なるものは、大局を考え、大本を知り、大事をつかまなければならぬ。もちろん、「賢者」にも、まったく短所がないということはありえず、やはり一つが分かれて二つになるという方法をとらなければならぬ。指導者は、他人にその長所を発揮させ、自分の短所をおぎなうことに長じなければならず、同時にまた、他人がその短所を改めていくのを助けなければならない。これを称して、人を知り、人をつかうことに長ずるといふのである。

誤りを犯した同志にたいしてどういふ態度をとるか、幹部政策のなかの一つの重要な問題である。周知のように、毛主席は誤りを犯した同志を「一撃のもとにたたきのめす」ことに、ざつと反対してきた。毛主席は「正しい態度とは、誤りを犯した同志にたいして『前の誤りを後のいましめとし、病をなおして人を救う』という方針をとり、かれらが誤りを改めるよう援助し、かれらがひきつづき革命をやるのを許すことである」とのべている。毛主席は、誤りを犯した同志にたいしては、一に観察、二に援助という態度をとり、思想的にはつきりさせるとともに、團結していくようにすべきであると一貫して強調してきた。老年、中年、青年をとわず、すべての同志にたいして、みなそうすべきである。

「四人組」は、自分たちと結託して悪事をはたらこうとしない者にたいしては、あれやこれや

の誤りを犯したと、言いがかりをつけたり、無実の罪を着せたりして、これをみな排斥し、打倒しようとした。「四人組」が無慈悲な闘争、容赦のない打撃を實行したのは、われわれの幹部の隊列を切りくずし、われわれの党を切りくずすためである。われわれはかならず、毛主席の教えにしたがい、九五パーセント以上の幹部と団結し、誤りを犯しはしたが改めたいと願っている同志をもふくむすべての革命的同志と団結し、共に仕事をしていかなければならない。

第七、党のすぐれた伝統とすぐれた作風を

保持し発揚することについて

党規約改正案の「総綱」には、次の一節が書き加えられた。「全党はかならず、大衆路線と実事求是のすぐれた伝統を保持、発揚し、理論と実践を結びつける作風、大衆と密接に結びつく作風、批判と自己批判の作風を保持、発揚し、謙虚で慎み深く、おごらずあせらず、刻苦奮闘する作風を保持、発揚して、黨員、とくに党の指導的幹部が職権を濫用していかなる特権をも手に入れることがないようにし、ブルジョア階級思想、作風と断固として闘争しなければならぬ。」

「黨員」「党の基層組織」などの章でも、相応の補足をおこなった。

わが党のすぐれた伝統と作風は、長期にわたる革命闘争のなかで形成されたものであり、早くから広範な黨員と幹部のなかに深く根をおろしている。こうしたすぐれた伝統と作風は、われわれ共産黨員が、ほかのいかなる政党とも区別される顕著な標識である。近年らい、「四人組」はわが党の伝統と作風、とりわけ大衆路線と実事求是のすぐれた伝統をひどく傷つけた。「四人組」の影響をうけて、一部の黨員、幹部のあいだでは、程度の差こそあれ、不正な傾向がひろがっているが、われわれは、こうした状態を大いに警戒しなければならぬ。

党の作風の問題について、毛主席は民主主義革命の時期に一連の重要な指示をおこなった。全国的な勝利の前夜、毛主席は、勝利という条件のもとでは、ブルジョア階級の糖衣でくるんだ砲弾の襲撃を防ぐことにとくに心がけなければならず、「同志たちに謙虚で、慎重な、おごらず、あせらない作風をひきつづき保持させなければならぬし、同志たちに刻苦奮闘の作風をひきつづき保持させなければならぬ」と時宜にかなった指摘をおこなった。全国の解放後、文化大革命の時期にいたるまで、毛主席はこの点をくりかえし強調してきた。これは、わが党が権力をにぎった党の地位におかれており、こうした地位によって多くの黨員はその本分を忘れがちになるからであり、一方、プロレタリア階級独裁のもとで、ブルジョア階級がプロレタリア階級にたいする闘争でとる一つの重要な手段は、かれらの思想や作風でわが党をむしばむことだからである。毛主席はかつて、われわれの一部の幹部が大衆から浮きあがり、大衆と苦楽を共にしながら

ず、名利をあらそい、自分の利益ばかりをはかるといふ危険な傾向にたいして、「われわれはかならず、官僚主義の作風がはびこらないように、人民から浮きあがった貴族階層が生まれないように、警戒しなければならぬ」と厳正に指摘した。毛主席はかつてまた、党内の一部の幹部が実際からはなれ、現状に甘んじて前進したがらず、うぬぼれ、おごり高ぶり、批判と自己批判をおそれているという状況にたいして次のようにのべた。「共産黨員はかならず、成果と欠点、真理と誤謬というこの二分法についてのマルクス主義の弁証法的思想をもたなければならぬ」「およそ、自分の地区、単位、自分自身について、よその地区、単位、他人について、虚心に、真剣に分析をくわえず、マルクス主義の弁証法的分析方法を拒否する同志にたいしては、よくない状況を改めさせるため、同志的な勧告と批判をするべきである。よその部、省、市、区、単位のよい経験、よい作風、よい方法を学びとるといふ、こうしたやり方を制度化すべきだ。」

全党の同志、とりわけ各級の指導的幹部は、毛主席の教えを胸にきざみ、「四人組」批判と整党整風をつうじて、思想の革命化をすすめ、われわれの作風を大いに改めていかなければならぬ。当面、もっとも重要なことは大衆路線と实事求是のすぐれた伝統を保持し、発揚することである。われわれは、もっとも広範な人民大衆ときわめて緊密に結びつき、一刻たりとも大衆から浮きあがることなく、大衆の声につぶさに耳をかたむけ、事あるごとに大衆と相談し、真に人民

大衆を信頼し、人民大衆に依拠しなければならず、マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想をみちびきとして、調査研究にいっそう力を入れ、理論と実践を統一させ、实事求是を旨とし、誠実な人間になり、誠実にものを言い、誠実に事を処理し、謙虚で慎み深く、どのようなものであれ、空いばりやうぬぼれを極力いましめなければならぬ。党のすぐれた伝統とすぐれた作風を保持し、発揚し、ブルジョア階級の思想や作風とたたかうことは、プロレタリア階級独裁のもとにおける党建設の重要な問題である。

第八、黨員と党の基層組織にたいする要求について

共産黨員にたいする要求と党の基層組織の任務について、党規約改正案は十回大会の党規約を基礎にして、いくらかの補足と改正をおこなった。

わが党は権力をにぎった党であり、われわれの国家生活の諸方面で、党はすべてを指導するのである。共産黨員、とりわけ党、政府、軍隊の各級の指導工作をうけもつ黨員幹部の負っている責務は重大である。したがって、党はきびしい要求を黨員、とくに指導工作をうけもつ黨員に出さなければならぬ。わが党の三千五百余万の黨員のうち、文化大革命いらい入党した者が半数近くを占め、党の十回大会後入党した者は七百余万で、新黨員がかなり大きな比重を占めてい

る。新黨員にしろ、古参黨員にしろ、圧倒的多数は、よいか比較的よい黨員である。しかし近年らしい、「四人組」が党の路線を改ざんし、党の組織原則をふみにじり、べつに黨員の規準をもうけ、多くの混乱をつくりだしたので、黨員の隊列に存在する思想面、組織面、作風面の不純には、ゆゆしいものがある、という点をみなければならぬ。毛主席はかつて、「黨員のなかには、組織的に入党していても、思想的には中途半端にしか入党していないか、さらには全然入党していない人もたくさんいる。思想的に入党していないこのような人びとの頭には、まだ搾取階級のきたないものがたくさんつめこまれており、プロレタリア思想とはなにか、共産主義とはなにか、党とはなにかがまるきりわかっていない」とのべた。このような共産黨員は、いまたしかに少なくない。党内にもぐりこんだ悪質分子を一掃するほかに、思想的に入党していない者にたいしては教育をつよめなければならぬ。よいか比較的よい黨員にとっても、革命情勢の進展にともない、ひきつづき自己をたかめていくという任務がある。一般的にいつて、多くの新黨員は党のすぐれた伝統、党の基礎知識、党の規約、規律についての認識がまだ不十分であり、かれらにたいしてこの面の教育をほどこすことは、まったく必要である。黨員にたいする要求についての条項は、こうした状況にもとづいて改正されたのである。

党規約改正案は、黨員にたいして八項目の要求をうち出している。これは、毛主席が提示した

継承者についての五つの条件の精神および、共産黨員はいかにあるべきかということについての、毛主席の一貫した教えにもとづいて書かれたものである。黨員にたいする要求をいくらか具體的に規定することは、これを貫徹するよう黨員を教育するうえでも、また党組織が督促、点検するうえでも有利であることは明らかである。

党規約改正案は、黨員の予備期間についての規定をもうけている。予備黨員は、一律に一年の予備期間を経てはじめて、正式黨員になることができる。このように規定したのは、黨員をよりよく教育し、よりよく査察、了解して、黨員の政治的な質を保証するためである。近年らしい、「四人組」は、べつに黨員の規準をもうけ、「電撃的入党」をやり、一部の投機分子や悪質分子を党内にもぐりこませた。こうした状況からみても、この規定は必要である。

党の基層組織は、階級闘争、生産闘争、科学実験の三大革命運動の第一線に立ち、また党外の広範な大衆ともっとも近い位置にある。黨員にたいしてたえず思想政治教育をおこなって、黨員に前衛としての模範的な役割を果たさせるには、党の基層組織の活動にたよらなければならぬ。革命に力を入れて、生産を促し、仕事を促し、戦争へのそなえを促す諸任務を履行するのに、やはり基層組織にたよらなければならぬ。「四人組」は、党をのっとり権力を奪う犯罪的な陰謀を実現するために、党の基本路線についての教育を党内党外の大衆のあいだで深くくりひ

ろげることには反対し、党の基層組織を整頓することに反対し、これを「ホコ先を下部にむけるものだ」「大ブルジョア階級が小ブルジョア階級を批判するものだ」などと中傷した。「四人組」との闘争で、党の少なからぬ基層組織は、「四人組」のよこしまな風と対決し、妨害をはねのけ、戦闘的なとりでの役割を果たした。党規約改正案は、大慶、大寒、「筋金入りの第六中隊」などの先進的単位の党組織の経験を取り入れて、基層組織の任務についての規定は、その貫徹に役立つようにと、これをいっそう具体的かつ明確なものにした。われわれはかならず、基層組織の建設に力を入れ、基層組織を、わが党が党内党外の広範な大衆を指導して、社会主義革命と社会主義建設をすすめ、プロレタリア階級独裁を強固にし、階級敵とたたかううえでの戦闘的なとりでにしなければならない。

総じていえば、党規約改正案のなかの党員と党の基層組織にたいする要求はいずれも、党員の政治的な質をたかめ、党組織の純潔化をはかり、党と大衆との結びつきをふかめ、党の戦闘力をつよめるためのものである。

同志のみなさん！ 党規約改正案は、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、十分に毛主席の党建設の学説を具体化しており、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の理論と路線を貫徹させており、「四人組」粉碎の偉大な闘争の勝利の成果を反映している。今回の代表大会に

よって採択される新しい党規約は、わが党の思想建設と組織建設を強化する重要な武器となるであろう。わが党が社会主義革命と社会主義建設のなかで、その指導的役割を十分に發揮していきけるようにするため、われわれはかならず、新しい党規約の規定にもとづいて、わが党をいっそう強固な、いっそう生氣はつらつとした党に建設していかねばならない。党の各級組織と各党員は、みな党規約を真剣に学習し、厳格に遵守し、断固として実行しなければならず、党規約に違反するすべての言論、行動と闘争しなければならない。

わが党、わが国はいま、過去をうけつぎ、未来をきりひらく重大な歴史的時点に立っている。

「四人組」粉碎の偉大な勝利は、わが国の第一次プロレタリア文化大革命が勝利のうちに終わり、わが国の社会主義革命と社会主義建設が新しい時期に入ったことをしめしている。プロレタリア階級とブルジョア階級との二つの階級の闘争、社会主義と資本主義との二つの道の闘争、マルクス主義と修正主義との二つの路線の闘争は、まだ長期にわたってひきつづきすすめていかねばならない。今後、文化大革命のような性質をもつ政治大革命は、なん回もおこなわなければならない。われわれの直面している社会主義革命と社会主義建設の任務は、きわめて困難かつ偉大なものである。全党、全軍、全国各民族人民はかならず、華主席をはじめとする党中央の指導のもとに、一致団結して、党の第十一回全国代表大会がうち出した、かなめをつかんで国を

鄧小平

中国共産党第十一回
全国代表大会における
閉幕のことば

(1977年8月18日)

治める八項目の戦闘任務を完成するため、今世紀中に、わが国を現代化された社会主義の強国に
きざきあげるため、毛主席のきりひらいたプロレタリア革命事業を最後までおしすすめるために
奮闘しなければならない。

中国共産党第十一次全国代表大会における

閉幕のことば

(一九七七年八月十八日)

鄧小平

同志のみなさん！

今回の代表大会は、英明な指導者華国鋒同志の主宰のもと、華主席をはじめとする大会主席団の正しい指導のもとに、全代表がともに努力して、華主席の政治報告を一致して採択し、新しい党規約および葉副主席の党規約改正についての報告を一致して採択し、新しい中央委員会を選出して、われわれの厳粛な任務をとどこおりなく完了した。

今回の代表大会は、毛主席のプロレタリア革命路線を堅持する大会であり、マルクス主義を堅持し、団結を堅持し、公明正大を堅持する大会であった。今回の大会は、民主集中制の原則を真

に体现し、民主をあますところなく発揚し、代表たちの気持がのびやかで、生きいきとしている雰囲気なかでひらかれた団結の大会、勝利の大会となった。

今回の大会は、毛主席の革命路線を全面的に、正しく貫徹し、わが党のすぐれた伝統とすぐれた作風を回復、発揚し、わが国の社会主義革命と社会主義建設を新たな発展の時期におしすすめた大会として、わが党の光栄ある歴史に記載されることであろう。

われわれはかならず、毛主席がわが党のためにうち立てた、大衆路線のすぐれた伝統と作風を回復、発揚し、真に大衆を信頼し、大衆に依拠し、大衆の声につぶさに耳をかたむけ、大衆の苦しみに心をくばり、片時も大衆から遊離しないようにしなければならぬ。われわれは、かくもりっぱな人民、かくもりっぱな党員と幹部をもっている。かれらは勤勉で勇敢で政治的自覚が高く、国家の大事に大きな関心をほらい、わが党に限りない信頼をよせている。これは、わが党があらゆる困難にうち勝ち、各分野で新たな偉大な勝利をたたかいたるうえでもっとも確実な保障である。

われわれはかならず、毛主席がわが党のためにうち立てた、实事求是のすぐれた伝統と作風を回復、発揚し、誠実な人間になり、誠実にものを言い、誠実に事をはこぶようにしなければならぬ。これは、共産党員としての最低限の基準である。かならず言論と行動を一致させ、理論と

実践を密接に結びつけ、見かけ倒しや大ぶろしきに反対し、空談義はやめ、大いに仕事をし、堅実に手がたく、刻苦精励しなければならぬ。

われわれはかならず、毛主席がわが党のためにうち立てた、批判と自己批判のすぐれた伝統と作風を回復、発揚し、党内およびすべての人民のあいだで、「気づいたことは何でも言い、言うことは残さずに言う」「言う者はとがめられず、聞く者はいましめとする」という原則を真剣に実行し、団結——批判——団結の方針を真剣に実行しなければならぬ。

われわれはかならず、毛主席がわが党のためにうち立てた、謙虚で慎み深く、おごりやあせりをいましめ、刻苦奮闘するというすぐれた伝統と作風を回復、発揚し、誠心誠意、中国人民と世界人民に奉仕しなければならない。

われわれはかならず、毛主席がわが党のためにうち立てた、民主集中制のすぐれた伝統と作風を回復、発揚し、全党、全軍、全国で、集中もあれば民主もあり、規律もあれば自由もあり、意志の統一もあれば、個人の気持がのびのびし、生きいきとして活発でもある、という政治的局面をつくり出すように努めなければならない。

「四人組」を粉砕してிரらい、全党、全国はその面目を一新し、われわれはすでに大きな勝利をかちとった。しかし、階級闘争は長期にわたるものであり、革命事業は止まるところのないも

のである。われわれはかならず、「四人組」反党集団にたいする偉大な闘争を最後までおしすすめなければならず、革命に力を入れて、生産を促し、仕事を促し、戦争へのそなえを促し、刻苦奮闘し、「四人組」の破壊による重大な損失と失われた時間を取りもどさなければならぬ。われわれは現実を直視しなければならぬ。われわれの前にはまだ、解決しなければならない多くの問題、克服しなければならない少なからぬ困難が横たわっている。われわれは、真に大衆を信頼し、大衆に依拠しさえすれば、かならずや一つまた一つと困難のうち勝ち、一つまた一つと新たな勝利をかちとることができるものと、かたく信じている。

全党、全軍、全国各民族人民は、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、まもり、毛主席の遺志を受け継ぎ、華国鋒同志をはじめとする党中央のまわりにいっそう緊密に団結し、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命を堅持し、党内党外、国内国外のすべての積極的要素を動員して、かなめをつかんで国を治めるといふ戦略的決定を実現させ、プロレタリア階級独裁を強固にするために、また今世紀中にわが国を偉大な社会主義の現代化された強国にきずきあげ、人類に比較的大きな貢献をするために奮闘努力しなければならない。

われわれの事業は正義のものである。

われわれの路線は正しいものである。

われわれの目的は、かならず達成されなければならない。

われわれの目的は、かならず達成されるであろう。

党の第十一次全国代表大会が勝利のうちに幕をとじたことをここに宣言する。

中国共産党第十一回
全国代表大会の新聞公報

(1977年8月18日)

中国共産党第十一次全国代表大会の新聞公報

(一九七七年八月十八日)

中国共産党第十一次全国代表大会は、一九七七年八月十二日から十八日まで北京で盛大にひらかれた。

英明な指導者華国鋒主席が大会を主宰した。

今回の大会は、われわれの偉大な指導者であり教師である毛沢東主席の逝去されたあと、わが党が王洪文・張春橋・江青・姚文元「四人組」反党集団粉砕の偉大な勝利をかちとった状況のもとでひらかれたものである。今回の大会は、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、毛主席のプロレタリア革命路線を堅持する大会であり、マルクス主義を堅持し、団結を堅持し、公明正大を堅持する大会であった。これは、団結の大会、勝利の大会であった。

代表大会は、八月十一日に予備会議をおこなった。会議は、二百二十三名の代表からなる今大会の主席団を選出した。華国鋒同志が主席団主席に当選し、葉劍英、鄧小平、李先念、汪東興同志が主席団副主席に当選し、汪東興同志が主席団秘書長を兼任した。予備会議は、十期三中総で

提起された今大会における三つの議題、つまり、(一) 中央委員会の政治報告、(二) 中国共産党規約の改正、および党規約改正についての報告、(三) 中央委員会の選出を一致して採択した。会議では、汪東興同志がおこなった、中国共産党第十一回全国代表大会代表の資格審査についての、中国共産党中央政治局の報告を一致して採択した。この報告は、審査の結果、全代表の資格は有効であると指摘した。

今回の大会に出席した代表は全部で千五百十名であって、全党の三千五百余万の党員を代表している。これらの代表は、各地区、各部門の党組織が厳格に党の民主集中制の原則にもとづいて、真剣に大衆路線をつらぬき、準備と協議をかさね、党内党外の大衆の意見を広範に求めたうえで、正式に選挙によって選出されたものである。代表には、党創立の時期からプロレタリア文化大革命までの、試練にたえぬいた老年、中年、青年の優秀な党員が包括されており、代表の多くは、各戦線での労働模範、先進工作者、戦闘英雄、ならびに工業は大慶に学び、農業は大寨に学ぶ面での進んだ人物である。代表のなかには、労働者、農民、兵士とその他の勤労人民が七二・四パーセントを占め、革命的知識分子が六・七パーセントを占め、革命的幹部が二〇・九パーセントを占めている。代表のなかには、女性の党員が一九パーセントを占め、少数民族の党員が九・三パーセントを占め、中年と青年の党員が七三・八パーセントを占めている。台湾省籍の

党員も代表を選んで大会に参加した。

八月十二日午後三時三十分、大会は人民大会堂で盛大に開幕した。英明な指導者華主席および葉劍英、鄧小平、李先念、汪東興副主席が主席台にあがったとき、満場の代表が起立し、あらしのような拍手がわきおこり、しばしのあいだ鳴りやまなかった。

華国鋒主席が大会の開幕を宣言し、楽隊が『東方紅』を奏した。

華主席は中国共産党中央委員会を代表して、大会に政治報告をおこなった。そのはじめに、華主席の提議で、全員が起立し、わが党、わが軍、わが人民共和国の創設者で、わが国のプロレタリア階級と各民族人民の偉大な指導者であり教師である毛沢東主席に哀悼の念をささげて、昨年逝去された、わが国民の偉大なプロレタリア革命家で、多年の試練にたえぬいた、毛主席の親密な戦友である、われわれの敬愛する周恩来総理、朱徳委員長に哀悼の念をささげて、十回大会いらいおよびそれ以前の数年のあいだに逝去された、わが国民の革命事業に卓越した功績をたてたプロレタリア革命家である康生同志、董必武同志、李富春同志、陳毅同志、賀龍同志に哀悼の念をささげて、また、この期間に逝去された、党と革命に大きな貢献をしたすべての中央委員ならびにその他の同志に哀悼の念をささげて、黙禱した。

華主席は報告のなかで、次のように指摘した。今回の代表大会は、重大な歴史的責務をになっ

ている。それはつまり、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、毛主席の遺志を受け継ぎ、王・張・江・姚「四人組」との闘争を総括し、党の基本路線を堅持し、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命を堅持し、党内党外、国内国外のあらゆる積極的要素を動員し、団結できるすべての力と団結して、かなめをつかんで国を治めるといふ戦略的決定を実現するため、今世紀中にわが国を偉大な社会主義の現代化された強国にきざきあげるために奮闘するということである。

華主席は次のように指摘した。五十余年にわたる中国革命のすべての勝利は、いずれも毛主席の指導のもとに、毛主席の革命路線にみちびかれてかちえたものである。毛主席の旗じるしは、中国人民の革命の勝利の旗じるしである。毛主席はマルクス・レーニン主義をうけつぎ、まもり、発展させた、現代のもっとも偉大なマルクス主義者である。毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義の理論的宝庫のもっとも新しい財産であり、毛主席がわれわれの時代に残したもっとも貴重な遺産である。毛沢東思想の旗じるしは、世界人民の革命の勝利の旗じるしでもある。毛主席が革命理論と革命実践の面で、中国人民のため、全世界のプロレタリア階級と革命的人民のためにうちたてた偉大な功績は、永遠に不滅である。われわれはかならず、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、断固としてこれをまもりぬかなければならず、毛主席の偉大な旗じるしを

伝家の宝として、代々伝えていかなければならない。これは、われわれ全党、全軍、全国各民族人民の神聖な責務であり、われわれが団結してたたかい、ひきつぎ革命をおこなううえでの政治的基礎であり、わが国の社会主義事業と国際プロレタリア革命事業を前進させるうえでの勝利の保証である。

華主席は、わが党の十一回目の路線闘争を総括したい、次のように指摘した。われわれの毛主席は英明かつ偉大で、「四人組」の反党活動を早くから察知しており、なんどもかれらにたいして厳正な批判ときびしい警告をあたえ、みずからわが党を指導してかれらと再三にわたる闘争をおこなった。毛主席の一連の重要な指示と英明な決定は、のちにわれわれが「四人組」の問題を解決するうえでの基礎をきざした。党の十一回目の路線闘争の偉大な勝利の功績は、偉大な指導者毛主席に帰すべきであり、偉大な毛沢東思想と毛主席の革命路線に帰すべきであり、われわれの偉大な党、偉大な軍隊、偉大な人民に帰すべきである。

華主席は報告のなかで、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命についての毛主席の偉大な理論に、正確な解明をくわえた。華主席は、次のように指摘した。毛主席は、マルクスとレーニンの思想をうけつぎ、まもり、発展させ、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の偉大な理論を体系的につくりあげた。この偉大な理論は、プロレタリア革命に勝利した国家は

いかにしてプロレタリア階級独裁を強固にし、資本主義復活を防止し、社会主義を建設するかに
ついでに根本的な道をはっきりと示している。これは、毛主席がプロレタリア革命とプロレ
タリア階級独裁の理論になしたもつとも大きな貢献であり、それはマルクス主義の発展史におい
て、とくに重要な位置を占めている。

華主席は、次のように指摘した。わが党の十一回目の路線闘争は、思想理論上からいえば、プ
ロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の理論を堅持するか、それとも改ざんするか、とい
う問題をめぐってくりひろげられたものである。これが、こんどの路線闘争の重要な特徴であ
る。「四人組」は、毛主席の偉大な理論、社会主義の全歴史的段階における党の基本路線、党内
走資派の問題についての毛主席の体系的な論述を全面的に改ざんした。かれらは「老幹部は『民
主派』、『民主派』はすなわち『走資派』である」という反革命的な政治綱領を持ちだして、われ
われの党内と軍隊内に「一つのブルジョア階級」が存在していると誹謗し、社会主義の歴史的段
階における敵味方の関係を根本的に転倒して、党、政府、軍隊の数多くの革命的指導幹部を打倒
し、わが党をつぶし、われわれの軍隊をつぶし、プロレタリア階級独裁をくつがえし、資本主義
を復活させようとした。華主席は毛沢東思想を武器として、「四人組」の反革命的な政治綱領を深
くほりさげて批判した。華主席は、次のように指摘した。党と国家の最高権力がマルクス・レー

ニン主義の路線を堅持する指導的中核の手に握られているかぎり、走資派は党内では一にぎり
すぎず、また、たえず摘発され、肅清されていくので、一つのブルジョア階級を形成することは
不可能である。わが党の圧倒的多数の老幹部は、プロレタリア革命派であって、決してブルジョ
ア民主派ではない。毛主席の提起した「三つのやるべきこと、三つのやってはならないこと」の
基本原則は、党内走資派を見わける根本基準をはっきりさし示している。この基準を堅持すれ
ば、われわれは広範な幹部と大衆をみちびいて、劉少奇、林彪、「四人組」のような、あくまで
悔い改めない走資派を的確に識別し、かれらを徹底的に孤立させ、集中的に打撃をあたえること
ができるのである。

華主席は、「四人組」反党集団の粉砕は、プロレタリア文化大革命のいま一つの偉大な勝利で
ある、と指摘した。華主席は、プロレタリア文化大革命の偉大な勝利の成果とその歴史的意義を
強調し、わが国の今回のプロレタリア文化大革命は、かならずプロレタリア階級独裁史上の偉大
な創舉として歴史に記載されるであろう、と指摘した。華主席は、次のようにのべた。「四人
組」が打倒されたこんにち、われわれは毛主席の指示にもとづいて、安定と団結を実現させ、天
下大いに治まるにいたることができるようになった。こうして、十一年にわたるわが国の第一次
のプロレタリア文化大革命は、「四人組」粉砕をその標識として勝利のうちに幕をとじたことを

宣言したのである。しかし、これは決して、階級闘争が終わったことを意味するものではなく、決してプロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命が終わったことを意味するものではない。われわれは、かならず毛主席の教えをまもって、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命をあくまでもおしすすめなければならない。

毛主席は報告のなかで、当面のすばらしい国際情勢に分析をくわえ、また、革命の要素がひきつづき増大すると同時に、戦争の要素もいちじるしく増大している、と指摘した。ソ米両国は、新たな世界大戦の策源地であり、とりわけソ連社会帝国主義は、いっそう大きな危険性をもっている。各国人民は、警戒心をたかめ、緊密に団結し、たゆみない闘争をすすめるなければならない。毛主席は、次のようにのべた。われわれは毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、プロレタリア国際主義を堅持し、ひきつづき毛主席の革命的な外交路線を貫徹しなければならない。われわれは、社会主義諸国との団結をつよめ、全世界のプロレタリア階級、被抑圧人民、被抑圧民族との団結をつよめ、第三世界諸国との団結をつよめ、帝国主義と社会帝国主義の侵略、転覆、干渉、支配、侮辱を受けているすべての国と連合してもっとも広範な統一戦線を結成し、ソ米両超大国の覇権主義に反対しなければならない。われわれは、平和共存の五原則を基礎にして各国と関係を樹立し、発展させなければならない。われわれは、全世界のすべての真のマルクス・レーニ

ン主義の政党、組織との団結をつよめ、ソ修裏切り者集団を中心とする現代修正主義に反対する闘争を最後までおしすすめなければならない。

毛主席は、三つの世界の区分についての毛主席の理論を深くほりさげて解明し、次のように指摘した。この理論は、当面の国際闘争の大方向をはっきりさし示し、だれが主要な革命勢力であり、だれが主要な敵であり、だれが獲得し、連合することのできる中間勢力であるかということをも明確にし、こうして、国際プロレタリア階級が世界的な範囲での階級闘争において、団結できるすべての勢力と団結し、もっとも広範な統一戦線を結成して主要な敵とたたかうことができるようにした。これは、現代における国際プロレタリア階級の正しい戦略的、戦術的規定であり、国際闘争のなかでのプロレタリア階級の階級路線である。

毛主席は、次のように指摘した。第一次プロレタリア文化大革命が勝利のうちに終わったことによって、わが国の社会主義革命と社会主義建設は、新たな発展の時期にはいった。情勢はひじょうにすばらしく、人心は国が治まることを望んでいる。「四人組」を摘発、批判する偉大な階級闘争に促されて、国民経済には新たな躍進の局面が現われつつある。科学技術戦線での革命と教育革命、文学・芸術革命、医療・衛生革命は発展している。

毛主席は次のように指摘した。かなめをつかんで国を治めるといふ党中央の戦略的決定の核心

は、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、まもり、思いきって大衆を立ちあがらせ、団結できるすべての力と団結して、「四人組」を摘発、批判する偉大な闘争を最後までおしすすめ、かれらの反革命修正主義路線の流した害毒と影響を一掃し、十一回目の路線闘争の勝利の成果をうち固め、発展させ、わが国の政治、経済、軍事、文化、対外活動の各分野で、毛主席のプロレタリア革命路線を全面的に正しく貫徹することである。

華主席は報告のなかで、当面および今後の一時期における、わが党がかなめをつかんで国を治めるうえで八項目の主な戦闘任務、つまり、かならず「四人組」を摘発、批判する偉大な闘争を最後までやりぬくこと、かならず整党整風をりっぱにやり、党建設を強化すること、かならず党の各級指導グループをりっぱに整頓、建設すること、かならず革命に力を入れて生産を促し、国民経済を発展させること、かならず文化・教育領域の革命をりっぱにやり、社会主義の文化・教育事業を大いに発展させること、かならず人民の国家機構を強化すること、かならず民主を奨励し、民主集中制を健全にすること、かならず全般的に配慮し、全面的に按配する方針を貫徹し、すべての積極的要素を動員して、社会主義を建設することについて、いちだんと解明した。華主席は、次のようにのべた。われわれは、さらに思いきり大衆を立ちあがらせ、「四人組」の反革命修正主義路線の極右の本質と各方面におけるそのあらわれをつつこんで摘発、批判する人

民戦争を大々的にすすめなければならぬ。党をのっとり権力を奪取する「四人組」の陰謀活動とかかわりのあった者や事実を摘発、審査することは、「四人組」を摘発、批判する闘争の重要な構成部分であり、かならず大衆を十分に立ちあがらせて、はっきりするまで調査しなければならぬ。同時に、運動が深まれば深まるほど、党の政策に気をつけ、九五パーセント以上の幹部、大衆と団結して、「四人組」および罪状が重大でしかも悔い改めようとしないその一にぎりの頑迷な徒党を最大限に孤立させ、集中的に打撃をあたえるようにしなければならない。

華主席は次のことを明らかにした。中央は、適切な時期に第五期全国人民代表大会を招集し、同時に中国人民政治協商会議第五期全国委員会を招集することを決定した。われわれは、真剣に努力し、党内党外のすべての積極的要素を動員し、全党、全軍、全国各民族人民の大団結をつよめて、プロレタリア階級独裁を強固にし、偉大な社会主義祖国を建設するため、ともに奮闘しなければならない。

華主席の四時間にわたる政治報告は、たえずあらしのような拍手をうけた。

八月十三日午後三時三十分、第二回全体会議がおこなわれた。熱烈な拍手にむかえられて、葉劍英副主席が中国共産党中央委員会を代表して、党規約改正についての報告をおこなった。

葉副主席はまず次のように指摘した。華国鋒同志は毛主席がみずから選んだ後継者である。

華主席をはじめとする党中央の政治路線と組織路線がまったく正しいことは、実践をつうじて立証されている。華主席こそは、毛主席のよき学生、よき後継者にふさわしく、わが党とわが国民の英明な指導者にふさわしく、わが軍隊の英明な統率者にふさわしい。華主席は、毛主席のきりひらいたプロレタリア革命事業をたえず前進させ、わが党、わが軍、わが国各民族人民をみちびいて勝利のうちに二一世紀へと力強く足をふみ入れることができるに違いない。

葉副主席は次のように指摘した。「四人組」は、党の建設を破壊し、ブルジョア階級の姿にあわせてわが党を改造しようとたくらんだ。われわれは、毛主席の党建設の思想にもとづき、十一回目の路線闘争の新たな経験をくみとって、十回大会の党規約にたいし必要な改正をおこなうべきである。

葉副主席は、党規約改正案について、次の八つの面で重要な説明をおこなった。つまり、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、まもることにについて、党の性質と指導思想について、社会主義の全歴史的段階における党の基本綱領および党の基本任務について、「三つのやるべきこと、三つのやってはならないこと」の基本原則について、党の民主集中制について、党の幹部路線について、党のすぐれた伝統とすぐれた作風を保持し発揚することについて、黨員と党の基層組織にたいする要求について、である。

葉副主席は次のように指摘した。新しい党規約は、全党は、かならずマルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想の偉大な旗じるしを永遠に高くかかげ、断固としてこれをまもり、わが党の事業がひきつづきマルクス主義の路線にそって勝利のうちに前進することを保証しなければならぬ、と強調している。新しい党規約は、党は、あくまで修正主義に反対し、教条主義と経験主義に反対し、弁証法的唯物論と史的唯物論の世界観を堅持し、観念論と形而上学の世界観に反対する、と強調している。新しい党規約は、「三つのやるべきこと、三つのやってはならないこと」の基本原則を堅持するという問題をきわだたせ、三項目の基本原則に反する潮流にたいしては、敢然としてこれに立ちむかう革命精神がなければならぬと、強調している。新しい党規約は、民主集中制がこのうえなく重要であることを強調し、民主を十分に発揚すべきであって、いかなる者も批判をおさえたり、仕返しをしたりすることは絶対に許されず、批判をおさえたり、仕返しをしたりする者は、査問に付し、処分すべきであると規定しており、また、民主が必要であるだけでなく、集中がなおさら必要であって、党の規律を強化しなければならぬと強調している。新しい党規約は、民主集中制の原則と規律をまもるため、規律検査委員会を設けることを規定している。新しい党規約はまた、毛主席の提示した五つの条件にもとづいて、大衆闘争のなかで何百万何千万というプロレタリア革命事業の継承者を育成し養成しなければならず、老年、中年、

青年の三結合という原則にもとづいて各級の指導グループをつくっていかなければならないことを規定している。新しい党規約は、大衆路線と実事求是のすぐれた伝統を保持、発揚していかなければならないことを強調している。新しい党規約は、党員の政治的な質を保証するため、新党員は、一律に一年の予備期間を経てはじめて、正式党員になることができると規定している。

葉副主席は次のように指摘した。党規約改正案は、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、十分に毛主席の党建設の学説を具体化しており、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の理論と路線を貫徹させており、「四人組」粉砕の偉大な闘争の勝利の成果を反映している。葉副主席は次のように指摘した。今回の代表大会で採択される新しい党規約は、わが党の思想建設と組織建設を強化する重要な武器となるであろう。党の各級組織と各党員は、みな党規約を真剣に学習し、厳格に遵守し、断固として実行しなければならず、党規約に違反するすべての言論、行動と闘争しなければならぬ。

大会は、華主席と葉副主席の報告および党規約改正案を真剣に、熱心に討論した。代表たちは、気持がのびのびし、おもう存分に発言し、会議は、生きいきとして、生氣にあふれる雰囲気なかですすめられ、わが党のすぐれた伝統とすぐれた作風を発揚し、党の団結と繁栄をしめししていた。

代表たちは、討論のなかで、偉大な指導者であり教師である毛主席の卓抜した業績を熱情こめてたたえ、全党を指導して「四人組」を粉砕し、われわれの党と国家を救った英明な指導者華主席の偉大な功績をたたえた。大会は次のことを確認した。華主席の政治報告は、マルクス主義・レーニン主義・毛沢東思想の偉大な旗じるしを高くかかげ、党の十一回目の路線闘争の基本的経験を全面的に総括し、毛主席のプロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命の偉大な理論を正確に解明し、国際情勢と国内情勢を深く分析して、当面と今後の一時期における任務をはつきりとうち出しており、それは、わが党、わが軍、わが国人民をみちびいて社会主義革命と社会主義建設の新たな勝利をかちとる戦闘的綱領である。

代表たちは、各戦線の実際と結びあわせて、「四人組」の反共、反人民、反革命の極悪非道の罪状をいさどおりをこめて摘発、批判した。大会は、わが党が王・張・江・姚反党集団を粉砕し、十一回目の路線闘争の偉大な勝利をかちとったことに、熱烈な歓呼をおくった。大会は、華国鋒同志をはじめとする党中央が「四人組」を粉砕するためにとった一連の措置に、全面的な賛意をあらわし、王洪文・張春橋・江青・姚文元反党集団にかんする十期三中総の決議に、全面的な賛意をあらわし、「四人組」を摘発、批判する闘争をかならずすすめる決意を表明した。

代表たちは、国際情勢と国内情勢を討論し、党の十一回目の路線闘争の偉大な勝利は、国内情

勢のすばらしさをしめす根本的な目録であると指摘した。工業は大慶に学び、農業は大寨に学ぶ大衆運動は、かつて見なかったほどの規模でめざましく発展しつつある。比べあい、学びあい、追いつき、助けあい、追いつくという社会主義的競争は、幅広くくりひろげられつつある。工農業の各戦線では、歴史的な新しい水準がたえずつくり出されており、勝利の知らせがしきりに伝わってきている。大会は、決意のほどを次のように表明した。かならず華主席をはじめとする党中央の指導のもとに、勝利の波に乗って前進し、革命に力を入れて、生産を促し、仕事を促し、戦争へのそなえを促し、いっそうすばらしい成績をつくり出して、「四人組」の攪乱と破壊によってもたらされた損害を取りもどし、わが国を社会主義の現代化された強国にきずきあげるために、いっそう大きな貢献をしなければならない。

代表大会は、八月十八日午後三時、第三回全体会議をおこなった。代表たちは十分な協議と準備の基礎のうえで、無記名投票の方式で中国共産党第十一期中央委員会を選出した。大会は、政治報告についての決議を一致して採択し、中国共産党の新しい党規約および党規約改正についての報告を一致して採択した。大会執行主席鄧小平同志が、英明な指導者華国鋒同志が中央委員会委員に当選したと発表したとき、満場にあらしのような熱烈な拍手がしばしのあいだ鳴りやまなかった。当選した中央委員は全部で二百一名、中央委員候補は百三十二名である。

鄧小平副主席は、熱烈な拍手のなかで、閉会のことをのべた。鄧副主席は、今回の大会は、毛主席の革命路線を全面的に、正しく貫徹し、わが党のすぐれた伝統とすぐれた作風を回復、発揚し、わが国の社会主義革命と社会主義建設を新たな発展の時期におしすすめた大会として、わが党の光栄ある歴史に記載されることであろう、と指摘した。

鄧小平副主席は、次のようにのべた。われわれはかならず、毛主席がわが党のためにうち立てた、大衆路線のすぐれた伝統と作風、实事求是のすぐれた伝統と作風、批判と自己批判のすぐれた伝統と作風、謙虚で慎み深く、おごりやあせりをいましめ、刻苦奮闘するというすぐれた伝統と作風、民主集中制のすぐれた伝統と作風を回復、発揚し、全党、全軍、全国で、集中もあれば民主もあり、規律もあれば自由もあり、意志の統一もあれば、個人の気持がのびのびし、生きいきとして活発でもある、という政治的局面をつくり出すように努めなければならない。

鄧副主席は、つぎのように指摘した。「四人組」が粉碎されていらい、全党、全国はその面目を一新し、われわれはすでに大きな勝利をかちとった。しかし、われわれの前にはまだ、解決しなければならない多くの問題、克服しなければならない少なからぬ困難が横たわっている。われわれは、真に大衆を信頼し、大衆に依拠しさえすれば、かならずや一つまた一つと困難にうち勝ち、一つまた一つと新たな勝利をかちとることができるものと、かたく信じている。

鄧副主席は、全党、全軍、全国各民族人民に、毛主席の偉大な旗じるしを高くかかげ、まもり、毛主席の遺志を受け継ぎ、華国鋒同志をはじめとする党中央のまわりにいっそう緊密に団結し、プロレタリア階級独裁のもとにおける継続革命を堅持し、党内党外、国内国外のすべての積極的要素を動員して、かなめをつかんで国を治めるといふ戦略的決定を実現させ、プロレタリア階級独裁を強固にするために、また今世紀中にわが国を偉大な社会主義の現代化された強国にきずきあげ、人類に比較的大きな貢献をするために奮闘努力するよう、呼びかけた。

中国共産党第十回全国代表大会は、雄壮な『インターナショナル』の歌声のなかで、勝利のうちその幕を閉じた。

中国共産党第十回全国代表大会主席団の名簿

(二百二十三名)

主席 華国鋒
 副主席 葉劍英 鄧小平 李先念 汪東興
 秘書長 汪東興(兼)

(以下の排列は姓の中国簡略文字筆画順による)

丁可則	丁国鈺	于桑	于洪亮	万達	万里
馬力	馬輝	馬興元	馬金花(女)	馬榮莉(女)	
ティエンパオ(天宝)	王平	王昆(女)	王静	王猛	
王謙	王震	王一平	王必成	王光宇	王秀秀(女)
平冶秋	王茂全	王林鶴	王金友	王首道	王恩茂
王超柱	章国清	尤太忠	毛致用	ウブル・イスラム(烏布利)	
烏蘭夫	方毅	鄧穎超(女)	孔原	孔石泉	孔憲武
孔照年	パサン(巴桑)(女)		葉飛	盧忠陽	白如水

白棟材	馮鉉	イスマイル・アイマツト (司馬義・艾買提)	邢燕子 (女)
呂玉蘭 (女)	呂正操	呂存姐 (女)	喬曉光
伍修權	任榮	任仲夷	任思忠
劉子厚	劉光濤	劉興元	劉伯承
劉錫昌	江華	江礼銀	江擁輝
安平生	閔沢海	閔曉紅 (女)	許世友
紀登奎	杜義德	楊勇	楊成武
楊湘琴 (女)	蘇靜	蘇振華	蘇毅然
李子元	李井泉	李水清	李世俊
李啓德	李昌安	李維康 (女)	李葆華
蕭華	蕭克	蕭勁光	吳德
吳冷西	吳桂賢 (女)	吳梅英 (女)	何広乾
シヤバ (希候巴)	汪鋒	汪平化	汪明章
張才千	張玉華	張愛萍	張立憲
張炳熿	張桂金	張錫聯	張錫秀
		陳丕顯	陳永林
		陳錫聯	陳福漢
		林麗韞 (女)	羅青長
		周建人	周培源
		郝建秀 (女)	趙志堅
		饒興礼	婁鳳英 (女)
		聶榮臻	ジャナビル (賈那布爾)
		鉄瑛	倪志福
		郭沫若	郭耀卿
		黃歐東	黃知真
		鹿田計	梁必業
		蔣宝娣 (女)	覃心機
		曾紹山	曾思玉
		廖志高	廖承志
		潘時興	霍士廉
		陳永林	陳水貴
		陳錫聯	陳慕華 (女)
		羅青長	羅瑞卿
		趙志堅	趙蒼壁
		婁鳳英 (女)	姚依林
		ジャナビル (賈那布爾)	徐向前
		倪志福	唐克
		郭耀卿	曹里懷
		黃知真	韓英
		梁必業	粟裕
		覃心機	解學恭
		曾思玉	賽福鼎
		廖承志	戴光前
		霍士廉	譚啓龍
		陳永林	陳偉達
		陳錫聯	陳璞如
		羅青長	金明漢
		趙志堅	趙辛初
		婁鳳英 (女)	秦基偉
		ジャナビル (賈那布爾)	錢之光
		倪志福	徐寅生
		郭耀卿	姬鵬飛
		黃知真	曹軼歐 (女)
		梁必業	韓先楚
		覃心機	儲江
		曾思玉	蔡暢 (女)
		廖承志	
		霍士廉	

張耀詞	陳雲	陳丕顯	陳永林	陳水貴	陳偉達
陳奇涵	陳国棟	陳錫聯	陳福漢	陳慕華 (女)	陳璞如
林子加	林李明	林麗韞 (女)	羅青長	羅瑞卿	金明漢
周子健	周純麟	周建人	周培源	趙志堅	趙辛初
柯恂 (女)	胡耀邦	郝建秀 (女)	趙志堅	婁鳳英 (女)	趙蒼壁
趙紫陽	段君毅	饒興礼	婁鳳英 (女)	姚依林	秦基偉
耿飈	耿起昌	聶榮臻	ジャナビル (賈那布爾)	徐向前	錢之光
錢正英 (女)	錢学森	鉄瑛	倪志福	唐克	徐寅生
郭鳳蓮 (女)	郭玉峰	郭沫若	郭耀卿	曹里懷	姬鵬飛
黃華	黃鎮	黃歐東	黃知真	韓英	曹軼歐 (女)
康世恩	康克清 (女)	鹿田計	梁必業	粟裕	韓先楚
彭冲	彭紹輝	蔣宝娣 (女)	覃心機	解學恭	儲江
焦林義	魯大東	曾紹山	曾思玉	賽福鼎	蔡暢 (女)
蔡嘯	廖漢生	廖志高	廖承志	戴光前	
譚震林	樊德玲	潘時興	霍士廉		

中国共産党第十一期中央委員会の
委員と委員候補三百三十三名の名簿

中央委員二百一名

華国録

(以下の排列は姓の中国簡略文字筆面順による)

丁可則	丁国鈺	于桑	于明濤	于洪亮	万達
万里	馬力	馬輝	馬文瑞	馬興元	
テイエンパオ(天宝)		王平	王靜	王猛	王謙
王震	王一平	王世泰	王必成	王光宇	王秀秀(女)
王茂全	王林鶴	王国藩	王首道	王恩茂	王超柱
韋国清	尤太忠	毛致用	烏蘭夫	方毅	鄧小平
鄧穎超(女)	孔原	孔石泉	孔昭年	パサン(巴桑)	パサン(巴桑)(女)

葉飛	葉劍英	白如水	白棟材	馮敏	呂正操
イスマイル・アイマツト(司馬義・艾買提)		邢燕子(女)	呂玉蘭(女)	任榮	任仲夷
喬曉光	朱光珏	朱穆之	伍修權	劉光濤	劉興元
任思忠	劉偉	劉震	劉子厚	江華	江礼銀
劉伯承	劉建勳	劉春樵	劉錫昌	許世友	許家屯
江擁輝	江渭清	池必卿	安平生	楊成武	楊易辰
阮泊生	紀登奎	杜義德	楊勇	蘇毅然	李達
楊得志	楊靜仁	蘇靜	蘇振華	李世俊	李先念
李強	李子元	李井泉	李水清	李瑞山	李德生
李任之	李志民	李啓明	李葆華	李全清	吳桂賢(女)
蕭華	蕭克	蕭勁光	吳德	汪全清	汪東興
余秋里	谷牧	シャバ(希侯巴)	張才千	汪鋒	汪平化
汪明章	宋平	宋時輪	張愛萍	張玉華	張富貴
張立憲	張廷谿	張勁夫	張愛萍	張銜秀	張富貴
張福恒	張鼎丞	陳雲	陳丕顯	陳永貴	陳偉達

譚震林	樊德玲	薛金達	霍士廉	戴光前	譚啓竜
蔡嘯	廖漢生	廖志高	廖承志	賽福鼎	蔡暢(女)
焦林義	魯大東	曾紹山	曾思玉	解學恭	儲江
彭冲	彭紹輝	覃応機	粟裕	程子華	韓英
康世恩	康克清(女)	鹿田計	梁必業	韓英	韓先楚
黃華	黃鎮	黃歐東	黃知真	曹里懷	曹軼欣(女)
倪志福	徐向前	郭玉峰	郭沫若	唐克	姬鵬飛
耿起昌	聶鳳智	聶榮臻	錢之光	錢正英(女)	鉄瑛
段君毅	饒興礼	姚依林	賀誠	秦基偉	耿飈
胡耀邦	郝建秀(女)	趙志堅	趙蒼壁	趙辛初	趙紫陽
周建人	パオジレタイ(宝日勒岱)(女)	羅青長	羅慕華(女)	宗希雲	胡立教
林乎加	林李明	林麗韞(女)	羅瑞卿	趙希雲	周純麟
陳奇涵	陳國棟	陳錫聯	陳福漢	陳慕華(女)	陳璞如

中央委員候補百三十二名

馬思忠	王金友	金香蘭(女)	冉桂英(女)	呂和	劉西堯	劉道生	紀英林	楊富珍(女)	李昌安	蕭望東	吳金全
王六生	王金玲(女)	鄧華	馮占武	呂存姐(女)	劉志堅	劉瑞慶	杜平	李化民	李学智	吳忠	岑国栄
王扶之	レンズンワンジュエ(仁增旺杰)	厲日耐	馮品徳	呂霽園	劉明輝	江燮元	杜学然	李巧雲(女)	李祖根	吳火金	鄒家華
王君紹	左崇義	盧忠陽	ルツ・トルデイ(肉孜・吐爾迪)	朱紹清	劉重桂	閔沢海	楊大易	李成芳	李繼良	吳向必	宋慶友
王尚栄	盧忠陽	申茂功	向仲華	劉振華	許彪俊	楊永良	李守林	李耀文	李繼良	吳克華	沈初雲(女)
王金山	毛信賢(女)	任質斌	劉維明	孫雪梅(女)	楊俊生	李堅真(女)	蕭寒	吳冷西	張震		
馬明	馬金花(女)	馬明	馬明	馬明	馬明	馬明	馬明	馬明	馬明	馬明	馬明
ト谷香	ト谷香	ト谷香	ト谷香	ト谷香	ト谷香	ト谷香	ト谷香	ト谷香	ト谷香	ト谷香	ト谷香

中国共産党
 第十一期中央委員会
 第一回總會の新聞公報

(1977年8月19日)

張令彬	張懷連	張林池	張積慧	張植弟	張耀詞
陸金菴	陳仁甫	陳玉宝	陳永林	陳先瑞	陳作霖
陳愛娥(女)	金明漢	周子健	周阿慶	鄭三生	柳志強
胡松	胡良才	胡金娣(女)	趙興元	趙学全	趙武成
鐘夫翔	賀晋年	袁宝華	ジャナビル(賈那布爾)	郭鳳蓮(女)	ラグデ(熱地)
顧秀蓮(女)	錢学森	徐馳	徐立清	郭鳳蓮(女)	郭耀卿
高厚良	唐亮	唐克碧(女)	唐聞生(女)	梅松林	黄作珍
黄栄海	黄新廷	曹思明	盤美英(女)	康林	尉鳳英(女)
蔣宝娣(女)	程義太	謝正榮	蔡鳳蘭(女)	譚文貞(女)	譚善和
黎原	潘時興	薛金蓮(女)	冀桂昕	戴蘇理	魏興政

中国共産党第十一期中央委員会第一回総会の新聞公報

(一九七七年八月十九日)

中国共産党第十一期中央委員会は八月十九日、第一回総会をひらいた。会議は中央の機構を選出した。選挙の結果はつきのとおりである。

中央委員会主席 華国鋒

中央委員会副主席

葉劍英

鄧小平

李先念

汪東興

中央政治局委員

華国鋒

(以下の排列は姓の中国簡略文字筆画順による)

韋国清

烏蘭夫

方毅

鄧小平

葉劍英

劉伯承

許世友

紀登奎

蘇振華

李先念

李德生

吳德

余秋里

汪東興

張廷谿

陳永貴

陳錫聯

耿飈

聶榮臻

倪志福

徐向前

彭冲

中央政治局委員候補

(姓の中国簡略文字筆画順による)

陳慕華(女) 趙紫陽 賽福鼎

中央政治局常務委員會委員

華国鋒 葉劍英 鄧小平

李先念

汪東興

中国共産党第十一回全国代表大会文献集

1977年 初版発行

出版者 外文出版社
(北京阜成門外百万莊)
発行者 中国国際書店
(北京 P. O. Box 399)

取扱店 東方書店(東京) 亜東書店(東京)
中国書店(福岡) (株)内山書店(東京)
(株)滝江紅(東京) 朋友書店(京都)
(株)燎原書店(東京) 中華書店(東京)

番号: (日)3050-2770

3-J-1462
00150(精)
00100(平)

